西行

川田順

川田順著

西行

創元社

序

藤岡東圃博士校及著「異本山家集」明治三十九年刊卷末の「西行論」は、從來西行の傳記として書かれたものの白眉に相違ない。その冒頭「最もよく西行を知るには、歷史傳說の如きはさもあらばあれ、直下にその作歌に接するに如くはなし」の斷案は、さすがに烱眼である。後學の筆者、此の一言を服膺し、主として西行家集の歌と歌序とに重點を置きつつ、研究に從事させていただいて來た。

筆者の西行研究も久しいものだが、微力の悲しさ、捗々しく進展しない。ある時は一所に停滯し、ある時は行き過ぎて逆戻りもした。西行は、筆者の擔ふ荷として重過ぎるのかも知れぬ。ともかく、今日までに學び得たところを一卷に壓縮して、公にする。

小著内容の執筆は、第一に「傳關係歌抄」、第二に「事實」、第三に「評傳」の順序で進められた。讀者諸君にも、煩を厭はず、この順序を追うて讀んで下されたならば、と希ふ。さうして、誤謬乃至不備の點を指摘して下さるのみならず、更に積極的助言をも惜しまれないならば、筆者が今後の研究にとつて、忝いことである。歷史家にあらざる筆者が西行の實傳を研究するは、いふ迄もなく、西行の歌を眞に理解し、正當に批判せんがための用意に他ならぬ。換言すれば、後日「歌聖西行論」をものせんがための基礎を築きつつあるものと知つていただき度い。

昭和十四年十月

川　田　順

目次

西行

西行評傳

一　西行の一生

西行七十餘年に亙る長き生涯の敍述は、適當なる期別の下に行はれねばならぬ。何人といへども、一生の間には、幾度か生活及び心境の變化を、時としては飛躍さへを經驗する。其處に傳記上の期別を生ずる。

歌人西行の生活及び心境の變化乃至飛躍は、その詠歌の上に最も明らかに現はれて居らねばならぬ筈だ。もしも、西行の遺詠の全部が制作年次別に整理さ

れてゐたならば、問題は至極簡單であつたらう。不幸にして、山家集は、他の古歌集の殆どすべてがさうである如く、私共の註文通りには出來上つてゐなかつた。極めて非條理な、非學問的な、非傳記的な編纂方法によつて後世に傳へられた。遺詠にして制作年月を推定し得るものは、大方、此の小著の巻末に附けた「西行傳關係歌抄」の歌だけに過ぎなからうと思ふ。大部分は、三十歳の作か六十歳の作かさへ判斷する事の不可能なるものに屬する（讀者が勝手に盲斷する事は別として。）

こゝに於いて私は、「傳關係歌抄」と甚だ豐富ならざる歴史的資料とを參考として、西行傳の期別を大膽に決定せねばならぬ立場に在る。

第一、在俗時代 元永元年—保延六年 一歳—廿三歳

台記康治元年三月十五日條「答曰、廿五」から逆算して、誕生は鳥羽天皇の元永元年某月某日といふこと明らかである。平清盛も此の年に生まれた。後の待賢門院なる藤原璋子が中宮に立たせられたのも此の年の事であつた。翌二年五月廿八日、中宮の御腹に、後の崇徳院なる顯仁親王生坐遊ばされた。すなはち、院は西行と殆ど御同年であらせ給うたのである。

「西行法師、本族は佐藤、名は義淸、鎭守府將軍藤原秀郷の孫云々」と大日本史には略記してゐるが、尊卑分脈に據れば、詳細次の如し。西行本族の佐藤氏は、右大臣魚名の後、俵藤太秀郷に出。義淸憲淸・則淸・範淸とも傳は秀郷九代の裔に當る。父は左衞門尉康淸、母は監物源淸經女。一人の兄あり、仲淸と云。義淸の子一人、權律師隆聖。義淸の肩に「歌人、鳥羽院下北面、佐兵衞尉、母同仲淸、依道心俄發心出家、所々經行、法名圓位、號大寶房又號西行」と註。曾祖父公

清の時より家名佐藤を稱す。義清五代の祖（秀郷四代の孫）文行の母は同じく魚名流藤原利仁（鎭守府將軍）の女とあり。すなはち、義清の血は秀郷・利仁兩雄のそれを引いてゐる。奥州御館系圖（續群書類從第一五八卷）には則清の子隆聖及び一女としてあり、秀郷流系圖（續群書類從第一五五卷）には西行の子隆聖僧都一説弟としてある事を參考にせねばならぬ。隆聖も歌をよみ、新古今集冬歌に一首載せられてゐる。

題しらず　　權律師隆聖

朝ごとのあか井の水に年くれてわが世の程のくまれぬる哉

義清の母監物源清經女といふは、いかなる人か。「分脈」を調べると、清和源氏頼光流に、上西門院藏人頼綱の次子藏人清經といふが見える。けれども、これでは、義清の祖父（母の父）たるには、時代が少しく下り過ぎる乎と思ふ。

佐藤義清が社會に踏み出したのは、加冠直後、十五・六歲、時の權大納言德

大寺實能の隨身となつた時であつた。さうして宮中と德大寺家との御緣をたどり、やがて鳥羽院（上皇）の北面武士（下北面六位）として奉仕する事となつた。德大寺家と佐藤家との主從關係は義淸に始まつた次第でなく、父康淸、或は祖父季淸の頃からの因緣と考へられる。德大寺家は藤原北家の名門、殊に、當時は鳥羽中宮璋子（實能の妹）の御生家として、府中にも後宮にも勢力を持つてゐたであらう事は、想像するに難くない。北面義淸が兵法に精しく射御の術に練達せし颯爽たる武士であつた事は、台記（康治元年三月十五日條）及び東鑑（文治二年八月十五日條嘉禎三年七月十九日條）によつて確かめられる。

義淸（西行）が天賦の詩才を現はし始めたのも、北面時代の事であつた。山家集末尾の「百首」は、おそらく此の時代の所產（或は少し後）と考へられるが、遺詠中の處女作、

君が住む宿の坪には菊ぞ飾るひじりの宮といふべかるらむ

は保延二年、十九歳、鳥羽の南殿にて詠まれたものである。藤原俊成（當時顯廣）との交際も此の頃から始まつた事は、俊成筆の御裳濯河歌合判詞の冒頭に「今、上人圓位、壯年の昔より互におのれ知れるによりて、二世の契を結びをはりき。」「昔、天承長承の比ほひより、かくの如く斯の道にたづさひて、或時は藐姑射の山の花のもとにつらなり、或時は雲居の月の前に見馴れし友も、昔の夢にのみなりぬるに、人の數にもあらず、桑の門のすて人となりながら、今まで世にながらへて、かやうのすずろことを書付侍る」云々によつて明らかだとする說が多い。俊成は永久二年生、西行よりも四歲長者である。山家集に屢次現はれる西住（俗名源次兵衞季政）といふ世捨人は、西行の大切な心友の一人であるが、傳記は全く傳はらない。二人は互に出家前からの友達で、一緒に、法輪寺の庵室に空仁といふ僧を訪問した事がある（聞書。殘集）出離後も永く莫逆の友であつた。西行の

交遊は殆ど皆貴族と云つてよい中に、西住の如き一介の寒衲は眞に異色であらねばならぬ。

保延五年五月十八日、鳥羽皇子體仁親王(後の近衞天皇)降誕遊ばされ、間もなく皇太弟に立たせ給うた。御兄崇德天皇、時に寶算廿一。保元亂の遠因これに在りと、愚管抄より大日本史に至るまで、古今の史書に書いてある。體仁親王の御母儀は、權中納言藤原長實の女にして、歌人顯季の孫女、御名を得子と申し、後の美福門院であらせられる。因みに、得子は永久五年生(西行より一歳御年上)。

又、此の年(保延五年)の何月であつたか、鳥羽離宮東隣に接して、安樂壽院本御塔(三重寶塔)が竣工した(山陵志)。これは、上皇萬歳の後、御舍利を納められんがために、躬みづから、あらかじめ建立し給うた佛塔なのである。さうして、本御

塔の南隣に新御塔なるものを御企畫遊ばされたが、この方は美福門院の御骨を納められんがためであつた。（新御塔の竣工はずつと後れて、久安三年とも云ひ、鳥羽院崩後の保元二年であつたとも傳ふ。）本御塔竣成の直後、上皇にはこれを檢分し給ふべく、大納言實能と御警衞の北面佐藤義凊と、その他少々ばかりを隨へられて、安樂壽院に御微行遊ばされた（山家集）。義凊、これが最後の供奉にならうとは豫期してゐたか、ゐなかつたか。出離の心持は、たしかに此の頃から動いてゐた。出家は翌年決行された。

山家集末尾の「百首」中に、

月の夜や友とをなりていづくにも人知らざらむ栖處（すみか）教へよ
いざさらば盛り思ふも程もあらじ藐姑射が嶺の春にむつれて
山ふかくかねて心は送りてき身こそ浮世を出でやらねども

雲につきてうかれのみゆく心をば山にかけてをとめむとぞ思ふ

これらを讀むと、彼が何事を考へつつあつたかは、大方わかる。保延六年春の歌に、

世にあらじと思ひける頃、東山にて人々霞に寄せて思ひを逑べけるに

空(そら)になる心は春の霞にて世にあらじとも思ひ立つかな

おなじ心をよみける

世を厭ふ名をだにもさはとどめおきて數ならぬ身の思出にせむ

義淸の菩提心は一年前、二年前、或はもつと以前から、漸くに萠(きざ)しつつあつたのだ。族人憲康の暴死に遇ひ惕然として悟つたなど云ふ類の出家物語は、小說に屬する。出離の年は保延六年、廿三歲、月日は十月十五日と云ふ事、台記康治元年三月十五日條、及び百錬抄卷六(保延六年十月十五日、佐藤右兵衞尉憲淸出家。年廿三、號西行法師)によつて疑

問なし。東鑑その他異說あれども、採るに足らず。

　　鳥羽院に出家のいとま申すとてよめる
惜むとて惜まれぬべき此の世かは身を捨ててこそ身をも助けめ

上皇の御覽に供する歌としては、畏多いほど理窟張つて居り、且つ棄鉢にも聞える。おそらく、この歌を差出してお暇を願つた次第ではなからう。上皇義淸の才を愛惜し、檢非違使に補せんと諭し給うたのを、彼固辭し奉つたといふ傳說も、もとより傳說に過ぎまい。父・祖父・曾祖父いづれも使廳の役人であつたので、かやうに辻褄を合はせたのであらう。西行說話の常套手段だ。

義淸は身分こそ低けれ、德大寺家の因緣をたどつて、崇德天皇に咫尺し奉つた事は明らかである。(土御門內裏に伺候して歌を詠んでゐる。)天皇もすぐれた歌人にましました。天皇の御境涯に對し奉り、出離前後を通じて深く御同情

申上げた事も、明らかである。天皇が義清の出離を惜しみ給うたであらう御事も、史乘にこそ殘らざれ、十分に拜察出來る。ともかく、義清は一切の繫縛をふりほどいて、緇衣を纏つた。法名を圓位といひ、大寶房又は西行と號したことは、尊卑分脈に載せてある通り。出家の原因は何であつたか。西行傳記の中でも解決最も困難の問題である。それだけに、又、いかやうにも說をなし得よう。愚按によれば、當年の世相に基く一般厭世觀と政治的原因とあつて、これに悲痛なる戀愛が點火したためと觀察し度い。詳しくは、別項「西行出家の原因」參照。

第二、出家直後時代 永治元年―久安三年 廿四歲―三十歲

出家後の數年間、西行は洛外を居所とした故に、これを洛外時代と名づけても支障ない。薙髮した、その年の暮には、鞍馬の奧に居たが、「筧の氷りて水

まで來ざりけるに、春になるまでは斯く侍るなりと申けるを聞きて」

わりなしや氷る筧の水ゆゑに思ひ捨てゝし春の待たるゝ

と、悲鳴に近い聲を出してゐる。台記に「重代勇士」「家富年若」云々と書かれた西行、その富裕なりし家を捨て、北面の勇士で無くなり、一寒衲となつてみると、修行も容易な業でない。「水まで來ざりけるに」と嘆息したのは、むしろ憫然である。翌永治元年出家第二年には東山に移つて、雙林寺や長樂寺と程近い所に庵を結んだ。(或は、兩寺のいづれかの坊に住み込んだのかも知れぬ。)

世を遁れて東山に侍りし頃、年の暮に人々まうで來て述懷し侍りしに

年暮れしそのいとなみは忘られてあらぬさまなる急ぎをぞする

此處はいふ迄もなく北山よりは賑しい。(雙林寺には鳥羽皇女綾雲尼公さへおはしました。)新發意の顏を見ようとて「人々まうで來」るやうな有樣だ。舊知の女官なども見えたかも知れぬ。それでも、歳暮はさすがに感慨に堪へない。

在俗時代のそれとは異なつて、佛壇を掃除したりする「いとなみ」に忙しい。年明けて、春康治元年にもなつた。人に誘はれて白河法勝寺あたりの花見に出かけたが、

散るを見てかへる心や櫻花むかしに變るしるしなるらむ

と述懐したのによれば、心境漸く坊主らしくなりつつあるのが窺はれよう。さて、洛東にもおちつき得ず、此の年の秋には嵯峨小倉山の麓に移り、さらに大堰川を渡つて法輪寺の邊にも住んだらしい。

山里は秋の末にぞ思ひ知る悲しかりけりこがらしの風

といふ秀吟は「法輪にて」の一首。又、北山とも嵯峨ともわからぬが、出家直後の作に、

遁世ののち山家にてよみ侍ける
山里は庭の梢のおとまでも世をすさみたるけしきなるかな

「山家集」といふ命名は此の歌の詞書に由來すといふ說もある。西行は遁世後一二年の間に、かやうに、鞍馬・東山・嵯峨と、轉々居を移したが、それを修道のためとむづかしく解釋するには及ばぬ。田舍書生が東京に出た當座、むやみに下宿屋を替へると同じやうな心理に基く。それはともかくとして、西行はここで僞らざる告白をした。曰く、

世の中を捨てて捨てえぬ心地して都離れぬわが身なりけり
捨てたれど隱れて住まぬ人になれば猶世にあるに似たるなりけり

新發意西行が洛外をさまよひつつある間に、天下は容易ならぬ形勢となつて行つた。永治元年（西行出家の翌年）は歷史上重大の意義を持つ年である。三月十日鳥羽院寶算三十九にして出家遊ばされ、法皇となり給うた。十二月七日待賢門院御所生の崇德天皇寶算廿三にして讓位遊ばされた。美福門院御所生の幼き皇太弟

近衛天皇即位し給うた。西行豫想したところの動亂に向つて、歴史の歩みは進んだのだ。

康治元年（西行廿五歳）の二月廿六日、櫻花爛漫の頃、崇德上皇の御母儀待賢門院には、御壽四十二にて落餝遊ばされ、西行の知人なる女官堀川局その他もお供して尼となつた。寂しい御事である。嵯峨の西行は無論これを拜聞した。加之、中納言局といふ女房から御結縁のために勸められ、顯廣（俊成）等と共に、法華經廿八品の歌を詠じた（山家集。長秋詠藻）。女院に奉つたものかと想像される。三月十五日には、一品經供養を勸めんと、今を時めく内大臣賴長の門に立つた。台記同日の條に、

十五日戊申、令二侍共射一レ弓、西行法師來云、依レ行二一品經一、兩院以下、貴所皆下給也、不レ嫌二料紙美惡一、只可レ用二自筆一、余不二輕承諾一、又余問レ年、

答曰、廿五（去々年出家、廿三）抑西行者、本兵衞尉義淸也（左衞門大夫康淸子）以二重代勇士一仕二法皇一、自二俗時一入二心於佛道一、家富年若、心無レ愁、遂以遁世、人歎二美之一也、

右文後半は西行出家の年を決定するもので貴重である。但、私が此處に抄出した所以は、前半一品經云々の部分を參考にし度いからである。一品經といふのは法華經廿八品を一品づつ一軸にする事（諸人寄集まつて各一品を歌によみ、功德とする事）に相違ない。台記によれば、此の時、內府に一品の歌を詠じて自筆してもらひ度い、料紙の善惡は問はぬ、と西行から申入れた、と云ふ意味に取れる。さて、此の台記に記された一品經和歌と、長秋詠藻及び聞書集に載せられた廿八品和歌との關係が如何なのであらうか。兩家集には各廿八品づつ詠んであるから、賴長に勸めた一品經云々とは別個のものと考へられるけれども、殆ど時を同じくしてゐるので、少々存疑。翌二年、春長けて櫻花も散る頃、

西行は菩提院前齋院統子内親王（後の上西門院）の御所に伺候し、女房等と別れの歌を詠みかはした。内親王は崇德上皇の御同母妹であらせられる。西行は關東奥羽の大行脚を思ひ立ち、お暇を言上に參殿したのであつた。崇德院の御退位、引續いて母后門院の御出家、これらを聞くにつけて、西行は京洛の地に居たたまらなくなつた。修行かたがた僻遠の地に立去らうと發心したのであらう。

鈴鹿山憂世をよそにふり捨てていかになりゆく吾が身なるらむ

伊勢大神宮に參詣し、二見浦の暮春をめで、伊良胡崎に松魚釣りを觀、鷹の渡る話をめづらしがり、やがて海道を下つて、秋風ふく頃に白河を越えた。

白河の關屋を月のもる影は人の心をとむるなりけり

この一首は「關屋の柱に書付」けた由だが、關守にとがめられなかつたのを見ると、都の歌僧として此の頃既に、少々ばかりでも、名を知られてゐたものらしい。平泉まで行つて、同族藤原氏に投じたであらう事は間違ひあるまい。押

領使基衡なほ存命で、其の子秀衡は此の時四十八歳(西行よりも廿二年長者)であつた。白河鳥羽兩帝の御宇、長治大治の間に建立せられた毛越寺・中尊寺は金碧未だ褪せず、華麗人目を駭かし、都育ちの西行も陸奥藤原の豪奢には膽を奪はれたであらう。平泉にいつ迄厄介になつてゐたか、歸路は東海か、木曾路か、北越か、さやうの詳しい事は不明だけれども、崇德上皇詞花集の歌を召さるる頃天養元年、西行歸洛してゐた事は、山家集出の寂超・想空等との贈答歌によつて推定される。話は少しくさきの事だが、ここでついでに述べると、仁平元年奏覧の詞花集(顯輔撰)に、西行の歌一首、「讀人しらず」として採られた。

世を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ

久安元年八月廿二日、待賢門院三條高倉第にて崩ず、御壽四十五台記。失意の御境涯中に晏駕と恐察される。御遺骸は衣笠山の東香隆寺に納めまゐらせた。

堀川局・兵衞局・中納言局・帥局などいふ女房達、世をはかなんで洛西仁和寺のほとり、或は嵯峨野の奥に隱栖した。奥羽行脚から歸つた西行も、丁度この頃、おなじく西山邊に草庵を營んでゐたものらしい。おのづから、女房達と彼との往來は繁かつた（山家集）。一例を擧げれば、女院崩御の翌春、高倉第にて「南おもての花ちりける頃」西行と堀川局とは懷舊の歌を詠みかはしてゐる。それから、堀川局の家集を繙くと、當時の人情のいかに輕薄であつたかを窺ひ得る。女院御遺愛の法金剛院（仁和寺の）の庭は、やがて夏草の茂るに任せて、人影を見ない。御忌の日に、たまく近衞天皇石淸水行幸の御事があつた。廷臣宮女らは皆行幸の供奉へと爭ひ奔つて、女院の新陵には詣でる人も無い。西行は、むろん、かやうの次第と知つてゐたのである。

西行は出家して、世相を靜觀すると、人間の淺間しさを一層深く識るやうに

なつた。殊に關東奥羽の旅によつて、苦しい修行もし、さまぐ\の體驗もした。今なほ「都離れぬ」身ではあるけれども、若いながら僧侶としての貫祿も漸く加はつて來たらしい。それは堀川局の彼に對する態度によつても想像し得る。仁和寺の坊にゐた彼女が、或時、西行の許へ、

西へ行くしるべと頼む月影の空頼めこそかひなかりけれ

と言ひ贈つた。約二十歳も年上の女から、「西へ行くしるべ」と頼まれるやうになつたのである。又、彼女重患の時、

この世にて語らひおかむ杜鵑死手の山路のしるべともなれ

といふ歌を示した。いまはの際に正覺の手引して下さいと、西行に哀願したのである。いくら舊知の間柄でも、お世辭で言へる文句では無い。

さらば、西行の信仰は如何なるものであつたか、今日から到底究明し難く、

殊にその方面に暗い私に取つては、殆ど不可能事と云ふ方がよい。唯、遺詠等から歸納して、朧氣の事を言ひ得るのみである。西行の生涯を通じて概觀すれば、主として眞言宗に歸依し、空海を理想的宗教人と渇仰した事に疑問は無い。法名圓位は天台圓教六位の證果を瞻仰したもの、號西行は西方往生の淨土的思想を暗示するもの。菩提心論・心經・千手經を諷誦するかと思へば止觀・觀心の題下に吟詠し、顯密二乘の間に自在に出入する。法華經廿八品・十念成就・六道障碍・地獄繪・倶舍論・本地垂迹、歌ふ所、心の嚮ふ所、紛然又雜然、何が何だか、かいもく分らぬとも言へるが、後述の如く、半生を高野に送り、最後の依止を眞言宗の弘川寺に求めた事から考へて、西行を眞言密乘の行者と斷ずる事の根本は動かぬ筈だ。

概觀はさうとして、出家直後の行動を遺詠に現はれた所によつて跡づけるに、

先づ鞍馬(北山寺)に隠れたらしいが、鞍馬寺は當時天台の支院であつた。其處から直ちに居を移した東山、その雙林寺も長樂寺も靈山も皆天台別院であつた。やがて反對の西山に庵を結んだのであるが、法輪寺も大覺寺も神護寺も悉く眞言の道場であつた。仁和寺はいふ迄もない。かやうに西行轉々の迹をたどると、おのづから、彼が信仰の推移もわかるやうに思はれる。さうして、初めて、本氣で坐り込んだのは、醍醐理性院であつたらしい。この名刹は、永久三年僧賢覺の開創にかかる眞言宗の寺院であつた。傳燈廣錄の傳法嗣祖統派續八卷、醍醐理性院三世宗命の條下、付法の人々を擧げたる中に、鎌倉二郎源次兵衞季正入道して西住といひ、理性法脈を得云々と記してある。又、聞書集に、

醍醐に東安寺と申して理性房の法眼の房にまかりたり
けるに、遽に例ならぬ事ありて大事なりければ、同行
に侍りける上人達まで來あひたりけるに、雪の深く降

りたりけるを見て、心に思ふことありてよみける
賴もしな雪をみるにぞ知られける積る思のふりにけりとは

かへし　　　　　　　　　　西住上人

さぞな君心の月をみがくにはかず〳〵四方に雪ぞしきける

西行理性院にて重患に陷り、西住等が看護したのであるが、傳燈廣錄の記事と併せ讀めば、西行も亦理性法脈を傳へられた一人なること、疑問なくわかる。西行西住は互に心友、形影相離るべからざる者、各勝手な宗派に入る筈はない。

次に、西行の女友達の事を述べねばならぬ。山家集に女（高貴の御方々は除いて）の名が十三人出て來て、世捨人の生活に脂粉の氣を撒布してゐる。「世の中を捨てて捨て得」なかつたのも、無論、脂粉の氣のためだ。他に理由は無い。捨てぬ以前に捨て得ぬ云々と言つたのならば、種々の理由が立つ。一切の

ものを捨ててしまつてから、なほ捨て得ないといふのは、若い西行にとつて、他に理由の有るべき筈が無い。此の普遍的人情を度外視して西行を論じても、決して肯綮に當る道理はないのであるが、學者達は屢々敢へて此の無理を押さうとする。尤も、脂粉の氣なるものが、必ずしも戀愛の雰圍氣とは限らぬ。十三人の中に西行の戀人は居ない。唯、異性と社交してゐるといふ事だけでも、「捨て得ぬ」魅力なのであつた。それは、人間の本能とも、戀愛の惰性とも解釋する事が出來る。さて、山家集に現はれる十三人の女性の中で、西行が最も懇意にしたのは、神祇伯源顯仲の女の二人（堀川と兵衞）であるが、二人とも西行の愛人たるには適せぬ程の年長者である。大治三年（西行十一歳）の西宮歌合に、兩巾幗共にませた歌を出してゐるのでも明らかだ。妹の兵衞にしても、西行とは十五六歳違ひさうだ。

斯うして、第二期の西行は、相當の僧侶になりつつあり乍ら、同時に聚落を

離れ得なかつた。由來、戀愛をしても捨て身になり得ず、佛者の修行しても顯密の一方に專念すること出來ず、新院に親しみ奉りながら美福門院關係の御殿にも出入し（後述）、平家に同情しながら源氏を捨てず、西行の性行には、不即不離の妙諦はあつても、一徹といふ事は無かつた。但、これは私の觀方である。

西行傳中最も興味あり、最も不可解であり、且つ最も複雜なものを埋藏してゐるのは、出家前後から三十歲前後に亙る所の、此の期間（第二期）であると愚考する。西行を超人とするも凡人とするも、此の時期の扱ひ方で決定する。私は、彼を地面に低く引下（ひきおろ）しすぎたかも知れない。けれども、それは、彼を超人扱ひにするよりも眞實に近かる可しと信ずるが故に他ならぬ。

第三、高野中心時代・前期（久安四年―仁安元年 三十一歳―四十九歳）

久安の中頃から治承四年の春まで、三十餘年、西行は高野山を中心にして生活したものと推定される。別項「西行の旅行」參照。而して、仁安二年（五十歳）の四國行脚を分界點として、この三十年間を前後二期に分つ事が傳記上妥當と考へられる。

高野云々といふ文字が初めて見られるのは、山家集下上、

天くだる名を吹上の神ならば雲晴れのきて光あらはせ

といふ歌の、長い詞書の中である。それによると、待賢門院中納言局が小倉山の麓を住み捨てて紀州天野（高野西谷）に隱れたのを帥局が訪問した。この時、西行「御山より出合」つて案内し、粉川寺から吹上の浦あたりまで、尼の局達と一緒

に歩き、暴風雨に見舞はれた。女房等の出離が女院崩御の直後であつた事から考へて、吹上行は久安の頃と一應決めるより致し方ない。（撰集抄第四に、中納言局短命なりし由を書いてあるが、年月は示してゐない。）

野山入りは、勿論、眞言祕密の修行のためと考へねばならぬ。西行出生よりも少しく時を早くして、一代の宏器覺鑁が現はれ、高野の法燈を昔日の光にかへし、密嚴淨土を唱へて、康治二年十二月、四十九歳にて示寂した西行廿六歳の時。西行は覺鑁寂後に入山したのであるが、遺徳を慕ひ、密嚴淨土を欣求するに至つたであらう事は、十分に想像し得る。それから、西行の修道は易行であつて、當年一部の世捨人が除障解脱の方便とした苦行なるものは、彼には經驗したらしい形跡が無い。まづ〳〵無言の行の程度であつたらしい。

無言なりける比、時鳥の初聲をききて

時鳥人に語らぬ折にしも初音きくこそかひなかりけれ

この時期（第三期）に於いて、西行は屢次皇室の御悲しみに遇ひ奉つた。久壽二年七月、美福門院御所生の近衞天皇には寶算僅に十七にて崩御あり、西行は秋の野べをわけて船岡知足院の新陵に詣で、

磨かれし玉のうてなを露深き野べにうつして見るぞ悲しき

と弔ひ奉つた。玉葉集には此の歌の詞書に「春宮と申しし昔より今の露けさまで思ひつづけて」云々と書いてゐる。幼くて春宮にましましたのは、保延（西行出家前）の頃であつた。翌保元元年七月二日鳥羽法皇晏駕、鳥羽安樂壽院本御塔に葬り奉る。御支度の如く鳥羽殿に安樂壽院とて御終焉の御堂の御所志おかせ給ひたりけるにてうせさせ給にけり（愚管抄。巻四）。西行（三十九歳）高野から出で、大葬に供奉した。

一院かくれさせおはしまして、やがて御所へ渡し

まゐらせける夜、高野より出合ひて參りたりける、いと悲しかりけり。此後おはしますべき所御らんじ初めけるそのかみの御ともに、右大臣さねよし、大納言と申しけるさぶらはれけり。忍ばせおはしますことにて、又人さぶらはれざりけり。其折の御供にさぶらひける事の思ひ出でられて、をりしも此夜に參りあひたる、昔今のこと思ひつづけられてよみける

今宵こそ思ひしらるれ淺からぬ君に契のある身なりけり

院北面時代なりし保延五年の或日を追懷して、感に堪へぬのである。四箇年餘を過ぎて、永曆元年十一月廿三日、美福門院御壽四十四にて崩。鳥羽新御塔に納め奉るべき筈であつたのを、女院みづからの思召によつて、高野へといふ御事に決まつた。十二月四日、大雪の朝、御舍利は女院かねて忍びて建立し給ひし所の菩提心院御堂に着き給うた。折から高野在住の西行は、この悲しき御有樣を拜して、

けふや君おほふ五つの雲晴れて心の月をみがき出づらむ

と心中に念じ奉つた。女人の身にましますとも、今は五障の雲長く收まり、三明の月高く晴れ給ふべし、の意である。京からの御供には、鞠聖成通や畫伯隆信などがゐた隆信家集。長秋詠藻側近に藝術の巨匠等の侍してゐた事は、女院の御性向の一面を窺ふに足らう。中村直勝氏著「南朝の研究」に安樂壽院研究の一章を含み、その中に「永曆元年十一月廿三日、美福門院崩じ給ふ。御遺骨は豫め定められたる所に從うて安樂壽院新御塔に置かせらるべきであつたが、何故か御遺言であると稱して高野山に渡し奉る事となつたから、安樂壽院の方では、新御塔のために置かれし六口の三昧僧と力を併せて御骨を新御塔に留め奉らんと努力したが其效なく、同年十二月二日高野傳法院に渡されて了つた百錬抄山槐記」と述べてある。**參考まで。**

永萬元年七月には二條上皇寶算廿三にて登遐。洛西香隆寺側に奉葬。五十日の御はて、晩秋の月夜に御陵墓にて佛事あり、西行も參りあはせて、

今宵君しでの山路の月をみて雲の上をやおもひいづらむ

西行、遁世の後も、かやうにいつも晏駕の高貴に悲しみを寄せ奉り、又、御陵墓への恭禮を怠らぬ事は、院北面として禁裡に多年奉仕した關係もあらうけれども、根本には、皇室に對する敬虔の念の致す所と觀るべきであらう。

西行今は都を離れ、脂粉の氣にも殆ど遠ざかつた。佛者としての修行は當然深くなつたものと考へられる。(高野を中心とするのも、勿論そのためだ。)心友としては西住と寂然とが居つた。西住が一緒に高野にゐた事のあるのは、山家集によつて明らかである。所謂大原三寂の中では、寂然と最も親しくした。

寂然は近衞院崩後に出家したものと推定せられるゆゑ、彼が大原から西行高野のに歌を贈つたり、或は高野まで尋ねて來たのは、久壽二年秋より以後の事であらねばならぬ。ともかく、聚落を離れ、寂然や西住を莫逆の心友として暮らすに至つては、西行も眞個の世捨人らしくなつたと云へる。それから、久壽元年五月には中院右大臣雅定に、保元二年の末頃には舊主右大將公能に、平治元年十月には侍從大納言成通に、各出離を勸めた山家集。西行既に、かやうに立派な人々の善智識となる自信を持つたのだ。長寛二年の頃、阿闍梨兼堅が高野を出で仁和寺僧綱に補せられた由を聞いて、西行四十七歲、

　袈裟の色や若紫にそめてける苔の袂をおもひかへして

これは、出家のくせに顯位を欲しがる俗物に對して、一矢を酬いた皮肉と解釋出來る。少くとも、西行は紫衣に眼をくれぬ寒衲で自から滿足してゐた。新古今集雜歌下、

西行法師山里よりまかり出でて、昔出家し侍りし其月日にあたりて侍るなど申したりける返事に　八條院高倉

浮世いでし月日の影のめぐり來て變らぬ道を又照らすらむ

八條院暲子内親王は鳥羽院皇女、御母儀は美福門院、保延三年降誕。近衞天皇の御姉宮にあたらせられる。法皇の御鍾愛厚く、御領の庄園全國に數百箇所、臺盤所の豐かさは申す迄もなかつた。應保元年、二條天皇の御准母として院號を奉られた。俊成の女健御前（建春門院中納言日記の筆者）なども、此の八條院に奉仕した。西行も折々伺候したと見える。さて、女房高倉の一首であるが、窪田空穗氏著「新古今和歌集評釋・下」六三〇頁「山里から都へ來る西行をめぐり來てといひ、又照らすといつてゐるので、出山の釋迦の再生といふ意を寓してゐるものと取れる。法師としての西行が、何れ程の境まで到り得てゐたかは分りかねる事であるが、その當時の人の一部には、かうした尊敬を寄せられてゐたといふ事は分る。」「圓位ひじり云々」と長秋詠藻に尊敬して書かれたの

は入滅の際の事であるが、ともかく、高野時代からも高徳の上人として都鄙に知られた事は疑問無ささうである。

崇徳上皇には、西行出家後も再三咫尺し奉つたこと、山家集から窺ひ得る。保元亂、上皇仁和寺に入つて薙髪し給ふや、當時鳥羽法皇の大葬に會し奉るべく出京してゐた西行は、とるものも取りあへず雙岡へと駈けつけた。

世の中に大事いで來て、新院あらぬさまにならせおはしまして、御ぐしおろして、仁和寺の北院におはしましけるに、まゐりて、兼堅阿闍梨出あひたり。月あかくてよみける

かかる世に影も變らずすむ月を見るわが身さへ怨めしきかな

かやうの場合、上皇の御跡を慕ひ奉る事が一身上の冒險なる事は、緇衣の西行といへども十分承知してゐたに相違ない。過去の御恩をかへりみ、又眼前の御境涯に同情し奉り、息せき駈けつけたところに西行の眞面目がある。それはばか

りではない、讃岐遷幸の後も、折々御たより申上げてゐる。「讃岐へおはしまして後、歌といふことの世にいと聞えざりければ」山家集と歌道の廢れゆくのを嘆息してゐる。上皇遠所にて佛道に專念し給ふ由を拜聞しては、

若人不嗔打、以何修忍辱

世の中を反くたよりやなからまし憂き折ふしに君があはずは

淺ましやいかなる故の報にてかかる事しもある世なるらむ

ながらへて終にすむべき都かは此の世はよしやとてもかくても

といふ數首をお贈り申上げた。寂然が讃岐まで伺候した際にも、西行はこれに歌を托した。寂然も上皇への御同情者であつたと見える。これとあべこべに、內大臣實能は、賴長失脚して薨ずるの後、代つて左府を拜命した。西行の心は、かやうな事からも漸く舊主の家から離れて行つたらしい。長寛二年八月廿六日、崇德上皇讃岐松山に崩じ給ふ、寶算四十六。

仁平の頃、西行は安藝一宮（嚴島明神）に參詣した。歌によつて察すると、季節は秋らしい。家集に「播磨の書寫山へまゐるとて、野中の淸水を見けること一昔になりにける」云々とあるは、嚴島詣の途中の事であつたらうと、私は勝手に決めるのであるが、本當の事は到底わからない。（平淸盛は、これより數年後、永曆元年八月嚴島詣をした。西行、此の時一緒に行つたと想像することも、人々の自由である。）高野を居住の中心にして置いて、諸方へ行脚したであらう。家集に現はれてゐる大峰修行や熊野詣・那智瀧入堂や、數次の吉野行など、概ね高野からであらうと、これも勝手に想像する。

第四、高野中心時代・後期　仁安二年—治承三年　五十歳—六十二歳

六條天皇の仁安二年十月十日夜、西行は賀茂社に詣で、月光の下、法施して、

かしこまる四手に涙のかかるかな又いつかはとおもふ心に

の一首を手向けた。四國行脚に出ようとして、お暇乞の參拜である。この時、心友の西住は近親に病人あつて同行出來なかつたやうでもあり、或は同行したけれども途中から引返したやうでもある山家集。さうして、やがて入滅した。往生は立派であつた。ともかく、西行は播磨路を通り、備前兒島の八幡社にて、

昔見し松は老木になりにけり吾が年へたる程も知られて

と一昔前の旅行を追懷し、長竿に袋をつけて糠蝦(あみ)とる漁師のいとなみを見ては、

立てそむるあみとる浦の初竿はつみの中にもすぐれたるかな

と「涙こぼれて」沙門らしく殺生の罪を悲しみ、牛窓の瀬戸にては、

さだえ棲むせとの岩壺求めいでていそぎし海士の氣色なるかな

小鯛ひく網のうけ繩よりめぐり浮きしわざある鹽崎の浦

と自由な風體を詠み、それより海を渡つて、讚州に着き、「松山と申す所に院

おはしましけん御跡尋ねけれども、かたもなかりければ」と哀しみつつ、

松山の波に流れて來し舟のやがて空しくなりにけるかな

松山の波のけしきは變らじをかた無く君はなりましにけり

の二首を涙と共に捧げ奉り、白峰御陵にぬかづきては、

よしや君昔の玉の床とてもかからむ後は何にかはせむ

と佛者らしく諦觀した。「西行は新院の御墓白峰といふ山寺と聞きて尋ね參りたりけるに、あやしの下﨟の墓よりも猶草繁し」云々と勿體ない御有樣を參考本源平盛衰記に書いてある。弘法大師誕生地の善通寺や大師行道所の世坂などを巡禮し、その邊に草庵を結んで暫らく修行した。

今よりはいとはじ命あればこそかかるすまひの哀をも知れ

折しもあれうれしく雪の埋むかなかき籠りなむと思ふ山路を

ここを又吾が住み憂くてうかれいなば松は獨にならむとすらむ

かやうにすぐれた歌の數々を草庵雪裏で詠み、やがて「土佐の方へやまからまし」と思ひ立つたけれども、それは果さず、再び內海に浮かんで、九州の一角を踏んだらしい。

はらか釣る大和田崎のうけ繩に心かけつつ過ぎむとぞ思ふ

元旦に內膳司から筑紫の腹赤（はらか）の贄を奉るのであるが、その魚を捕る漁師等は權柄づくで威張り、他の舟などがその繩に觸れると喧嘩をしかける。西行これを見て、「心かけつつ過ぎむとぞ思ふ」と心境を吐露したのだ。人と爭ふ心はとくに無くなつてゐる。

私かに按ふに、廿三歲の出家と五十歲の四國行脚とは、人間西行の轉機を劃する二つの最要事件であつた。讚岐行の目的は崇德院の御跡を弔ひ奉る事と信仰上の理想なりし空海の遺蹟を巡禮する事とに在つた事、言ふ迄もない。人間

西行は此の行脚によつて一段と深化し、同時に、必然の結果として歌人西行も一倍偉くなつた。遺詠中の傑作、多くは仁安以後に屬すと愚考する。藤岡作太郎博士の西行論に、「崇德上皇の一生は西行の半生に苦悶の情を斷たざらしめ、世を棄てたる人をして、終に全く世を棄つる能はざらしめぬ。渠の歌に悲哀痛苦の辭多きもこれに基くこと蓋し鮮少ならざりしなるべし。されど上皇崩御の後は、悲痛の種ここに去りて、過ぎ去りし禍福は今はた得道解脫の因となり、世事と全く相離れて、ひたすら無我なる自然に接したるならん。山家集を檢するに、上皇崩御までは人事に關する歌なほ少からず、その後はこの種の詠殆どこれなき所以、恐らくはここにあらんか」とあるは、味讀に値する。但、長寛以後の西行に人事詠殆ど無しとするは、いかがかと思ふ。

四國行脚から何時歸つたか。仁安三年早々の事と推定し度い。

花を見し昔の心あらためて吉野の里に住まむとぞ思ふ

の歌に「國々めぐりまはりて春かへりて、吉野の方へまからんとしけるに、人の、この程はいづくにか跡とむべきと申しければ」と詞書してあるのは、此の時かと一應空想をめぐらしてみたけれども、勿論證據は無い。吉野には幾度も出入してゐる。この歌、康治の奥羽行脚から歸つた時の事とも想像出來ない事はない。「人の」とあるを捨てた妻の事と考へるならば、一層康治天養らしくなる。すべて、かやうの事の決定が、西行傳中の難問であり、同時に興味深い點でもあらう。

第四期の西行は、檢校とか僧都とかには無關心としても、眞言密乘の學僧として倍々重きを加へたらしい。安元治承の間、五辻齋院頌子内親王が御父帝鳥羽院菩提のために高野東別所に蓮華乘院を建立し給ふや、西行は齋院の御指圖

を承つて大義房賢宗と共に其の事に當つた。金剛峰寺所藏の寶簡集によれば、治承元年紀州日前宮造營の役を高野の領に賦課されたが、西行出京し、その免除を當局に請願してゐる。彼が寺務に重きを成してゐたことを窺ひ得るであらう。仁和寺御室覺性法親王や崇德院皇子元性法印にしば〳〵謁してゐるのも、西行が眞言の高德なりしが故に他ならぬ。當時の西行、もはや、單にありし日の御緣をたどつて高貴に近づくといふやうな心境では無かつた。さうして、兩皇子に於かせられても、東密の法統を繼ぎ、利他の妙行を專修し給ふのであつた。

嘉應元年三月、後白河院高野御幸の盛儀あり、西行おそらくこれを拜した事であらう。院には、更に承安元年六月一日熊野詣の御ついでを以て攝津住吉に御幸あり、西行は翌日その御あとを拜して、

絶えたりし君が御幸を待ちつけて神いかばかり嬉しかるらむ

と感激に咽んだ。後白河院は待賢門院の御所生にあらせ給ふ。おなじ年の十月紅葉の頃、上西門院が御母儀故女院（待賢門院）のため仁和寺法金剛院御堂の供養し給ふや（玉海）、西行これに會し、兵衞局と懷舊の歌をよみかはした。五十歲を踰えても、とかくに昔は忘れ難いのである。

西行は又、平家の人々と相當懇意であつたらしい。承安二年三月入道清盛が攝津福原第にて千僧供養し、尋で和田濱に萬燈會を催した時、西行も招かれてこれに會し、

消えぬべき法の光のともし火をかかぐる和田の岬なりけり

と詠じた。前述日前宮造營賦役の事に關し、西行が京都から檢校房光に宛てたる文書を檢するに、清盛西行の間に個人的交友の關係ありし事を前提として居

らねばならぬやうに解せられる。治承二年（或は三年）の暮、西行雪中を高野に登ると聞いて、時忠（平關白と呼ばれた男）から惜別の一首を贈つてゐる。並大抵の間柄では無ささうだ。概して、西行平家に同情してゐた事は、さま〴〵の理由により尤もと考へられる。

高野在住中の一挿話として、次のやうな事もあつた。

みやたてと申しけるはしたものの、年高くなりて様かへなどして、ゆかりにつきて吉野に住侍りけり。思ひかけぬやうなれども供養をのべん料にとて、くだ物を高野のみ山へ遣しけるに、花と申すくだ物侍りけるを見て、申しつかはしける

折櫃に花のくだものつみてけり吉野の人の宮立にして　　みやたて

かへし

心ざし深くはこべるみやたてを悟り開けむ花にたぐへて

まことに、味の深い贈答である。「はしたもの」とは、女官で無く、身分の低い召使の謂に相違ない。勿論、西行在俗時代の舊知であつた。さやうの女が老いて尼になり、吉野の奥に浮世をわび住まひしてゐるのと、野山の高德西行との間の、佛供養に關する交渉なのである。人間西行の溫かみもよく表はれてゐる。江口の時雨西行は巷間に有名だが、あんな干乾らびたやうな、生臭いやうな、さうして類型的な話は面白くない。「みやたて」といふ名も可憐だ。「遊女たへ」の比でない。

嘉應以後、高倉天皇の御宇、西行は何事をか密奏したらしい。

高倉院の御時、傳へ奏せさする事侍りけるに、書きそへて侍りける

跡とめて古きを慕ふ世ならなむ今もありへば昔なるべし

「何事をか」と言つても、勿論政治上の事でなく、實は、歌道に關する奏上に

相違ないのである。それは、右の歌の內容からも推定し得る。「世々の跡を求めて、古き事を大切に慕ふ事に致し度いものでございまする。さて、さう致しますと、現代の跡も亦おろそかには考へられません。今日といへども、年が經ちますと、昔になります。後世から見ますと、今日が又古き事になるのでございますから」といふ意味である。按ふに、勅撰集の御事あり度しと奏上したに相違ない。他の解釋は附かぬのである。新院讃岐遷幸の後、「歌といふことの世にいと聞えざりければ」と嘆息した西行なのだ。俊成と舊くから懇意の西行なのだ。但、壽永の頃千載集撰進の院宣が俊成に下つた、その遠因が西行の密奏に在りとまで言つたならば、妄想に近い。歌に對する西行の關心は、むしろ妄執と稱してよい。或は、讃佛乘の方便とも解釋出來る。高僧傳中の圓位上人となり得ずして、文學史上の歌聖西行に終つたのも、これがためだ。高野後期に於いて、彼は「戀百十首」なるものを作つた。これは嘉應から安元に亙る數

年間の或年の作である事は、建春門院少納言局（信西の女）が此の大作を借覽した由の後記あるによつて推定される。尤も、當年の百首歌の類は、必ずしも一度に作らず、多年の作を取纏めて編輯した場合もあるから、「戀百十首」にも幾分か舊作がまじつてゐるかも知れぬ。それにしても、大部分は近作に相違ない。さて、此の歌群中に、

哀とて人の心のなさけあれな數ならぬにはよらぬ嘆きを

危さに人目ぞ常によかれける岩のかど踏むほきのかけ道

とにかくに厭はまほしき世なれども君が住むにも引かれけるかな

かやうな歌を見せられると、出家前の悲戀の惱みが、たとひ過去の事として振返つたものとしても、五十餘歲の西行に影の如く附纏つてゐる事が窺はれる。

彼は畢竟歌人である。歌のついでに、もう一つ、安元二年叡山無動寺に修行中の慈圓（二十一歲）と歌の贈答をした。沙石集に「西行法師遁世の後、天台眞言の大事

を傳て侍りけるを、吉水の慈鎭和尙傳ふべきよし仰せられければ、まづ和歌を御稽古候へ、和歌を御心得なくば眞言の大事は御心得候はじと申ける、故に和歌を稽古し給ひて後傳へんとのたまひけるとなんいへり」とあるは、不信の沙石集だけあつて、いささか莫迦げてゐる。かやうな事を眞面目くさつて勿體つけるから、「和歌」が莫迦にされるのである。眞言祕密を唱ふる心持で和歌を詠ずべしと言ふ方は差支ない（明惠上人傳記）。乍併、和歌を稽古せねば高僧に成れぬといふは、逆定理の誤謬であらねばならぬ。西行は、こんな事は言はなかつた。萬一言つたならば、彼も莫迦である。それから、歌人の傳統として慈鎭は西行を亞ぐものなりとする一說も、間違つてゐる。出家で歌が好きであつたと云ふ事が相似してゐるだけのことだ。少しく究めれば、二人は人間としても歌人としても素質の違ふ事がわからねばならぬ筈だ。

第五、晩年時代 治承四年―建久元年 六十三歳―七十三歳

晩年時代は、伊勢在住の六箇年餘と關東奥羽行脚以後の約四箇年とに截然二分出來る。

西行、三十年間生活の中心とした高野を出で、安徳天皇卽位の前後、治承四年六十三歳の春、熊野に詣で、「新宮より伊勢の方へまかりける」ことは、山家集によつて明らかだ。又、「高野を住みうかれて後、伊勢國二見の浦の山寺に云云」「伊勢のにしふく山と申すところに云々」などを綜合して、山田二見の邊に定住したことも疑問無し。晩年の久しい間を何故伊勢に定住したか。和光同塵・本地垂迹の時代的信仰によつて、大神宮の忝さに佛門の西行の牽付けられた事が、言ふ迄もなく第一であつたらう。それから、當時、伊賀伊勢にかけて

同族佐藤氏が多かつたらしい。伊勢平氏（伊勢守維衡の子孫）と言つて、平家の支族も盤踞してゐたらしい。神宮の祠官（荒木田氏良等）や僧侶に、かねてから西行の歌弟子が少くなかつた。菩提山神宮寺再興の良仁上人も、かねてから鞠聖成通や西行の知人であつた。此の高徳に依止して最後の修行をしようと悲願したのかも知れぬ。これらの便宜を西行伊勢移住の誘因と觀てよからう。それにしても、何故に野山を見捨てたかの消極的理由も存在せねばならぬ。按ふに、仁安前後（西行五十歳前後）からの高野は、彼にとつて漸く住み憂くなつて來たらしい。再興の偉僧覺鑁の寂後、一山の空氣はいつまで淸淨を保ち得たか、疑問である。琳賢や淨心の如き先輩（西行から觀て）も相次いで世を去つた。高野山往生傳によれば、淨心上人は紀州花園村の人、豫て死期を知り、永萬二年七月十三日、佛前に端坐、結印して入滅す、年六十九とある。西行は此の人の感化をも蒙つたに相違ない。承安四年には東寺との關係から騷動起つて、後白河院に解狀を上るといふやうな事にも

なつた。西行は、むろん、苦々しく思つたらう。加之、嘉應元年の末には鳥羽皇子覺性法親王が薨去あそばされた。法親王は仁和寺御室として、法統の關係上、折々高野にも入御あつた。待賢門院御所生といふ事からしても、西行は法親王に親しみ奉り、山崎紫金臺寺の御所にも伺候してゐる（山家集）。又、崇德院皇子にして覺性の御法弟なる元性法印も高野に籠り給ひ、寒夜、西行に小袖を賜はつた事さへある（山家集）。元性の薨年は不明だが、山家集その他に全く御消息の絶えてゐる事から考へると、早世し給ひしものと拜察せられる。いはば、かやうな保護者達の亡くなられた事も、西行が「高野を住みうかれ」た原因と觀てよからう。

保元平治の動亂を高野の山房から觀た西行は、引續いて起つた源平鬪爭・後者の滅亡を伊勢の草廬から眺めねばならなかつた。保元平治そのものに關して

歌はなかつた西行も、源平の戰爭は久しきに亙つたためか、それに就いては折折の感想を遺してゐる。福原遷都の由を傳聞して、

雲の上やふるき都になりにけりすむらむ月の影はかはらで
露しげく淺茅しげれる野となりてありし都は見し心地せぬ

と慨嘆し、賴朝擧兵以後の戰亂を淺ましく思つては、

世の中に武者起りて、西ひんがし北南、いくさならぬ所なし。打ち續き人の死ぬる數きく夥し、まこととも覺えぬ程なり。こは何事の爭ひぞや、あはれなることの樣かなと覺えて

死手の山こゆる絕間はあらじかし亡くなる人の數續きつつ

又

沈むなる死手の山川みなぎりて馬筏もやかなはざるらむ

木曾と申す武者死に侍りにけりな

木曾人は海のいかりをしづめかねて死手の山にも入りにけるかな

短慮の旭將軍が敗死を、かく冷やかに批評したのである。宗盛父子が近江で斬られた時、清宗の母なる人に同情して、

夜の鶴の都のうちを出でであれなこの思ひには惑はざらまし

養和元年閏二月清盛薨去の時には、何も歌つてゐない。

治承文治の間、大火・饑饉・旋風・地震等相接して京洛を見舞つた。方丈記に羅列されたこれ等の事を、西行は一首の歌にもしてゐない。按ふに、佛者の彼、天災は天意とあきらめ、それよりも人類の相剋を痛ましく感じたが故であらう。

久しく消息を中絶してゐた後宮の女房が、西行晩年の歌に色彩すべく、最後の横顔を見せた。待賢門院崩後に上西門院の女房となつた老媼兵衞局である。

門院の御所の噂など伊勢まで傳へられたが、元暦の頃、「兵衞の局武者の折ふし失せられにけり。契りたまひし事ありしものをと、あはれに覺えて」

さきだたばしるべせよとぞ契りにしおくれて思ふあとの哀れさ

によつて、此の女官往生の際には西行引接の善智識とならんと、かねて約束して置いたことを知り得る。三十餘年前、姉の堀川局とも、さうであつた。

西行が和歌への執着は、晩年に及び、ます〳〵深くなつた。これは、想像以上の現象なのである。壽永二年春、後白河法皇から歌集千載集撰修の勅が俊成に下された事を、伊勢の西行早速聞き込んで、自分の詠藻を撰者の許へ送り屆け

花ならぬ言の葉なれどおのづから色もあるやと君拾はなむ

と言ひ添へてやつた。西行がこんな事しなくてもよささうなものだと、首をかしげる人があるかも知れぬ。井蛙抄第六「或人云。千載集の比、西行在東國け

るが、勅撰あると聞て、上洛しける道にて、登蓮に逢にけり。勅撰の事尋けるに、はや披露して御歌も數多入たると云へり。鴫立つ澤の秋の夕暮といふ歌入たりやと問ひければ、見えざりしと答へければ、さては見て要なしとて、これより又東國へ下りけると云。」東國とあるは伊勢の事と解するならば、この插話をまんざら妄譚扱ひには出來ない。西行にしては暑苦し過ぎる話だが、歌の執念に關する限り、ありさうな事なのである。千載集には十八首採られた。俊成手盛りで三十六首採つたに比べると、歩合が惡過ぎるかも知れない。(尤も、これは兩者の歌の優劣には關係ないことだ。)文治元年の頃の發案かと思ふ、西行は當時の有望なる歌人慈圓・寂蓮・隆信・定家・家隆・公衡等に勸進して百首歌を詠ましめた。これらの歌人の家集に「伊勢百首」とか「二見浦百首」とか題して載せられてゐるのが、それである。西行田舍に閑居しても、當年の歌界(現今ならば歌壇)に關して觀るべき要所はちやんと觀てゐる。彼が撰拔し

た數者は將來の和歌を左右した中樞である。淡泊な人間では、こんな企ては出來もせず、しもしない。西行の暑苦しい半面なのだ。又彼は、伊勢の草庵で自分の新舊の作を整理し、諸社十二卷の自作歌合を編纂した。十二卷なりし事は拾玉集に「圓位上人の十二卷の歌合」云々の歌序あるによつて、疑問ない。乍併、十卷は湮滅して、二卷のみ後世に遺された。御裳濯河・宮河二卷の歌合に仕立てて、京に送り、一を俊成に、一を定家に判せしめた。世捨人にも似合はぬ、小面倒な事をしたものだ。皆、歌への妄執がなさしめた業行に他ならぬ。「ことに其年河内のひろかはと云ふ山寺にて煩らふことありと聞きて、急ぎ遣したりしかば、限なく喜びつかはして」云々と長秋詠藻に書かれてゐる。最期の病牀に於いてさへ、歌合の事を心にかけてゐた樣子が讀まれる。更に、伊勢閑居中の最も大切な仕事は、おそらく彼が家集を自編したであらうといふ事である。全く、私見に過ぎないが、これほど歌に執着した西行が、七十歳をまの

あたりにして、家集編纂を思ひ立たぬ筈が無い。兩歌合の如きも、此の仕事の副産物であつたに過ぎなからう。さて、西行自編の家集が、六家集本山家集や周嗣本山家集の原本となつたか、或は自編後やがて集としては湮滅してさやうの影響を遺さなかつたか、これらの事は何とも決定し難い。唯、斯うい ふ事だけは云ひ得る。山家集や周嗣本の歌序の中には、いかにも西行自身が書いたであらう、西行自身でなくば書き得ない、と推定されるもの不少。集として湮滅しても、所謂歌集切といふやうなものとなり、散らばつて諸所に遺つた事だけは確實と愚考する。なほ、於伊勢西行自編歌集なるものが、將來現出しないとは限らぬ。昭和の御代になつてからも、聞書集や聞書殘集の發見せられたことを思ひ合はせるがよい。

西行は歌に樂遊した者と一般に解せられる。興に乘じた卽吟の夥しいことも

事實である。乍併、樂遊と云つても良寛などの態度とは又違ふ。根柢に、鍛錬と苦惱と妄執との儼存してゐた事を忘れてはならぬ。さればこそ、多くの秀吟を遺した。殊に、晩年の作と推定されるものに傑作が多い。「地獄畫を見て」の大連作や「嵯峨に住みけるに、たはぶれ歌とて人々よみけるを」十三首の如き、和歌史上おそらく類例なく、老哲人の內觀と歌聖の手腕とが渾然としてここに融合してゐる。

文治二年の秋立つ頃、六十九歳の西行、伊勢を發足して、東海奥羽の大行脚に上つた。これより先、治承四年十二月平重衡に燒かれた東大寺大佛殿の再興を、重源上人、後白河法皇の勅によつて立願した。西行は重源との約にもとづき、沙金勸進のため奥の秀衡を訪問しようといふのである。途すがら、

年たけて又越ゆべしと思ひきやいのちなりけり佐夜の中山

風になびく不二の煙の空にきえてゆくへもしらぬわが思かな

の如き絶唱を詠じて、中秋明月の頃しも鎌倉着、總追捕使賴朝に謁した。東鑑文治二年八月條に云、

十五日、己丑、二品御參詣鶴岳宮、而老僧一人徘徊鳥居邊、恠之、以景季令問名字給之處、佐藤兵衛尉憲清法師也、今號西行云々、仍奉幣以後、心靜遂謁見、可談和歌事之由被仰遣、西行令申承之由、廻宮寺奉法施、二品爲召彼人早速還御、則招引營中及御芳談、此間就謌道幷弓馬事、條々有被尋仰事、西行申云、弓馬事者、在俗之當初、憖雖傳家風、保延三年八月遁世之時、秀鄕朝臣以來九代嫡家相承兵法燒失、依爲罪業因、其事曾以不殘留心底、皆忘却了、詠謌者、對花月動感之折節、僅作三十一字許也、全不知奧旨、然者是彼無所欲報申云々、然而恩問不等閑之間、於弓馬事者具以申之、即令俊兼記置其詞給、終被專終夜云々、

十六日、庚寅、午刻西行上人退出、頻雖抑留、敢不物、令二品以銀作猫被宛贈物、上人乍拜領之、於門外與放遊嬰兒、西行是請重源上人約諾、東大寺料爲勸進沙金赴奥州、以此便路巡禮鶴岳云々、陸奥守秀衡入道者、上人一族也

營中における西行の面目躍動してゐる。さて、ちよいと餘計の事を言ふが、此の有名な銀猫は、果して兒童に呉れたのであらうか。同じく東鑑に據ると、文治五年八月廿一日、泰衡平泉館に放火して逐電し、翌廿二日頼朝その燒跡を檢分すると、坤の隅に倉廩一宇火を免れて殘つてゐた。内部には、紫檀の厨子・犀の角・象牙の笛・金の沓・金造りの鶴等々の珍寶眼をおどろかし、さうして「銀作りの猫」もあつた。東鑑の記録だから疑あるまい。西行、墨染の袖に包んで、奥の秀衡へ引出物にしたか。伊勢から俊成の許へ濱木綿を送つてもゐる。なかなか、こまかく氣のつく男でもあつたのだ。沙金勸進と云へば古風に聞えるけれども、今日で云へば寺へ寄附の勸誘だ。まんざら俗才無くて出來る役目

ではない。

十月十二日平泉着。鎭守府將軍秀衡方に寄寓したが、卽日、折からの雪を犯して、衣川の砦を一見した。「河の岸につきて衣河の城しまはしたる事柄、やうかはりて、物を見る心地しけり」と山家集にあるのは、只の寒衲で無い。總追捕使に弓馬を談じて來た傑僧である。流罪で當國に來てゐた南都の僧と中尊寺に會談し、さて越年しては、さすがに、

常よりも心細くぞおもほゆる旅の空にて年の暮れぬる

と感傷した。ここに、私共の空想を逞しくさせるに足る最も興味深いことは、西行來と殆ど時を同じくして義經主從が、これも東大寺盧遮那佛勸進の山伏となつて諸國の新關を欺きつつ、秀衡の許に投じたと云ふ史的事實である。東鑑文治三年二月十日條に「前伊豫守義顯、日來隱住所々、度々遁追捕使之害訖、

遂經伊勢美濃等國赴奥州、是依特陸奥守秀衡入道權勢也、相具妻室男女、皆假姿於山臥並兒童等。」　賴朝が院宣を乞うて義經の搜捕にかかつたのは、文治元年十一月からの事であつた。東鑑に「義顯」としたのは、ヨクアラハレルと緣起を祝ひ鎌倉方で改名した故である。平泉潜入の風聞が鎌倉に傳はつたのは大分後の事で、實際高館入は前年（文治二年）の末と歴史家は觀察してゐる。「義經が潜匿してゐるだらう。早く出せ」と幕府から屢次追究されたけれども、秀衡はいつもしらばつくれて、「奥州へは來てござらぬ」と返事した。その秀衡が、なんで義經を他人に逢はせるものか。況して、つい先頃賴朝と面談して來た凡人ならぬ西行に引合せる筈が無い。西行は後世の文人に絕好の史劇「義經と西行」を書かせる機緣を與へずして、沙金勸進の工夫を凝らすのであつた。對岸東稻山の櫻花を賞し、三月には出羽最上鄕の瀧の山までも行つた。さうして、おそくも年內（文治三年）には京都に歸り、しばらく、嵯峨の邊に住んだらしく考へられる。

「明恵上人傳記」を信ずるならば、此の頃、彼は栂尾の高辨（なほ年少）にしば〳〵會ひ、「我歌をよむは、遙に尋常に異なり。」「我亦此の虚空の如くなる心の上に於いて、種々の風情を色どるといへども、更に蹤跡なし。此の歌即如來の眞の形體也。さらば、一首よみ出でては一體の佛像を造る思をなし、一句を思ひつづけては祕密の眞言を唱ふるに同じ。我此の歌によりて法を得事あり。若しここに至らずして妄りに人此の道を學ばば、邪路に入るべしと云々。」高辨に對して老哲人が體驗を語つた事は、面白くもあり、ありさうでもある。乍併、西行往々にして、平氣で粗末な卽興歌を吐き出した事實にかへりみると、「一體の佛像を造る思をなし」云々は、相手を喰ひ過ぎてゐないか。

文治三年の何月頃か、奥州から歸つた西行は、一二年の間、華洛のほとりに名殘の居住をして、同五年の何月頃か、河内石川郡弘川寺（葛城山西麓）といふ眞言の

寺に引籠つたものと推定される。（文治五年七月廿日上西門院崩御あそばされたが、或は、其の時以後河内へ移つたと想像出來ぬこともあるまい。）此の山寺には、他日の後鳥羽天皇護持僧なる空寂上人がゐた。西行は此の高僧を最期の善智識に依止せんと念じたのかも知れぬ。翌建久元年二月十六日、七十三歲にて大往生を遂げた長秋詠藻・拾玉集・拾遺愚草。悲報は、何人よりも先づ俊成の許へ達せられたらしい。俊成の挽歌、慈鎮と寂蓮との間及び定家と公衡との間に、西行示寂に關して贈答された歌がある。臨終立派で、十念亂れざりし事は、拾玉集に「文治六年二月十六日、未の時、圓位上人入滅臨終など、まことにめでたく、存生にふるまひ思はれたりしに更にたがはず、世の末にありがたきよしなむ申し合ける」拾遺愚草に「建久元年二月十六日西行上人みまかりける、をはり亂れざりけるよし聞きて」とあるによつても、明白だ。

願くは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月の頃

といふ人口に膾炙した一首は、「此の二三年の程」に詠まれたものなる事、拾玉集に記されてあり、長秋詠藻にも「かく詠みたりしををかしく見給ひし、ことに二月十六日望の日をはり遂げけることあはれにありがたく覺えて」云々と書かれてゐる。「存生にふるまひ思はれたりしに更にたがはぬ」入滅なのだ。墓所については異説あるけれども、弘川寺の域内に葬つた事は疑問ない。享保の末、似雲といふ特志の僧、西行の古墳を發見したといふ物語があるけれども委細は省く。

西行の風采、いかやうにも想像出來ようけれども、愚見によれば、出身と閱歷とに鑑み、眉目清秀、稀代の美丈夫であつたに相違ない。と云つても、勿論業平型では無い。凛とした偉丈夫であつたらう。頗る健康に惠まれてゐた事は七十歲で奧羽を踏破したのでもわかる。神宮文庫藏の傳土佐廣周筆の肖像は、

寫眞に撮つたのを見た感じでは、普通の寒衲で、何の奇もなささうである。集古十種所載の河内國金剛輪寺釋迦堂安置木像も、本物でなく畫にしてあるためか、ぴんとしない。弘川寺西行堂安置の傳文覺刻木像(これも集古十種に出)は曾て一見したが、頑丈な面貌をしてゐるだけで、全然氣品を缺く。むしろ文覺自身の像と觀る方が適當だ。京都帝室博物館藏の傳頓阿刻木像は、飄逸の味は十分に現はしてゐるけれども、全風格を偲ぶよすがにはもの足らぬ。これらいづれも、西行の風丰に關する私のまぼろしを具象してはくれない。

二　西行と交渉ありし人々

人間西行を知らんがためには、種々の觀點から考察せねばならぬ。遺作（和歌）の檢討からするも一つ。信仰修道の方面からするも一つ。行脚の足跡からするも一つ。さうして、彼が往來交渉した人々を調べて見るも一つ。此の對人關係は極めて重要な事柄で、西行傳の半分は此の中に暗示されてゐると斷定して宜しい。私は繁雜を厭はず、これを克明に調べ上げて見よう。資料は、勿論假託書・僞書・小說の類を斥けて、信ずべき文獻のみに據る。

西行の一生、いかなる人々と交涉あつたかを、山家集・周嗣本異本山家集・藤岡氏異本山家集追而書加西行上人和歌・聞書集・聞書殘集・御裳濯河歌合・宮

河歌合・新古今集・新勅撰集、その他に收められた遺詠の詞書から調べると、次の如くである。交渉あつた人々といふのは、西行と同時代に生存してゐた人に限る意味で、弘法大師・能因法師・赤染衛門・良暹法師・周防内侍等の故人は勿論、大原三寂の父なる藤原爲忠（保延二年卒去）の如きも入れない。括弧内の數字は、遺詠の詞書に現はれたる回數を示す。詳しく云へば、詞書中に名の明示された場合、及び、西行との贈答歌の作者として名の示された場合、これらの回數である。

○皇　室

鳥　羽　院（2）

崇　徳　院（11）　第七十五代ノ天皇。鳥羽院ノ皇子ニシテ、御母儀ハ待賢門院。

崇徳院女房（8）　家集ニ崇徳院御關係ノ所ニ只「女房」トシテ載セラレタルハ、院

ノ御製ナルコト殆ド疑無シ。高貴ノ御歌ヲ單ニ「女房」トシテ出サレタル例ハ歌合等ニ多シ。

近衞院（1）第七十六代ノ天皇。鳥羽院ノ皇子ニシテ、御母儀ハ美福門院。寶算僅ニ三ニシテ卽位シ給ヒキ。

後白河院（1）

二條院（2）

高倉院（2）

待賢門院（2）鳥羽院中宮、御名ハ璋子。德大寺公實ノ女ニシテ、實能ノ妹。崇德院・後白河院・覺性法親王・統子內親王等ノ御母儀。久安元年八月崩ズ、御壽四十五。

美福門院（1）鳥羽院皇后、御名得子。權中納言藤原長實ノ女ニシテ歌人顯季ノ孫女。近衞院・八條院暲子內親王等ノ御母儀。永曆元年十一月崩ズ、御壽四十四。

上西門院統子內親王（11）鳥羽院皇女。御母儀ハ待賢門院。初御名恂子。大治三

年賀茂齋院ニト定、天承元年退下セラレテヨリ、菩提院前齋院ト呼バル。菩提院ハ仁和寺内ノ一支院ナリ。又、山家集ニ淸和院(勢加院トモ)前齋院トアルモ此ノ内親王ノ御事ト覺ユ。保元三年、御准母。平治元年院號ヲ奉ラル。永曆元年法金剛院ニテ落餝シ給フ。文治五年七月崩ズ、御壽六十四。

覺性法親王(2)仁和寺御室。鳥羽院皇子ニシテ、御母儀ハ待賢門院。嘉應元年十二月薨、御壽四十一。

法印元性(5)崇德院皇子。

八條院姫宮(1)保延三年降誕。鳥羽院皇女暲子内親王、御母儀ハ美福門院。應保元年、二條天皇ノ御准母トシテ院號(八條院)ヲ奉ラル。建曆元年六月薨ズ、御壽七十五。

○德大寺家

實能(2)權大納言公實ノ第三子、鳥羽崇德兩帝ニ仕ヘ、右大臣左大臣左大將内大臣等タリ。保元二年七月十五日病ニヨリ出家、九月二日仁和寺菩提院ニ薨ズ、年六十二。

公能（4）實能ノ嗣子、右大臣右大將。管絃朗詠ノ達者。永曆二年八月十一日薨、年四十八。ソノ子ニ實定アリ、女ニ多子（二代后）アリ。

實行（1）公實ノ子、仁平久壽ノ間太政大臣。

公重（1）公實ノ孫ニシテ、權中納言通季ノ子。

○入道信西一族

紀伊二位局（1）少納言藤原通憲（入道信西）ノ後妻從二位朝子。待賢門院ニ仕フ。又、後白河院ノ御乳母。信西死後七年、仁安元年正月十日歿ス。成範・脩範ノ母。

成範（一ニ重憲）（1）信西ノ子。吉野山ノ櫻樹ヲ移シテ其ノ邸ニ環植ス、櫻町中納言ト呼バル。平治亂後兄弟等一時流罪。文治三年薨、年五十三。小督局ノ父ナリ。

脩範（3）信西ノ子。

覺賢（一ニ覺堅）（2）信西ノ子。仁和寺僧綱、文治五年法印大僧都、壺坂興福寺別當。

建春門院少納言（2）信西ノ女。

○その他公卿

宗輔（1）藤原氏。保元平治ノ間太政大臣タリ。

定信（1）藤原氏。宮内權大輔。能書。久安二年六月卒。

家成（1）顯季ノ孫ニシテ、中納言。和歌管絃ニ長ズ。久壽元年五月七日出家、同廿九日薨。四十八歲。

基家（1）中御門通基ノ子ニシテ、持明院家ノ祖ナリ。母ハ待賢門院女房大藏局。

成通（6）藤原氏。正二位權大納言。太政大臣伊通ノ弟ナリ。平治元年十月出家シテ栖蓮ト號シ、應保二年十月薨、年六十六。風姿美ニシテ車服時ニ異裝ヲ作ス。蹴鞠ノ聖ナリ。

範綱（3）藤原經尹ノ子、若狹守兵庫頭。入道シテ西遊ト號ス。親鸞聖人ノ叔父。聖人幼時範綱ニ養ハル。

忠季（1）宮内大輔。源雅賢ノ長子。

雅　定（2）村上源氏、神祇伯顯仲ノ兄雅實ノ次子ニシテ、堀川局兵衛局等ノ近親ナリ。右大臣、左大將。仁平四年五月出家ス。笙ニ祕法ヲ得タル舞樂ノ達者ナリ。

三河入道（1）

通　親（1）村上源氏、久我家。鎌倉初期ノ主要政治家。

○平　氏

忠　盛（1）

時　忠（4）建春門院平滋子及ビ清盛妻時子ノ兄。平氏ニアラズンバ人ニアラズト放言セシ人物。時人コレヲ平關白ト呼ブ。

清　盛（1）西行ト同年ニシテ、元永元年生。承安二年三月清盛福原ニテ千僧供養ノ時、西行コレニ會セルモ、淸盛ト個人的ニ面接シタルヤ否ヤ疑問ナリ。

宗・盛（1）

清　宗（1）宗盛ノ子。宗盛父子共ニ西行ノ詠ニ關係アルノミニテ、面接等ノコト勿論無シ。

○源　氏

頼　政（1）

義　仲（1）　西行ノ歌ノ對象トナリシコト有ルノミ。

○歌　人

俊　惠（2）　永久元年生。養和二年尙齒會ノ時七十歲。歿年不明。

俊　成（7）

寂　念（6）一二想空　藤原爲忠ノ子、俗名爲業。

寂　然（22）　爲忠ノ子、頼業。

寂　超（5）　爲忠ノ子、爲隆。

隆　信（1）　寂超ノ子。ソノ母俊成ニ再婚シテ定家ヲ生ム。隆信ハ大畫家ニシテ、其ノ子信實モ畫聖ト呼バル。

寂　蓮（1）　俗名定長、俊成ノ猶子タリシコトアリ。

慈　鎭（2）

定　家（2）

○僧　侶

阿彌陀房（1）

空　仁（空人ニ一）（4）　少輔別當。千載集作者。美男ナリシト覺ユ。

理性房法眼（1）　醍醐ノ僧。西行西住ニ法脈ヲ傳ヘシ宗命ト同一人カ。

西　住（17）　千載集作者。俗名源次兵衞季政（季正トモ）。西行ト前後シテ出家セシモノノ如シ。山家集ニ「同行」云々トアルハ必ズ此ノ人。

素　覺（1）　千載集作者。伏見修理大夫俊綱ノ孫ニシテ、俗名家基、刑部少輔。

覺　雅（3）　神祇伯顯仲ノ弟、仁和寺僧綱。金葉・詞花ノ作者。久安二年八月寂、年五十七。

覺　譽（2）　奈良興福寺大僧都、法雲院法印。久安二年十二月寂、七十九歳。

生光（2）太宰府觀音寺別當カ。

靜忍（1）

西忍（忍西又ハ靜蓮トモ）（2）

淨蓮（1）

登蓮（1）詞花・千載・新古今ソノ他ノ作者。

行蓮（1）

兼賢（一ニ兼堅）（2）僧綱補任抄出ニヨレバ、長寛二年ノ條ニ兼賢ノ名見ユ。

靜空（2）藤原氏、大學頭宗光ノ子。靜空ノ弟ニ源空弟子光空上人アリ。

勝命（1）新古今集ソノ他ノ作者。俗名美濃守親重。佐渡守親賢ノ子。

湛快（1）熊野第十八代別當。近衛院久安二年三月補任、治山廿八年ニ及ブ。

良仁（1）伊勢菩提山神宮寺ヲ再興セシ人。鞠聖成通トモ親交アリシ事ハ成通ノ家集ニテ明ラカナリ。

ちういん僧都（1）
平泉に流罪の南都僧（1）

○その他

氏良（1）荒木田氏、伊勢神主。新古今集作者。
陰陽頭（1）

○待賢門院女房

堀川（8）神祇伯顯仲ノ女ニシテ、金葉集以降諸勅撰集及ビ久安百首ノ作者。初メ前齋院怜子内親王家ニ仕ヘ前齋院六條ト稱セシガ、後待賢門院ノ女房トナル。康治元年二月門院落飾シ給フヤ、堀川從ヒテ尼トナリ、尋デ久安元年八月門院崩ズルノ後、洛西ニ隱栖シテ歿年ヲ明ラカニセズ。西行ヨリモ約二十歲年長ナラン。
兵衞（8）堀川ノ妹。千載集及ビ久安百首ノ作者。待賢門院崩後ハ上西門院ニ仕ヘ、長命シテ、元曆元年ノ頃歿ス。
中納言（1）金葉集ノ作者。

帥局（1）備後前司季兼女、後ニ建春門院ニ仕フ。

加賀（2）花園左大臣ト浮名立チシ伏柴ノ加賀ナリ。待賢門院崩後ハ二代后ニ仕ヘタル如シ。千載集ノ作者。

○その他女性

菩提院六角局（1）

五辻齋院宣旨局（2）

二條院三河内侍（1）尊卑分脈ニ、源仲政ノ女、法性寺殿女房三河、賴政等ノ妹トシテ出デタルハ此ノ人ナランカ、存疑。

小侍從（2）千載集以降諸勅撰集ノ作者。平家物語月見ノ條ニモ現ハルル有名ノ女歌人。石淸水八幡宮別當光淸ノ女。久我大炊殿（雅通?）・平經盛・櫻町中納言成範・平忠度・源賴政等ト深交アリシコトハ、歌ニヨリテ知リ得。

大原尾張尼上（1）モト待賢門院女房ナリシカ。

みやたて（2）ハシタモノ、召仕ノ女。

江口遊女（1）名ヲ「たへ」ト云。

家集に、或は捨てた妻の事では無からうかと思はれる詞書が數ヶ所あるけれども、勿論、さうとは斷言出來ない。「相知りたりける人」「年比申されたる人」「年比聞き渡りける人」「ある宮ばらに仕へ侍りける女房」などいふ類も、いかなる人々の事かわかりかねる。私の調べた「回數」だけによると、西行の交渉繁かつたのは、寂然・崇德院・西住・上西門院・堀川局・兵衞局・俊成・成通・寂念・法印元性・寂超・公能・時忠・空仁その他といふ順序になる。勿論、これのみによつて西行の對人關係を云々する事は出來ないけれども、相當の參考には値する。

西行遺詠を離れ、一般の歷史、日記、勅撰集、私の家集の類（撰集抄・西行

物語の如き不信のものは除いて）からも調べると、高貴では、

五辻齋院頌子内親王。蓮華乘院へ御寄附文書ニ據ル。

この内親王から或る御用命を承つてゐる。歷史的人物では、

左府賴長。台記ニ據ル。

少納言信西。信西ノ妻子等ト西行トハ親交アリシガ如シ。勿論、信西トモ相知リシナラン。

藤原家隆。壬二集西行勸進百首ニ據ル。

重　源。東鑑ニ據ル。

賴　朝。東鑑ニ據ル。

秀　衡。東鑑ニ據ル。（山家集ノ奧羽旅行歌ニハ秀衡云々トイフ詞書見當ラズ）

明　惠。明惠上人傳記ニ據ル。但、上人傳ナルモノニ虛妄ノ記事ナキカ、研究ヲ要スベシ。

空寂。建久ノ頃後鳥羽院ノ寵遇ヲ忝ウセシ空寂上人ハ、文治ノ頃河内弘川ニ居リシト覺ユ。此ノ寺ヲ終焉ノ地トシタル西行ハ、當然、空寂ト懇意ナリシナラン。

さほどでも無き人物では、

神祇伯源顯仲。堀川局等ノ父。

後徳大寺實定。古今著聞集ノ挿話ニ依ラズトモ、相知レルコト明ラカナリ。

菩提院公衡。西行勸進ノ百首ヲ詠ズ。西行示寂ノ時公衡定家ノ間ニ贈答歌アリ。

刑部卿賴輔。西行等ト一品經和歌ヲ詠ズ。

高野檢校房光。野山寶簡集ニ據ル。

八條院高倉。新古今集ニ據ル。

などと相識つてゐた。野山再興の名僧覺鑁は康治二年、西行廿六歳の時に入滅したが、西行或はこれに親炙する機會を持つたかも知れぬ。少くとも、覺鑁の密嚴淨土に感化された事は疑問無い。高尾の文覺との間の有名な話が水蛙眼目

等によつて傳へられてゐるけれども、眞僞のほどは明らかでない。源義經は文治二年三年の交、西行平泉着と殆ど同時に、秀衡に投じた。（東鑑文治三年二月十日條。）義經と西行とは多分會はなかつたらう。秀衡が會はせなかつたであらう。萬一會つてゐたら、無類の史劇である。

遺詠のみによると、西行は、同時代の歌人では、專ら俊成一族及び大原三寂と懇意にしただけの如くに見える。顯輔・淸輔・顯昭などとは家集の上では交涉が無い。西行は又、多く都をよそに暮らした境遇上のためかも知れぬが、當時の歌合といふものに顏を見せてゐない。

西行を繞る人々の中、彼の心友は寂然と西住とであつたらしい。次に𨗉聖成通あたりか。俊成とは年齡も相如き、出家前から最後まで懇意であつたけれど

も、どうも歌の上の交際といふやうな感じがさせられる。俊成といふ功利的の人物と、どこまで肚の底が合つたかは疑問に屬する。

西行家集の詞書に西住（或は單に同行と書き示す）のことは十數回出て來る。非常に仲よく、諸國修行も大抵一緒であつたらしい事は、同行の文字が端的に物語る。然るに、この西住の傳記なるものが、撰集抄・十訓抄の類に見える不信の斷片挿話以外に、殆ど判明しないのは、西行研究者にとつて遺憾な事の一つだ。

西住、俗名は源兵衞尉季政（或は季正とも書く）と言つた。鳥羽院北面武士であつたが、西行と前後して出家したものらしい。さうして、西行と同じく、醍醐理性院の法脈を傳へた。山城淀の西なる美豆野（みつの）に一時住んでゐた事は、山家集によつて知り得る。年次は全く不明だが、某年の秋、月の明らかなる頃の事で、その臨終の立派であつた事、西行これに立會ひ、さうして、遺骨を携へて

高野に登つた事など、西行及び寂然の歌によつて知り得る。すなはち、西住入滅の場所は野山以外であつたわけだ。

西住が相當の年月の間、高野に西行と共に居たであらう事は、或る月明の夜高野奥の院の橋の上で、西行が西住のことを思ひ出して歌つた一首、こととなく君戀ひわたる云々の歌の詞書に「その頃、西住上人都へ出でにけり」云々とあるによつて推定し得る。西住一時下山したのであらねばならぬ。又、「西住上人」と呼ばれるからには、修道も深く、高德な人柄であつたことが想像される。

西住も歌を詠んだ。西行の家集に短歌二首と連歌二首とが收められてゐる。その他、千載集に四首。但、上手とは云へない。

西住の信仰に就いて、祐寶の傳燈廣錄の傳法嗣祖統派續八卷、醍醐理性院三世宗命の條下、付法の人々を擧げたる中に、鎌倉二郎源次兵衞季正、有二勇名一、保元平治間源氏衰微、爲二平家所一レ喪、季正入道、與二西行一爲二一双一、曰二西住一得二理性法脈一。これによると、西住の出離は、保元平治以後と解せねばならぬが、どうもそんなに後の事とは考へられぬ。聞書殘集、西行が出家前に、西住(當時在俗)と共に西山法輪の空仁を尋ねた時、西行「大堰川舟にのりえて渡るかな」としたのに對し、西住「流れに棹をさす心地して」と附けたが、此の連歌の左註に「心に思ふことありてかくつづけたるなるべし」とある。註の意は季政やがて空仁にならひて出家せんの下心ありての事なるべし、と解釋せねばならぬ。これは保延の頃の事であつた。平治まで持つわけが無い。

西行と定家との關係を述べようと思ふが、先づ左表を一覽していただき度い。

	西行		定家	
治承二	61	此ノ年又ハ翌年高野山ニ入ル。	17	別雷社歌合ニ出ヅ。
同三	62		18	
同四	63	春ノ頃熊野ヲ經テ伊勢ニ赴ク。	19	
養和元	64	伊勢滞在。	20	初學百首ヲ詠ズ。
壽永元	65	伊勢滞在。	21	
同二	66	伊勢滞在。	22	
元暦元	67	伊勢滞在。	23	
文治元	68	伊勢滞在。	24	
同二	69	秋ノ頃東海奥羽行脚ニ出ヅ。	25	西行ニ勸メラレ二見浦百首ヲ詠ズ。
同三	70	三月出羽最上[illegible]瀧ノ山ニ在リ。年内ニ上方ニ歸リシナラン。千載集ニ十八首入ル。俊成ニ御裳濯河歌合ノ判ヲ受ク。	26	千載集ニ八首入ル。此ノ頃、西行ヨリ宮河歌合ノ判ヲ頼マル。
同四	71		27	
同五	72	定家ニ宮河歌合ノ判ヲ受ク。年内ニ弘川寺ニ在リ。	28	宮河歌合ニ判シテ西行ニ返ス。

建久元	73	二月十六日弘川寺ニテ入滅。	29

西行と定家とは年齢四十四歳違ふ。普通ならば交際は成立せぬ。況んや、晩年の西行、たとひ身分を持たぬ圓頂緇衣といへども、一代の歌匠としての名高く、且つ佛道よりいふも既に「圓位ひじり」と呼ばれた高德の人である。二十歳になるやならずの定家が、普通ならば、心やすく交際出來る間柄では無い。少くとも、師と仰いで、高く遠く眺めるの外なかつたであらう。乍併、實際二人は、極めて心やすくつきあつたものらしい。勿論、それは俊成が介在してゐたためである。俊成は和歌の權威、さうして西行との交際は、天承長承の頃、佐藤義淸の頃から始まつた事は、御裳濯河歌合判詞の冒頭に書かれてある。

さて、西行と定家との交際だが、表の示す如く、定家十七歲の頃から西行は

京都に居なかつた。高野・伊勢・奥羽と遍歴して、上方に歸つたのは、文治三年後半の頃と考へられる。さうして、約二箇年の後には、河内の山寺に引籠つてしまつた。定家は高野や伊勢への文通によつて西行と不斷につきあつてゐたとしても、實際親しく面會して歌道の話を聽くといふやうな機會は、殆ど無かつたに相違ない。治承二年（定家十七歳）以前には屢々あふ機會があつたであらう。此の、ごく若い時分に、西行から敎へられたものと推定する他ない。新古今集雜歌上、

月あかき夜定家朝臣に逢ひて侍りけるに、歌の道には志深き事はいつばかりよりのことにかと尋ね侍りければ、わかく侍りし時、西行に久しくあひともなひて聞きならひ侍る由申して、そのかみ申しし事など語り侍りて、歸りてあしたに遣しける　法橋行遍

あやしくぞかへさは月の曇りにし昔語りに夜やふけにけむ

此の一首は、歌といひ詞書といひ、まことに味の盡きざるものを藏する。定家は新古今集撰者の一人だから、勿論この詞書を承認してゐるのだ。若く侍りし時西行に久しくあひともなひて聞きならひ侍る。十數歳の麒麟兒が老いたる巨匠から深い體驗談をきかされたのである。歌柄こそ違へ、定家は西行に育てられたものと言つて宜しい。さればにや、十七歳で初めて歌合に出た彼は、

深からぬ汀にあとをかきとめて御手洗川を賴むばかりぞ

といふ如き渾然たる歌を見せた。二十歳の初學百首には、

いづる日のおなじ光に四方の海の浪にも今日や春は立つらむ

天の原思へばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ

二十五歳の二見浦百首（西行勸進）には、

みわたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ

ながめじと思ひしものを淺茅生に風ふく宿の秋のよの月

霜さゆるあしたの原の冬がれに一花さけるやまとなでしこ

二十六歳の閑居百首には、

かへるさのものとや人の眺むらむまつ夜ながらの有明の月

鷺のゐる池のみぎはに松ふりて都のほかの心地こそすれ

といふやうな、非凡の作を續々と詠み出した。千載集にも數首採られた。遠方にゐた西行も、消息のついでにこれ等の歌を知らせてもらつて、「麒麟兒なる哉。將來歌道の巨匠とならん者、釋阿の御曹子を措いて他にある可らず」と感嘆したに相違ない。文治三年の夏か秋かの頃、奥州から歸つて來た西行は、自歌を番へて二卷を作り、一は俊成に、一は定家に判を求めた。二十六歳の若輩にかやうの敬意を表したのは、父俊成への阿諛でもなく、當人への甘やかしでもなく、西行心からの要求であつた。自信強い定家も、さすがに、此の時は、むげに若かりしため再三辭退したけれども、竟に引受けたのであつた。歌合の

末に定家記して曰く、「ひじりの契を仰ぎ奉ることとも、此代一つのあだのよしみにもあらず。佛の道に悟り開けむあしたは、ひるかへす緣と結びおかむためにと思ひ、又は高き賤しき、そこら道を好むともがらをおきて、齡いまだ三そぢに及ばず、位猶五つの品に沈みて、三笠山の雲のほかに、ひとり拾遺の名を恥ぢ、中略、思ゆゑあり、なほ必ずつとめおけと侍りしかば、宮河の淸き流に契をむすび、位山のとどこほる道までも御しるべや侍るとて、今きさ、後みむ人のあざけりをも知らず、昔を仰ぎ古きを忍ぶ心一つにまかせて、かきつけ侍りぬるなん」云々。すなはち、宮河歌合の判をする事の利益によつて、立身の果をも得ようといふ悲願なのだ。拾遺愚草に、果して悲願どほり、文治五年に少將翌建久元年に四位に進められた由を書いてゐる。近來發見の聞書集の表紙題名が定家の自筆なりし事も、深い因緣であらう。宮河歌合に關して西行から定家に宛てた消息文群書類從第一四三卷には、どうも信用出來ないふしがある。

ついでながら、古今著聞集に「西行、俊成定家の判せる御裳濯河宮河兩巻の歌合を諸國修行の時笈に入れて身を放たざりし」云々。又、例の作り話であらう。兩歌合の判がすんで返されると、西行は間もなく示寂した。長秋詠藻に、「又同じき外宮の歌合とて、思ふ心あり、新少將（定家）に必ず判してと書きければ、しるしつけて侍りける。ことに其年（去年文治五年）河内の弘川といふ山寺にてわづらふ事ありと聞きて、急ぎ遣したりしかば、限りなく喜びつかはして後、すこしよろしとて、年の果のころ、京に上りてと申しし程に、二月十六日になんかくれ侍りける。」すなはち、内宮歌合（みもすそ）の方は二年程前、文治三年の内に判がすんだらしいけれども、外宮歌合（みやかは）の方は、やつと臨終に間にあつたやうな次第だ。いづれにせよ、兩巻とも、笈に入れて諸國修行するやうな時間は無かつた。又、實際、修行に出てもゐない。冥途の旅に出かけたのだ。

定家と昔語りして歸つた行遍といふ人については、仁和寺諸院家記に、

前大僧正行遍。三川。任法橋眞弟子。後高野御室御付法。東寺一長者。嘉禎二年十二月廿六日補四長者。五十二。仁治元年十二月卅日轉正僧正。五十六。寶治二年三月廿八日轉大。六十四。至一長者。同年十二月廿九日辭寺務。文永五年十二月十五日入滅。八十四。

と記してゐるから、西行示寂の時に行遍は僅に六歳であつた。西行に會つてはゐないのである。唯、定家から昔の噂を聽いて、なつかしがつたのだ。

西行の對人關係を概觀するに、貴族權門の間に出入した事と、友人仲間にすぐれた藝術家の多かつた事とは、根本事實として牢記せねばならぬ。西行の交渉が殆ど貴族權門の男女に限られてゐた事は、私の列擧した八十人ばかりの名を一瞥しても明白であらう。これは、西行の生まれた門地、及び仕官の閲歴か

らして當然の結果であり、敢へて彼が榮達の人々に追從したと云ふ事にはならない。それにしても、西行ほどの人間は、いま少しく浮世離れした階級の知人を餘計に持つてゐても支障は無かつたらうにと感じられる。例へば、おなじく桑門の交際にしても、大部分は法眼・檢校・僧綱・大僧都・別當といふやうな身分を持つ貴族的僧侶であつて、一介の世捨坊主は、同行西住以外に殆ど見當らない。寂然といへども贅澤な出家である。此處に、人間西行の傾向と時代の相貌とを了解せしめる或る重要な事實が潛む。

西行の知人に鞠聖成通の如き、無類の天才のゐた事は喜ばしい。私かに按ふに、藝道の書として、成通卿口傳日記ほど面白いものは多く見られない。世阿彌の花傳書の如き哲理は語つてゐないけれども、一個の天才の體驗から得た結論を、端的に拋り出してゐる。成通に續いては、畫伯隆信、三十六歌仙染筆の

能書定信、舞樂の名手雅定、歌人として俊成及び定家。その他、才能の點で歴史的の人物を數人包藏する。

待賢門院と美福門院との御關係が保元亂を捲き起す原因の一なりし事に就いては、愚管抄以來歴史家の間に異説は無い。西行、そのいづれに御同情申上げてゐたか。出家前、鳥羽院北面時代の心境はさて措くとして、義淸が西行になつて以來、舊主家德大寺氏の關係を介して、待賢門院に、門院御所生の新院に、仁和寺御室に、上西門院に、新院の皇子元性法印に親しみを多く寄せ奉り、さうして兩女院（待賢門院 上西門院）の女房達に、待賢門院女房なりし紀伊二位を通じて少納言信西父子等に、堀川局姉妹を通じては神祇伯の一族に繁く往來した事は、明らかである。就中、崇德院との御關係は西行の一生を決定したとする說さへ散見する。

然らば、美福門院の御側に對し奉つて、冷淡であつたかと云ふに、必ずしもさうは考へられぬ。出家前の心境はさて措くとして、近衞院崩御を拜聞しては「露ふかき野べ」を踏みわけて山陵に額づき、女院御舍利を高野にお迎へしては挽歌を奉り、女院御所生の八條院宮には屢次伺候したものと推定せられる。かういふ事には拘泥せぬ西行であつたらしい。何事にも不即不離、それだけに、徹底した態度といふ如きものは、西行には問題でなかつた。態度徹底といふ如き事に拘泥する西行であつたならば、決して出家はしてゐない。「いざ事あらば、新院の御味方に馳せ參ずべし」と肚を決めておいて、保元亂には佐藤一族を提げて起つたに相違ない。

西行は源平兩氏のいづれに同情してゐたか。これも決して、徹底してゐた筈は無い。乍併、元來感傷的な、詩人的な西行として、平家により多く好感を持

つてゐたであらうとは、何人も一應想像する。既に擧げた交渉人名を一瞥しても、忠盛・時忠とは少くとも歌の上の交際をしてゐる。淸盛に招かれて、わざわざ福原まで、千僧供養の萬燈會に列してゐる。（淸盛は西行同族の雄なる秀衡を鎭守府將軍に推擧した。）宗盛父子の檻送を傳聞しては、母親（淸宗の母）の夜鶴思子籠中啼の境遇に同情してゐる。平家の人々は生者必滅、榮枯盛衰の理を見せて、瞬間に、一緒に消えて亡くなつた。源空淨土宗を開くや、平家一門は擧つて西方往生の宗風に歸依した。佛者の西行、彼等に同感せざるを得ない。反之、田舍者なる源氏には、西行として好意を持てなかつたらしい。殊に、關東の同族（佐藤氏）が前九年役以來源氏のため地盤を荒された怨みもあらう。旭將軍義仲が粟津に敗死すと聞き、「木曾と申す武者死に侍りにけりな」と言つて、冷靜なる批判的時事歌を詠じてゐる。文治二年八月十五日鎌倉營中にて賴朝に謁した時の態度は決してもの柔かくない。翌日、「頻りに抑留すと雖も、敢て物とせ

ず」銀猫を頑童に投げ與へて立ち去つたことは、行脚僧の恬淡といふよりも、「なんのくそ」といふ氣概を示してゐるかに見える。賴朝と西行とは、性格正反對だ。西行は、たとひ源氏でも、義經をば好いたに相違ない。

三　西行の旅行

洛外は言ふに及ばず、近畿の地は、出家前からも相當に歩いた事であらう。難波・住吉・奈良・初瀬・吉野・高野・熊野・伊勢あたりへは、家集で知られる回數よりも、もつと多く、而も若い時分から行つた事であらう。それらは、今日究め難い事として、もつと遠方の旅行、もしくは大なる旅行の事を調べてみよう。西行の主なる旅行は、凡そ左の如くであつたと考へられる。

康治二年二十六歳。暮春の頃伊勢に赴き、山田二見の邊に暫く滯在し、やがて東海道を下り秋風吹く白川關を越え、平泉に基衡・秀衡を訪ふ。

久安中頃三十一歳頃。高野山に在り。その後の高野滯在を家集その他によつて調

べると、次の通りである。
○久壽二年以後、高野の西行と大原の寂然との間に、しば〳〵音信交通あり。
○保元元年七月、高野より出でて、鳥羽院の御大葬に會す。
○保元二年九月以後の或日、德大寺公能が父母を亡くしたるに、西行これを高野より弔ふ。
○平治亂の企てを、西行高野にて耳にせし形跡あり。（しをりせでなほ山深くわけ入らむ云々の歌）
○永曆元年十二月、美福門院の御舍利高野菩提心院へ渡り給ふを、西行拜す。
○長寬二年、阿闍梨兼堅の仁和寺僧綱になりし時、西行「袈裟の色や若紫にそめてける云々」と言ひ送りたるは、高野よりと推定す。
○西行高野にて法印元性に屢次謁す。これは元性の御年齡より推測して、仁安・嘉應以後ならんと考ふ。
○嘉應元年三月後白河上皇高野御幸。此の機會、殊に待賢門院御所生の上皇の盛儀に、西行不在とは考へ難し。
○安元元年より治承元年まで三箇年に亙る間も、西行は高野に在りし筈なり。此の間、

五辻齋院より蓮華乘院建立の事にて西行は働くやう御指圖を蒙る。又、治承元年三月には、西行は高野より出京して、日前宮造營の課役を免除せられん事を金剛峯寺のために奔走せり。

斯ういふやうに西行高野關係の事實を年次的に拾ひ上げると、三十歳頃から六十歳頃まで、斷續して高野に居住してゐたといふ事が歸納出來る。といふよりも此の三十年の長き間、高野を中心に居住しつつ、折々京都や他の地方に出かけた、といふ方が當つてゐるらしい。大峯修行や熊野那智詣なども、高野からした事があるらしく思はれる。勿論、この間、京都にも足溜りを持つてゐたには相違ない。一例を擧げれば、聞書殘集、今宵こそ心のくまは知られぬれ云々の歌の詞書によつて、洛西太秦にも一時庵を結んでゐた事は明らかだ。

仁平二又三年三十五又六歳の頃。安藝嚴島明神に詣づ。これは、後の仁安二年の四

國行の途中、播磨で「昔みし野中の清水かはらねば」云々の歌から、逆算して、初回の西國行は凡そ仁平の頃ならんと推測した迄である。もう少々以前の事かも知れぬ。

仁安二年五十歳。十月十日賀茂に參詣し、それより四國へと志す。備前兒島より、讃岐に渡り、崇德院白峯御陵・善通寺弘法大師遺蹟等を巡拜し、年末九州の一角まで赴いたらしい。

治承二又三年六十一又二歳。冬、雪の深い時、京都を出て、高野山に入る。それより、治承四年春まで滯留す。

治承四年六十三歳。春の頃、高野を出で、熊野から新宮に、新宮より伊勢に赴き、二見の邊に庵す。文治二年まで此の邊に居る。

文治二年六十九歳。秋立つ頃伊勢發足、東大寺沙金勸進のため東海奧羽行脚、十月平泉着、秀衡に投ず。翌年三月出羽最上郷瀧の山まで行く。更に象潟ま

でも赴いたといふ事を、「松島や雄島の磯も何ならずただ象潟の秋の夜の月」などの歌によつて、信じようとする人もあるかも知れぬが、此の歌、出所不明、且つ何となく西行の作らしくない。出羽からの歸路及び上方に歸着の時不明。唯、文治三年內に歸つた事は、他の事情から明らかに推定される。

西行は一生、始終、抖擻行脚で暮らしたやうに古今世俗は考へるらしいが、それは、撰集抄等に過まられた小說で、事實に合致しない。旅行らしい旅行は、嚴島まで一回、四國方面へ一回、奧羽へ二回、これだけであり、此の四大行脚の日數を通算しても、三箇年に滿ちるか滿ちぬかであつたに相違ない。それらに次いで、大峰修行と那智瀧入堂とがあるぐらゐのものだ。その他、屢次の小行脚は、大抵畿內の事で、笠と杖とを持つた散步の如きものと想像すれば宜し

い。西行とても、佛道修行その他の關係があり、あても無しに旅行ばかりしてゐられる筈がない。一生の大部分は、洛中と洛外と高野と伊勢とにおちついて居たのであつた。

四大旅行以外に、旅行らしいものあつたとすれば、それは北越への行脚であらう。「あらち山さかしくくだる谷もなくかじきの道をつくる白雪」「たゆみつつ橇の早緒もつけなくにつもりにけりな越の白雪」の二首には、實景が籠つてゐる。千載集離別歌に、

夏の頃越の國にまかりける人の、秋は必ずのぼりなむ待てといひけるが、冬なるまでのぼりまうでこざりければ、遣はしける　　西住

待てといひて賴めし秋もすぎぬればかへる山路のなぞかひもなき

西住が待ちこがれたのは、北越から歸らぬ西行であつたらしい。諏訪姨捨や木

曾路の歌が數首あるけれども、凡作で、少しも實感を伴なつてゐない。かやうな歌では、旅行の證據にならぬ。尤も、歌はともあれ、奥羽の歸路などに木曾を通らなかつたとも言へぬのである。西行の家集には山陰道方面の歌が見えない。西行遺墨「歌集切」に「けふまでも天の橋立よそにのみ聞き渡りつついかで過ぎけん」といふ一首の解釋であるが、「こんな絶景を今日までなぜ來て觀なかつたのであらう。もつと早く來ればよかつた」と取るならば、西行は與謝宮に參詣した事になる。

西行の行脚及び生活に就いて、なほ愚見を述べねばならぬ。一生涯草紙や撰集抄などの挿繪を見て、西行といふ高僧は、いつも破れた黑衣を纒ひ、雨雫の漏る茅屋の板床に胡坐かいてゐるものと考へたら、とんだ間違ひだ。例へば、世を捨てたからとて、富裕なりし一家の財産をその儘そつくり雙林寺や理性院

に喜捨した次第では無い。妻子が一生困らぬだけのものは、ちやんと殘して置いてある。自分だけは一笠一杖になつたとしても、尾山篤二郎氏の指摘した通り、關東はおろか、日本國中に佐藤同族の縁者達が擴がつて、相當に、立派にしてゐる。行脚したからとて、現代の貧錢旅行するよりも遙かに、のんびりしてゐたに相違ない。家集を探しても、「草の庵」云々といふやうな歌は、澤山に無い。その澤山に無い草庵の歌でさへ、よく〳〵ひどい山の奧で、雪に降りこめられたといふ如き場合の如きが、いかにもぴつたりしてゐるだけで、他は、寂しくはあつても困却してゐる樣子には毛頭受取れない。洛外(東山西山など)の生活に、庵を結ぶと言つたところで、果して、どれだけ不自由があつたか。當年の洛中洛外は寺坊で埋まつてゐた。白河院の御宇には、所慶の佛像一萬體に上り、大小の塔四十四萬六千餘基と云ふ。身分のわからぬ世捨坊主空仁でさへ、法輪に「庵室」を所持して、讀經してゐた。大抵、寺の一棟を占有して、

「草の庵」と唱へたのだと思へば、間違ひない。それでないと、待賢門院の女房達などは、安全に遁世する事が出來ない。男でも同じ事だ。高野に移つてから、どうしたか。申す迄もない大伽藍で、寺坊櫛比、好きこのんで草の庵を結ぶがものは無い。眞言祕密の學問を修めに「寺」に來たのだ。「苦行」しに來たのではない。或る嚴冬の夜、折から御在山の元性法印に謁し、小袖を拜領して感激した歌がある。皇子賜ふ所の小袖だ。襤褸の墨染に襲ねるわけには行くまい。さて、伊勢神宮の邊に移つて、西ふく山に柴の庵を結び、梅花の匂ひをなつかしんでゐる。柴の庵と云つたところで、風流のために住むのではない。生活のための設備である。蓮阿記の西公談抄なるもの、僞書とする人が多いけれども、ともかく參考まで一讀すると、「濱荻を折敷きたるやうにて哀れなるすまひ」云々と書いてゐるが、其處で「和歌の會」する由も述べてゐる。西行の弟子は、神官僧侶等多數あつたらしいから、會といへば、五人や十人は來て、

茶ぐらゐ飲んだのであらう。加之、西行は、晩年、此處(伊勢)で御裳濯河及び宮河兩歌合を編輯したものと推定せねばならぬ。(文治二年伊勢發足して奥羽行脚に出てから、同三年末に俊成の判を受ける迄の間には、諸國移動中で、原稿整理の暇などは無い。)さうして、歌合の內容を檢するに、

知らざりき雲居のよそに見し月の影を袂にやどすべしとは
賴もしな君々にます折にあひて心の色を筆に染めつる
道かはる御幸悲しき今宵かな限りの旅とみるにつけても
松山の波に流れてこし舟のやがて空しくなりにけるかな
しをりせで猶山深くわけ入らむうき事きかぬ所ありやと

といふやうな、舊作、出家前の作さへもまじつてゐるに徵して、西行は「柴の庵」の中に、舊稿をうんと蓄へて置いた事が推察される。これは、詠歌を讃佛乘の方便とする西行にとつて、生命よりも大切な執着物である。なか〳〵もつ

て、濱荻を折敷きたるやうの上に、雨ざらしに出來るものでない。奥羽大行脚はどうしたか。東大寺沙金勸進の旅行である。托鉢ではない。途中鎌倉では、總追捕使の營中に泊つた。終點平泉に着いては、鎭守府將軍の客分であつた。西行が笠をかぶり杖をつき、こつ〳〵歩いてゐる繪を見て、「えらい事ぢや」などと同情しては間違ふ。昔時の旅、脚を使つて歩くのは當然の事、女人でさへ脛巾・市女笠で海道を上下した。驛毎に宿屋の設備あり、布施屋といふ無料宿泊所もあり、文字通りの草枕を營む場合は極めて例外に屬した。西行とても好んで草枕をした筈はない。かやうに言つたとて、私は西行を贅澤な生活した世捨人と貶しめる次第ではない。金殿も玉樓も、茅屋も曠野も、西行にとつては平等の關心、ひとしく客夢の結びどころであつたといふ意味なのである。一例を擧げれば、聞書殘集に、爲業の常磐の山莊に數人集まつて連歌したとき、「秋の夜ことに肌寒かりければ」西行は寂然と「背中を合」せ肌の溫みで寒さ

を凌ぐと、其處へ又、西住が雨中を來て、蓑笠を欄干に掛けた云々とあるなどは、いかにも西行の生活らしい、佳話だと思ふ。

ともかく、西行を釋迦雪山の難行苦行と結びつけたり、風流の乞食坊主と考へたりする事は、しない方がよい。眞の西行研究は、小說や先入主を撥無する事から發足せねばならぬ。

四　西行出家の原因

第一、一般厭世說

我が西行の生存した時代は、平安朝四百年の文化社會が糜爛し、弛緩し、頽廢して、鎌倉武家時代に移らうとする過渡期であつた。生活・思想共に動搖し、舊きもの崩壞せんとして、新しきもの未だ建設されなかつた。（西行寂後二年にして賴朝幕府を開き、十五年にして定家等撰進の新古今集成り、三十四年にして親鸞が淨土眞宗を開創した。）加之、天變地異相接いで到り、西行誕生の元永より出家の保延に至るまで、七度の改元、天治以外は、すべて天災地變の厄運のためであつた。かくの如き頽廢的過渡期に在つては、普通一般の人生觀は、

おのづからにして、厭世・遁避・退嬰・保身にならざるを得ない。積極的社會觀を持する者は、新しく家運を開かうとする源平二氏の武士と、新しく宗旨を創めようとする良忍・源空・榮西等の傑僧あるのみだ。かかる時、何人も現世を厭離し度くなるであらう。況んや、聰明敏感なる佐藤義淸に於いてをや。彼はその親友の大原三寂と同じ心理で、榮華の生活を墨染の衣にやつした。山家集を繙けば、二十歳頃既に萬法流轉・無常迅速を觀じた歌あり、出家後にはなほさら多い。台記康治元年三月十五日條「上略 抑西行者、本兵衞尉義淸也、以二重代勇士一仕二法皇一、自二俗時一入二心於佛道一、家富年若、心無レ愁、遂以遁世、人歎二美之一也」と記してあるのを信じなければならぬ、云々。

この一般厭世說なるものが西行出家に關して通俗には最も受入れられ易い。西行說話（一生涯草紙・撰集抄等々の類）は此の原因說に出發して、西行の一生

を敍述した。さうして、この出發點からすると、西行を、人間としてよりも、歌人としてよりも、何よりも先づ高德の修行者にしてしまはねばならぬ結果となる。

第二、戀愛原因說

これは、第一說よりも遙かに狹き範圍に於いて、一部の人々に信じられてゐる原因說。源平盛衰記の二三行を依據とする迄もなく、西行の家集の中にしばしば告白してゐる。

思ひきや雲居のよそに見し月の影を袂にやどすべしとは
つらくともあはずは何の習ひにか身の程しらず人を怨みむ
弓張の月にはづれてみし影のさやかなりしはいつか忘れむ

数ならぬ心の咎になし果てで知らせてこそは身をも恨みめ
身の憂さの思ひしらるることわりに抑へられぬは涙なりけり
もの思へどかからぬ人もあるものを哀なりける身の契かな
何とこは數まへられぬ身のほどに人をうらむる心ありけむ
身を知れば人の咎とは思はぬに恨み顔にもぬるる袖かな
哀々この世はよしやさもあらばあれ來む世もかくや苦しかるべき

これらの歌を審讀すれば、西行出家の原因の謎は解かれるであらう、云々。

第三、政治原因說

西行は元來、鎮守府將軍秀郷の血統に屬する武士佐藤義淸であつた。鳥羽院の北面、檢非違使をも望めば望み得る門地であつた。その一門は朝廷後宮にも

出入して、京師に於ける一實力であつた。加之、その同族は佐藤と稱し、大友と稱し、小山と稱し、下河邊と稱し、主として關東の地に盤踞し、その最も雄なる者は平泉に城郭を構へ奥羽を知領してゐた。佐藤一門同族の武力と富力とは、實に、新興の對抗勢力なる源平二氏の間に介在して、決定投票を握つてゐたとも觀られるのではなからうか。且つ西行は、老齢の後、鎌倉營中で弓馬の道を說いた程の男、もしも武人として立つたならば、賴政や淸盛ぐらゐの戰爭は出來たであらう。從つて、永く俗界に居たならば、將來豫想し得る動亂（保元亂・平治亂）の渦中に卷き込まれざるを得ない。殊に、西行は崇德院の寵遇を忝うし、彼また院に深く御同情を寄せ奉つてゐた。出家前後の作と推定される所の、

善悪（よしあし）を思ひわくこそ苦しけれ唯あらるればあられける身を

呉竹のふし繁からぬ世なりせば此君はとてさし出でなまし

の二首の如き、明らかにその心境を物語つてゐる。明哲保身と云つてしまへば淺薄に聞えるが、彼は性格上、政治のうるささに堪へられなかつた。かうして保元に先だつこと二十六箇年、浮世を振捨ててしまつたのである。他年高野山にての作、

しをりせでなほ山深くわけ入らむ憂き事聞かぬ所ありやと

は、平治亂の陰謀を、その直前、自分と深交ありし信西一族中の何人からか漏らされての感慨に相違ない、云々。

この政治原因説も、一部の研究家によつて舊くから主張されてゐる。「崇德上皇の御一生は西行の半生に苦悶の情を斷たざらしめ」云々と書いた藤岡作太郎博士の西行論は明らかに政治原因に觸れ、尾山篤二郎氏なども一時は此の說に傾いてゐた如く考へられる。

第四、綜合原因說

これは既述三說の一に偏せず、西行出家の原因には、無常觀もあつたらう、政治的原因もあつたらう、戀愛の惱みもあつたらう、それらが綜合併存して、竟に彼を出離せしめたとする說。「綜合原因說」とは私の假りに付けた名稱。私はもと戀愛原因說を持してゐた一人であつたが、近來いろ〳〵考へた結果、第四說に傾きつつある。佐藤義淸に一般厭世觀のあつたらう事は、勿論否定出來ない。けれども、同時に政治原因の惱みのあつた事も肯定せられねばならぬ。愚按によれば、この二つは遠因である。さうして、悲戀の苦しみと云ふ近因が加はつて、彼を世外に超脫せしめた。(但、西行をして數ならぬ身と嘆かしめた悲戀の對象者を、少々ばかりの資料によつて、これと決める事は殆ど不可能に屬する。)

諸行無常とか生者必滅とか云ふ觀念だけで遁世出來るもので無い。世相を澆季と悲觀する事だけで身を捨てられるものでも無い。澆季といひ無常といふも、一般原因であつて、西行一人の個に卽したものでは無い。個に卽した原因無くして出家したのは、古今に迦毗羅城の王子だけである。一例を擧げれば、方丈記の作者は、人生の無常や末世の變災の事など、くだくだしく述べてゐるけれども、彼は決してそれだけの事で日野の草庵に引込んだのではない。賀茂の社司を請うて許されなかつた事が世をすねた動機である。西行に就いて云へば、「入心於佛道」は一般原因であり、政治關係及び悲戀は個的原因である。「心無愁」は台記の書き誤りであらねばならぬ

附、西行獨身論

數年前まで私は、西行出家の原因は戀愛に在りと云ふ事を生一本に信じてゐる

た。それで、戀愛原因說を裏書する一つの觀方として、「西行獨身論」なるものを草し、短歌研究（昭和十一年二月號）に揭げた。參考まで、その全文（と言つても、饒舌に過ぎた部分を少々削つて）を左に轉載する。

鳥羽院の北面左兵衞尉佐藤義淸、出家して西行又は圓位は、尊卑分脈第五卷秀鄕流系譜を見ると、一子隆聖あつてその母の身分等不詳。又西行說話に屬する俗說によれば、娘が一人あつた事に成つてゐて、それが父出家の瞬間及びその後にも劇詩的效果ある役割を演じてゐる。隆聖は小山系圖の一說に、西行の子で無く弟であると解してゐるが、私は此の一說の方に從ひ、分脈の記載を拒絕する。俗說の娘も私は否定し去らうと思ふ。妻の有つた事をも亦私は信じまいとする。要するに西行は在俗の時全く獨身者であつたと推定し度い。如何なる根據あつて此の推定を敢へてするか。

順序として先づ西行遯世の動因を究めねばならぬ。それは同族憲康の暴死に刺戟された

ためとするが西行物語や一生涯草紙の所說であるけれども、少し考へて見れば此の說は釋迦傳などを見本にして後から擬造した俗說なる事がうなづかれる。唯一の歷史的文獻として左府賴長の台記康治元年三月十五日の條に「抑西行者、本左兵衞尉義淸、以重代勇士仕法皇、自俗時入心於佛道、家富年若、心無愁、遂以遁世、人歎美之也」とあるが、私には此の記錄もその儘には受入れ難い。台記の文章に據ると、西行は在俗の若年時代から心を佛道に入れ、心無愁で、そのため出家を敢行したとある。若年にして佛道に關心を持つことは當時から鎌倉初期へかけての時代思想であつて、貴族や有識階級は皆さうであつたのである。俊成にしても定家にしても乃至良經にしてもが二十歲前後から遁世や釋敎の歌を眞顏で作つた事は推定出來る。もしも特に西行のみが本當に眞劍で佛道に志したものならば、出家後の彼の生活に少くとも高僧傳中に値する底の佛者的精進と事績とが見出されねばならぬ。事實はこれに反して何も無い。彼は數年の間洛中洛外を遠く出でず、しきりに後宮や權門に出入して、感傷的の歌を作つてゐる。然も、

世の中を捨てて捨て得ぬ心地して都離れぬ吾が身なりけり

とさへ歌つてゐる。

前半生の西行はどう考へても普通の人間と格別變つたしろものでは無かつたやうだ。それが後半生（七十三歳を等分して、三十六七歳以後と云ふ意味では無い。五十歳頃から後の二十年ばかりを後半生と假りに名付ける。）に成ると、流石に年も寄り、灰汁抜けもして甘いも酸いも嚙みわけた好個の人間となり、それに天來の歌の上手さが大いに手傳つて、都でも鄙でも、圓位上人西行上人と尊敬せられる身分になつて、新古今集にも最高點で入選するに至つた。重ねて云ふが、西行を僧侶扱ひにする古來普通の考へ方は大いに矯正せられねばならぬ。山家集下の上、雜の部に、出家を思ひ立ちける頃の歌として、

世を厭ふ名をだにもさはとゞめおきて數ならぬ身の思ひ出にせむ

と云ふのが載せられてあるけれども、これは本當の告白と思へない。何時の世に、「えらい奴ぢや」と賞められ度いためばかりに二十二三歳の若い頭を剃り落す莫迦があるか。少くとも西行は左様の智慧無しでは無かつたらしい。「數ならぬ身」と嘆いた迄は本當であつて、上句の厭離遯世の名譽云々は「數ならぬ身」から出たいや味乃至あてこすりに過ぎ

ない。台記「人歎美之也」は衆愚だからこれを歎美したのである。西行みづからはその歎美をむしろ皮肉に感じたに相違ない。「數ならぬ身」とは當時の慣用として、下賤の身分の謂である。

西行出家の眞因は戀愛關係に在つたとする一部論者の觀察に、私は全然同意するのである。青春の西行をして、殊に家富み人々等から重んぜられ、現世的に何不足なき彼をして翻然として出家を企てしめた動因は、人間的に考察して、女性關係以外に無かつたのである。而して、それは必ずや失戀に非ずして、すなはち片思にあらずして、相思の關係に在りながら對手方の境遇上西行の「數ならぬ身」に不安と危險とを感ぜしめたものである事も、推定に難くない。

想ふに若き西行は如何なる女性からも愛せられる資格を十分に具備してゐた。彼は武勇を以て院の寵遇を忝うすると共に、年少の頃から和歌の道にも非凡であつた。容貌亦端麗であつた事は、宮廷の女性等と出家後さへ頗る親密に交際してゐた事でもわかる。源平盛

衰記智巻第八に、西行の出家は「源は戀故とぞ承る」云々と書いてある。これは架空の小說と假定するも、西行が當時所謂レデース・マンと考へられてゐた事の一證左には成る。

然らば西行が戀の相手方は何人であつたか。勿論想像に過ぎぬけれども、一部の論者所說の如く、それは彼の主人德大寺家との關係上彼の屢々出入して懇意であつた所の、待賢門院奉仕の女官等の中であらうとするが、矢張り最も自然な推論である。乍併、彼の眞の戀人はこれら以外の女性であつてもさしつかへない。待賢門院の女房等中に又は他の權門中に彼と年齡相如く好個の戀人があつたとしても一向さしつかへない。さうして、その戀人の背後の力（父兄であつても、他人であつても）と抗爭して「數ならぬ身」の西行が身邊の危險を感じたとするは私の想像說である。

西行が戀愛の深き體驗者であつたらう事は、山家集の歌からも推定出來る。

數ならぬ心のとがになし果てで知らせてこそは身をも恨みめ

何となくさすがに惜しき命かなあり經ば人の思ひ知るやと

今ぞ知る思ひ出でよと契りしは忘れむとての情なりけり
中々に思ひ知るてふ言の葉は問はぬに過ぎて恨めしきかな
哀れあはれ此の世はよしやさもあらばあれ來む世もかくや苦しかるべき
あはれとて人の心の情あれな數ならぬにはよらぬ嘆きを
うとくなる人を何とて恨むらむ知られず知らぬ折もありしを
遙かなる岩のはさまに獨りゐて人目おもはで物思はばや

斯樣の類の、いかにも苦勞した結果であらうと思はれるやうな戀歌は、新古今時代の他の歌人等には殆ど見當らない。徹書記が賞めちぎつた定家の戀歌は、題詠技巧の上手さである。

西行は又、自然(花鳥風月)に對して執拗な愛着を持つてゐた。

花見ればそのいはれとはなけれども心のうちぞ苦しかりける
花に染む心のいかで殘りけむ捨て果ててきと思ふわが身に
語らひしその夜の聲は時鳥いかなる世にも忘れむものか

うちつけに又來む秋の今宵まで月ゆゑ惜しくなる命かな

心をば見る人ごとに苦しめて何かは月のとりどころなる

これ等の歌を讀むと、その對象が果して花月であるのか、それとも花月に象徴された戀人であるのかさへ判らなくなる。さうして、これら煩惱の叫びは、彼前半生の制作と推定してさしつかへ無ささうに思ふ。

さて彼が袖にすがる妻を突き退け、娘の子を縁側から蹴落して家を出たと云ふ話は、悉達太子出城になぞらへて、西行を英雄化さうとした劇詩的工作に他ならぬ。私が西行に妻子無しとする論據は二つある。一は、普通の人間的考へ方であるが、もしも妻子あつたとしたならば然かく容易に遁世も出來まいし、又遁世の動因たる戀愛を然かく極端まで突き詰め得なかつたであらうと推定するが故である。古來單なる厭世を動機として若い盛りに妻子を捨てて出家した人間は、悉達太子以外に殆ど見當らないではないか。妻子を捨てて君公のために討死した義烈の士は歷史にも小說にも澤山ある。又莫迦野郎で女のために家

を捨てた男も現代まで相當ある。乍併、山家集を通じ歴史を通じて吾人の識る西行はその程度の莫迦野郎で無くて、むしろ大いに聰明な人間である。更に又、妻子を捨てる男は、莫迦野郎に非ざれば、性格上峻烈な一面を持つた男であらねばならぬ。例へば釋迦の如きである。然るに、歌を通じて認識し得る西行には、人間的情味は有り過ぎるとしても、峻烈な感じは殆ど無い。文覺との對面を敍した井蛙抄の記事などはてんで眉唾物である。

獨身論の根據の二は、山家集の何處を披いて見ても、西行に妻子の有つたらしい感じのする歌は一首も半首も無いことである。なるほど、新古今時代の歌人等は俊成にしても定家にしても乃至家隆良經等にしても、今日の所謂生活や私事は多く詠んでゐない。まれに妻子に關する作があつても、大抵それらと死別した後の哀傷の歌のみである。彼等がさう云ふ態度であるのに不思議は無い。乍併、西行、多感の西行、むごい目に合はして妻子を捨てた西行に、感情としても懺悔としても、五首や十首のさうした歌の有るのが當然でもあり、自然でもある。ところが、山家集は戀歌や女官等との贈答歌や、寂然等坊主仲間との贈答歌や、旅行歌や、花月の詠や、遊女との問答歌などで一杯に埋められて、妻子を思

ひ出したらしい歌は探しても無い。圓頂緇衣の身であるから在俗の時の事を思ひ出しては惡いと云ふ如き野暮な遠慮をする西行では無い筈だ。もし又、妻子の事を歌つたとしたらそれを家集に遺しては名譽に關するなどと莫迦氣た抹殺をする如き西行でも無い筈だ。畢竟彼は最初から獨身であつたが故に、左樣の歌が無いのである。

「山家集の何處を披いて見ても、西行に妻子の有つたらしい感じのする歌は一首も半首も無い」云々と書いてから、間も無く、疑問の一首を發見した。それは異本山家集(周嗣本のこと)の雜に、「覺雅僧都の六條房にて、心ざし深き事に寄せて、花の歌よみけるに」と題して、

花を惜しむ心の色の匂ひをば子を思ふ親の袖に重ねむ

と云ふのであつた。調べて見ると此の歌は、西行出家後三四年經ての作らしい。一應の處作者自身の感慨であつて、すなはち西行に子供があつたやうに見える。乍併、更に熟慮すると、斯樣の歌の席などでは、主人の心を想ひやつて作る事も稀では無いのだから、覺雅

僧都への同情の歌で無いとも限らない。覺雅は神祇伯顯仲の弟であるが、在俗の時妻子の有つた人で、或はその妻子を亡くした後遁世したのかも知れぬ。此の僧都は西行二十九歳(久安二年)の時に入寂し、堀川局の叔父で、大分長壽したらしく思はれる。ともかく、此の一首だけでは、私の所論を覆す根據には成らない。もしも妻子あつたと假定せば、西行の遺作約二千首の中に、「五首や十首のさうした歌の有るのが當然でもあり自然でも」あらねばならぬ。

嵯峨に住みけるに、たはぶれ歌とて人々よみけるを

うなゐ子がすさみに鳴らす麥笛の聲におどろく夏の晝臥し
昔かないりこかけとかせしことよあこめの袖に玉襷して
竹馬を杖にも今日は賴むかな童遊びを思ひ出でつつ
むかしせし隱れ遊びになりなばや片隅もとに寄り臥せりつつ
小竹ためて雀弓張る男の童ひたひ烏帽子の欲しげなるかな
われもさぞ庭の眞砂の土遊びさて生ひ立てる身にこそありけれ

いたきかな菖蒲かぶりの茅巻馬はうなゐ童のしわざと覺えて

これら兒童の遊戯を詠じた特異の數首は、昭和四年三月佐佐木信綱先生によつて初めて學界に紹介された聞書集から抄出したのである。（尤も右の內われもさぞ一首は異本山家集追加にも出てゐる。）

西行は子供がさま〴〵の遊戯してゐるのを見て、「愚僧も同じやうな幼な遊びをして育つたのだ」と深く感慨に耽つたのである。鑑賞の上から云ふと、自分の子が遊んでゐるのを見ての作とする方が一層味はひの深い事無論であるけれども、他人の子供の遊戯を見ても同じ歌は出來るのである。それゆゑ、これら數首も亦、西行に子ありとする論據には成らない。西行に「家」があつたと云ふ事も、次の二三首が證明するかに一應思はれる。

述懷の心を

昔見し宿の小松に年ふりてあらしの音を梢にぞ聞く

ふるさとの心を

これや見し昔住みけむ跡ならむよもぎが露に月のやどれる

月すみし宿も昔の宿ならで吾が身もあらぬ吾が身なりけり

これらは事實に卽しての追憶としたところで、昔の「住居」を歌つただけのことで、「家庭」のあつた證左に成らぬは、云ふ迄もない。

愚案を少しく補足する必要があるかも知れぬ。山家集その他に、出家後その妻に與へたと推定し得る歌が幾首かあると、一部の論者は云ふ。それは、

修行して遠くまかりける折、人の思ひへだてたるやうなることの侍りければ

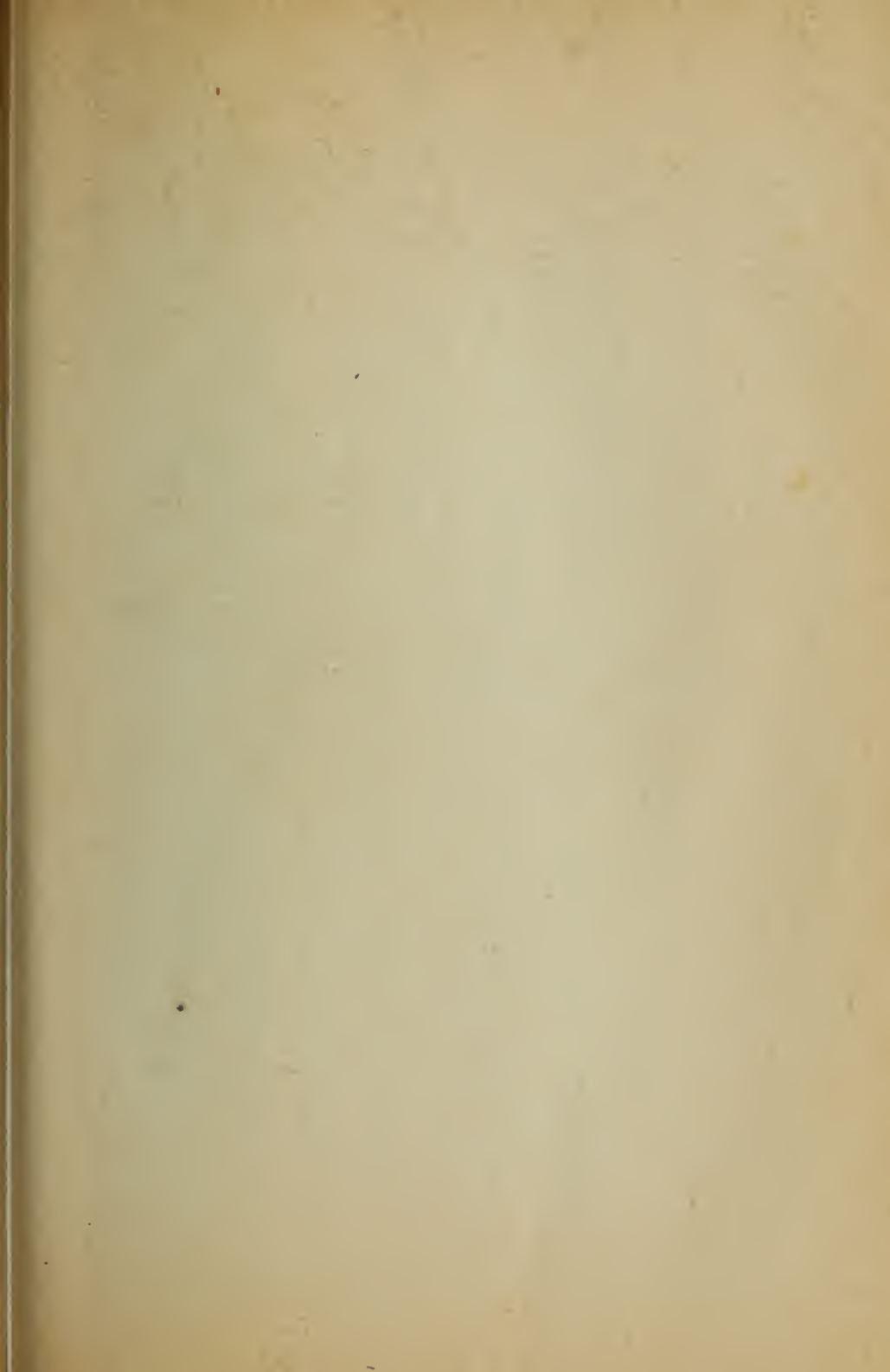
よしさらば幾重ともなく山こえてやがても人に隔てられなむ

遙かなる所にこもりて、都なりける人のもとへ月の頃つかはしける

月のみやうはの空なる形見にて思ひも出でば心かよはむ

の如きものを指す。當時の勅撰集や家集の歌序に「人」云々と書いてあるものの

は、ある時は妻を意味し、ある時は戀人(この方が多い)を意味し、ある時は友達を意味し、又ある時はさまでの關係なき他人をも意味する。場合々々によつて判讀する他ない。以上例示の歌にしても、むしろ戀人(出家前の)と取つた方が自然であらう。どう讀んでも、未練の殘つてゐる戀人に對しての感想だ。妻に對してこんな事を云ふやうでは、到底それを振捨てて出離出來る筈が無い。

私の數年前の愚按は未熟の研究草稿で、今日敢へて固執しようといふのでは無いが、西行に妻子の有つたといふ事は、現存せる家集の上からは立證出來ないと云ふ事だけを繰返して置く。

西行事實

信據し得べき文獻に依りてのみ作成す。撰集抄・今物語・十訓抄・古今著聞集・沙石集・西行繪詞・西行四季物語・西行物語・西行一生涯草紙の類を採らざること勿論なり。文中片假名まじりの所は、主として事實の年次を決定し得ざる部分とす。

鳥羽天皇　元永元（一歳）

誕生。本族は佐藤、名は義清（のりきよ）（義は憲・則・範にも作る）使左衛門尉康清の第二子、母は監物源清經女。鎮守府將軍秀郷九代の裔なり（尊卑分脈）

西行ガ德大寺ノ家臣ナリシコトハ古今著聞集ヲ俟タズシテ明ラカナレドモ、ソハ彼ニ至リテ

カ或ハ父祖ノ時代ヨリカノ問題ハ決シ難シ。鳥羽院下北面武士（尊卑分脈）トシテ仕ヘタル最初ハ、年齢ヨリ推シテ長承ノ頃ト考ヘラル。大治二年十月鳥羽新宮成リ、御障子ノ畫ト歌トヲ當時ノ名匠ニ命ジ給ヒシ時、北面ノ佐藤義清亦十首和歌ヲ奉リ、叡感ニカナヒテ御劔朝日丸ヲ賜ハル云々ト傳フルハ、全ク虚妄ナリ。大治二年、西行僅ニ十歳ナリ。而シテ其ノ十首ナルモノヲ檢スルニ、中期及ビ晩年作ノ名歌多シ。西行說話ニ虚妄多キハ槪ネ此ノ類ナリ。他モ、推シテ知ルベシ。

崇徳天皇　保延二（一九歳）

遺存歌中の處女作、君が住む宿の坪には菊ぞ飾るひじりの宮といふべかるらむ（山家集上秋）京極太政大臣中納言と申しけるをり菊を夥しきほどにしたてて鳥羽院にまゐらせ給ひたりける鳥羽の南殿のひがし面の坪に所なき程にうゑさせ給ひけり公重少將人々をすすめて菊もてなさせけるにくははるべきよしあれば、と詞書あり。公重は德大寺公實の孫にして、實能の

甥にあたり、保延二年院の殿上人なりし（台記）ゆゑ、西行の歌の事は其の頃と推定す。

右以外、山家集下ニふりにける君が御幸の云々トイフ鈴ノ奏ノ歌及ビ同集上冬ニ裏返すをみの衣と云々トイフ土御門内裏ニテノ歌ハ保延年間ノ事ニハ相違ナキモ、シカト年ヲ定メ難シ。聞書殘集所載西山法輪ニテ空仁・西住ナドトノ連歌ノ事モ、此ノ頃ナリ。山家集卷尾ノ百首モ此ノ頃ナランカト一應考ヘラルルモ、仔細ニ檢討スレバ疑問多ク、出家直後ノ作カトモ思ハル。

保延五（二二歳）

鳥羽上皇安樂壽院本御塔檢分の御幸に、德大寺右大臣實能及び西行供奉す（山家集下上、今宵こそ思ひ知らるれ云々の歌の詞書）、鳥羽院親ら御墓所と定め給ひし本御塔は保延五年竣成と傳（山陵志）

左兵衛尉（尊卑分脈ニ佐兵衛尉トアルモ、右兵衛尉トセル書モアリ）ニ任ゼラレタルハ何年ノ事トモ知リ難キガ、鳥羽上皇彼ヲ檢非違使ニ補セントシ給ヒシニ彼固辭ス云々ト傳フルハ、

信ズベキ依據ナシ。北面時代弓馬ヲ善クセシ事ハ信ズルニ足ル（東鑑文治二年八月條）。尊卑分脈ニヨレバ西行此ノ頃妻アリ、一男ニシテ隆聖（權律師トナル）ト云。秀郷流系圖一本（續群書類從卷第百五十五）ニ隆聖一說弟ト註セルハ注目ニ値スベシ（愚案、西行獨身論）

保延六（二三歲）

春の頃より出家を思ひ立つ（山家集下上、空になる心は春の云々、世を厭ふ名をだにもさは云々の二首）、又、鳥羽院に出家のお暇申上ぐる歌あり（異本山家集追加）、かくて十月十五日出家す（台記康治元年三月十五日條及び百錬抄卷六）法名圓位、大寶房（一に大本房）又西行と號す（尊卑分脈）、遁世ののち山家にて、山里は庭の梢のおとまでも世をすさみたるけしきなるかな（異本山家集雜）、ゆかりなりける人の許へ、世の中をそむきはてぬといひおかむ思ひしるべき人はなくとも（山家集下上）の詠あり。

出家原因及ビ其ノ際ノ光景ニ關スル說話類ニハ虛妄ノ事多シ。西行出離ノノチ直チニ遠國ヘ

行脚セリトスル説ハ、心境上一應尤モラシケレドモ、事實ハ決シテ然ラズ。北山・東山・西山ト轉々シテ兩三年間洛中洛外ヲ遠ク離レザリシコトハ家集コレヲ證ス。

近衞天皇 康治元（二五歳）

二月廿六日待賢門院落飾の時御結縁のため法華經廿八品の歌を詠む（聞書集、長秋詠藻下釋敎歌參照）、三月十五日內大臣賴長を訪ひ自筆一品經の供養を勸進す（台記）

康治二（二六歳）

此の頃東海奧羽行脚をなせりと推定す。後葉和歌集所載西行歌「みちのくへ修行してまかりけるに白川の關にとどまりて」云々と詞書せる、白河の關屋を月のもる影は人の心をとむるなりけり、參照。後葉和歌集は詞花集成立（天養元年）の後十年餘を經て保元元年の頃藤原爲隆（寂超）私撰せしものと考へ

らる。

山家集下、遠ク修行スルコトアリケルニ菩提院ノ前斎宮(斎院ノ誤リ)ニマヰリタリケルニ人々別ノ歌ツカウマツリケルニさりともとなほ逢ふことを頼むかな死出の山路をこえぬ別れはトアリ。コレハ西行東國行脚ニ臨ミ仁和寺菩提院ノ統子内親王(後ノ上西門院)ノ女房達ニ暇乞シタルモノト推察セラルルモ、勿論シカト定メ難シ。鈴鹿山うき世をよそにふりすてて云々トイフ有名ナル歌ハ必ズヤ此ノ旅行ノ時ナルベシ。而シテ途中暫ラク伊勢ニ滞在シタリト考ヘラル。詞花集ニ讀人不知、世をすつる人はまことに捨つるかはすてぬ人こそすつるなりけれノ一首ハ西行ノ歌(異本山家集雜)ナレドモ、ソノ作年ハ天養元年(詞花集院宣)以前或ハ仁平元年(同集成立)以前ト云フノミニテ、シカト定メ難キハ遺憾ナリ。

天養元（二七歳）

崇徳院詞花集のため歌召し給ふ。此の時大原三寂と西行との間にその歌の事にて交渉あり(山家集下上)

西行ガ心友ナル大原三寂トノ交渉ハ、家集ニテハ此ノ時ニ始マル。西行ト為忠一族トノ交際

ハ更ニ遡リテ長承・保延ノ頃ヨリナルベシ。丹後守爲忠ニ爲業・頼業・爲隆ノ三子アリテ、皆官途ニ出仕セシガ、末子爲隆最モ早ク遯世（康治二年）シテ寂超ト號シ、次ニ頼業ハ近衞天皇ニ仕ヘテ藏人ナリシヲ天皇崩御（久壽二年）ノ後出家シテ寂然ト號ス。兄弟共ニ大原ニ隱棲セリ。寂然ニハ兄寂念（想空）入滅ノ時西行ト贈答セル歌アルヲ以テ、相當長命セシモノナラン。長兄爲業最モ後レテ永萬元年ノ頃出離セシモノト推定セラル。寂念又ハ想空トモ號シ、主トシテ父ノ山莊ナル洛西常磐ノ第ニ住セシ如キモ、異本山家集（周嗣本）ノ歌序ニ想空入道大原にてかくれたりしを云々トアレバ、彼亦大原ニ住ミシコトアルヲ窺ヒ得ベシ。寂念入滅ハ治承二年以後ト考ヘラル。即チ大原三寂ト稱セラルル所以ナリ。山家集下上、定信入道觀音寺ニ堂造リニ結緣スベキヨシ申シ越シタルニ西行、山くづすその力根は難くとも心だくみをそへこそはせめト返答セリ、太宰府觀音寺ガ康治二年六月廿一日燒亡セシ事アルニヨリ、多分ソノ再建ノ事ナルベキカ。山家集ニモ異本山家集ニモ、西行ガ覺雅僧都ノ六條房ヲ訪ヒテ歌詠ミシコト見ユ。覺雅ハ神祇伯顯仲ノ弟ニテ仁和寺僧綱、久安二年入寂ナレバ、二人ノ交渉ハ西行二十九歳マデノ事ナリ。奈良法雲院覺譽（カウヨ）大僧都ヲ尋ネテ歌詠セシコト異本山家集及ビ聞書殘集ニ見ユ。覺譽モ覺雅ト同ジク久安二年入滅。

久安二（二九歳）

待賢門院崩御あらせられし三條高倉第の、堀川局のもとへ故女院御追悼の歌を贈る（山家集下上、尋ぬとも風のつてにも云々の歌）

鳥羽中宮待賢門院璋子（德大寺公實女、實能妹）ハ久安元年八月廿三日崩御（台記）遊バサレ、院ノ女房堀川局・中納言局ナド世ヲハカナミテ出離シ、或ハ仁和寺ノ奥ニ或ハ西山嵯峨野ノ邊ニ隱栖シ、兵衛局ノミハ後ニ上西門院女房トナル。西行シキリニ此等女房ト往復シ、歌ノ贈答ナド家集ニ多ケレド、年次ハ凡ソ久安初年ノ頃ナラント想像シ得ルノミニテ、シカト定メ難シ。女房等ノ隱栖所ト西行ノソレト近接セシ事ハ推察スルニ難カラズ。中納言局ヤガテ小倉山ヲ捨テ紀州天野ニ移リタルニ、院ノ帥局コレヲ訪問シ、二人シテ粉川寺ニ詣ヅ。此ノ時西行高野ヨリ出デテ案內シ、吹上濱ニテ風雨ニ遇フコトアリ（山家集下上）。コノ事實ガ何年ナリシカヲ知ルコトハ、西行高野在住ノ初メヲ決スル事トナリテ、極メテ大切ナルモ、遺憾ナガラ久安初年ノ頃ト想像シテ滿足スル外ナシ。撰集抄第四ニ、中納言局小倉山ヲ出デ三年後ニ歿セシ由記セルモ、信據シ難シ。サテ西行高野入リハ久安初年ノ頃ト前提シタル上ニテ、家集ニ屢次現ハルル大原三寂（殊ニ寂然）トノ高野ヨリノ應酬ヤ西住ニ關スル部分ハ、何年ノ事ナルカ、全ク暗中摸索ノ感アリ。寂然及ビ西住ノ傳記不精密ニテ、殊ニ二人共ニ歿年

不審ナルハ西行研究上甚ダ不便ナリ。唯、西住ガ寂然ニ先立チテ入滅シタルコトヲ知リ得ルノミ（山家集下上、亂れずとをはり聞くこそうれしけれさても別れは慰まねどもトイフ寂然ノ挽歌）。大峯修行ノ歌山家集下ノ上下ヲ通ジテ十七首ヲ數フルモ、皆同一時ノ修行ノ場合ニ詠マレタルモノト覺ユ。古今著聞集ニ西行ヲ大峯二度ノ行者トシテ推奬セルハ、家集ヨリシテハ立證シ得ズ。ソハ兎モ角トシテ、大峯修行ハ高野ヨリセルモノナルコト推定シテ可ナランカ。又、熊野那智詣ノ歌ハ少數ナガラ山家集・異本山家集・聞書集ニ散見ス。コレヲ檢スルニちらで待てと都の花を思はまし春かへるべきわが身なりせばノ如ク、出家直後ノ洛中洛外時代、否、或ハ出家前カトサヘ思ハルル歌モアレド、高野ヨリ詣デタルコトモ無キニアラザルベシ。山家集下上ニ、秋ノ暮レカタ修行ニ出デ侍リケル道ヨリ權大納言成通ノモトニツカハシケル、嵐ふく峯の木の葉にともなひていづちうかるる心なるらむ、コレハ久安五年以後ノ作ナルガ、何年トハ定メ難シ。鞠聖成通ノ權大納言ハ久安五年ノコト。

久安六（三三歳）

崇德院百首歌召し給ふ、德大寺右大將公能その詠草を西行に內見せしむ

（山家集下上、家の風ふき傳へける云々の歌）

崇德院讃岐遷幸以前ニ、右以外、西行扇ヲ佛ニタテマツリテ祈ルコトアリシニ院ヨリ御製賜ハリ西行コレニ奉和セル歌アリ（山家集下上）、又所緣ノ者勅勘ヲ蒙リシニ西行赦免ヲ願ヒテ難有キ御沙汰イタダキタルコトアリ（同集下下）、ナホ久安年間ノ作トオボシキモノニ、中納言家成ノ渚院別業ノ荒廢セルヲ西住・淨蓮ナドト共ニ見テアハレメル詠アリ（異本山家集雜）平忠盛ノ八條ノ第ニ高野ノ人々ト會シテ月明蛙聲ヲ聽ク歌（聞書殘集）アルガ、コハ忠盛ノ歿年ヨリ考ヘテ仁平三年以前ノコトニ相違ナシ。忠盛ハ勅撰集ニモ入選セル人ニテ、西行ノ歌友ナリシガ如シ。

仁平元（三四歳）

此の頃詞花集撰進、西行の歌一首讀人不知として入る。

仁平二（三五歳）

此の年、或は翌年、安藝嚴島明神に參詣せりと推定す（山家集上秋、浪の音を心にかけて云々の歌）

久壽元（三七歲）

中院右大臣雅定に出家を勸む（山家集下上、すむとみし心の月し云々の歌）

後白河天皇　久壽二（三八歲）

此の年或はその後、船岡知足院の近衞天皇御陵に詣づ（山家集下上、磨かれし玉のうてなを云々の歌）

保元元（三九歲）

七月二日鳥羽法皇崩御、西行高野より來りて御大葬に會す（山家集下上）。

保元亂突發、崇德院には七月十二日夜仁和寺北院に入らせ給ふ。西行急ぎ伺候し阿闍梨兼賢に會ふ（山家集下上）

德大寺左大臣實能保元二年九月二日仁和寺菩提院ニテ薨、西行ソノ後ココヲ尋ネタルニ形見

ノ德大寺堂燒亡シテ礎石ノミナルヲ歎キなき人の形見に建てし寺に入りて跡ありけりと見て歸りぬるト詠ズ（異本山家集雜）、百錬抄ニ保元元年五月廿二日内大臣實能德大寺堂勇士亂入放火爲灰燼トアル是レナリ。西行ノ詠、ソノ後何年ノコトナルカ判明セズ。

保元二（四〇歲）

德大寺公能同時に父母を失ふ。此の年或は翌年、西行高野より弔ひ公能に出離を勸む（山家集下上、かさねきる藤の衣を云々の歌）

鳥羽院皇女暲子内親王、後ノ八條院、白河殿ニテ蟲合セラレシ時西行ニ歌アリ（山家集下上、ゆく末の名にや流れむ云々）、內親王ハ平治元年二條天皇即位ノ時准母トシテ八條院ヲ稱シ給フ、故ニ西行詠ハ平治元年以前ナリ。

二條天皇　平治元（四二歲）

侍從大納言成通に出家を勸む（山家集下上、おどろかぬ心なりせば云々の

歌）、成通平治元年十月出家法名栖蓮、應保二年薨。

山家集下下、思ハズナル事思ヒ立ツ由聞エケル人ノ許ヘ高野ヨリツカハシケルト詞書シテ、しをりせでなほ山深くわけ入らむ憂き事聞かぬ所ありやと。コノ一首、詞書ト云ヒ、意味深長ナリ。アル人コレヲ解釋シテ、信西入道等ガ或ル大事（平治亂）ヲ企テ居ル由ヲ西行聞キ込ミタル際ノ歌ナランカト云ヘリ。參考ニ値ス。山家集上春ニ、上西門院女房ガ白河法勝寺ニ花見シ、翌日西行ヨリ兵衞局ノ許ヘ、みる人に花も昔を思ひ出でて云々ノ歌贈ルトアリ。此ノ法勝寺花見ノコト後德大寺實定ノ家集ニモ出ヅ。イツノ事ト判明セザレド、鳥羽院皇女統子内親王（山家集ニ菩提院前齋院又ハ淸和院前齋院トアル御方）ニ上西門院ノ院號奉ラレタルハ平治元年ナレバ、ソレヨリ後ノ事ニハ違ヒナシ。山家集下下ニ、高野ノ西行ト大原ノ寂然トノ間ニ十首宛ノ應酬見エタルハ、久壽二年以後ノイヅレノ年カナル可シ。賴業ハ近衞天皇崩御（久壽二年七月）ノ後ニ入道シテ寂然ト號スト推定セラル。又、寂然高野ニ西行ヲ訪ヒテ紅葉ノ詠アルモ、年次モトヨリ究メ難シ。山家集下上、爲業常磐ニ堂供養シケルニ世ヲ遁レテ山里ニ住侍リケル親シキ人々マウデ來タリトキキテイヒツカハシケル古にかはらぬ君が姿こそけふは常磐の形見なるらめハ久壽二年ヨリ永萬元年ニ至ル約十年ノ間ノイヅレノ年カナルベシ。世ヲ遁レテ山里ニ住ミシ親シキ人々ノ中ニハ入道寂然モ在ラン。而シテ爲業ノ出家ハ永萬元年ナリ。此ノ歌、古にかはらぬ君が姿トイヘバ、爲業未ダ薙髮セザルナリ。サラニ聞書殘集

ニ常磐ノ莊ニ爲業居テ、西行ハ寂然・西住ト共ニコレヲ訪ヒシニ、ヤガテ靜空・寂超ナドモ來合セ、月明ノ夜ヲ徹シテ連歌シタルコト記セリ。此ノ時西行ハ「太秦ニコモリタリケルニ」云々ノ文句アルニヨリテ、彼一時太秦ノ里ニ閑居セシ事ヲ知ルベシ。

永曆元（四三歲）

十二月四日美福門院の御舍利高野の菩提心院に渡され給ふを拜す（異本山家集雜、けふや君おほふ五つの云々の歌）

應保二（四五歲）

侍從大納言入道成通薨、西行これを弔す（山家集下上、ゆきちらむ今日の別れを云々の歌）

新古今集雜下、西行法師山里ヨリ罷リ出デテ昔出家セシソノ月日ニアタリテ侍ルナド申シタリケル返事ニ入條院高倉、うき世いでし月日の影のめぐり來て變らぬ道を又照らすらむトア

ルハ、鳥羽院皇女暲子内親王應保元年二條天皇即位ヨリ八條院ト呼バレ給ヒシ故、其ノ頃以降某年ノコトニ相違ナシ。某年ノ十月十五日西行多分高野ヨリ出京シ、八條院ノ御殿ニ伺候セシナリ。女房高倉ノ歌ニヨレバ其ノ頃既ニ西行高僧ノ噂高カリシト見ユ。

長寛二（四七歳）

阿闍梨兼賢仁和寺の僧綱になりぬと聞きて西行歌を贈る（山家集下上、袈裟の色や若紫に云々の歌）、僧官補任長寛二年條に兼賢の名見ゆ。

山家集下下ニ、二條院ノ内裏ニテ貝合セラレシ時西行人ニ代リテ詠ミシ歌九首出ヅ。院ノ御代ハ平治元年乃至永萬元年ナレバ、歌ハ其ノ間ノ事ナリ。

六條天皇 永萬元（四八歳）

七月廿八日二條上皇崩ず、御五十日のはてに西行その御陵に詣づ（山家集下上、今宵君しでの山路の云々の歌）

山家集下下ニ、大宮女房加賀ガ男ト共ニ有馬ノ塩湯ニ行キタル時、西行ソノ男ニ代リテ加賀ト歌ヤリトリスル事アリ。大宮女房加賀トイヘバ勿論有名ナル「伏柴ノ加賀」ノコトニテ、大宮トハ二代后多子ノ御事。多子ガ大宮トナリ給ヒシハ二條天皇讓位ノ永萬元年七月以降ナレバ有馬溫泉云々ノ歌ハ西行四十八歳以後ノ事ナリ。カヤウノ年齡ニテカカル事スル所ニ西行ノ片影ヲ窺ヒ得ベシ。西行又、陰陽頭ナル人ニ代リテ其ノ人ノ戀シタルハシタモノ（身分高カラザル宮女）ニ歌ヤリタル事モアリ（山家集下下）

仁安元（四九歳）

信西の妻紀伊二位局の死を弔し挽歌十首を詠む（山家集下上、流れゆく水に玉なす云々の歌等）

聞書集ニ、題廣ノ大宮ノ家ニ寂然・西行・西住ナド集リテ歌ヨミ連歌スル事アリ。俊成ガ顯廣ト名ノリシハ仁安二年五十四歳マデナレバ、此ノ會合モ仁安二年前ナルコト疑ナシ。

仁安二（五〇歳）

十月京都より西國行脚に出づ。備前兒島より海を渡りて讃岐に上陸、崇德院の白峯御陵を拜し、弘法大師誕生地の善通寺に巡禮し、年末九州まで赴きたるが如し(山家集下下)

仁和寺御室覺性法親王ノ御許ニテ西行詠ミシ歌、山家集上冬及ビ下上ニ出ヅ。法親王嘉應元年十二月十一日示寂ナレバ、歌ハソレ以前。山家集下下ニ戀百十首アリテ、ソノ尾ニ建春門院少納言局ナル女房ガ此ノ百十首ヲ借覽シテ西行ニ返シタル旨記セリ。建春門院平滋子ハ後白河后、仁安二年女御、同三年皇太后、嘉應元年院號、安元二年崩御ユヱ、戀百十首ハ嘉應元年(西行五十二歲)以後ノ作ナルベシト一應考ヘラルルモ、勿論ソレヨリモ以前ノ作トスル異說モ立チ得ベシ。西行高野ニテ元性法印ニ謁シ歌ヨミシコト再三アリ(山家集下上)、ソノ年次容易ニ判ジ難ケレドモ、崇德院寶算四十六ニテ崩御シ給ヒシユヱ、第二皇子ナル元性ノ御年齡ヨリ推シテ、高野御入室ハ院崩御ノ後ナルベシト考ヘラル。依ッテ此等西行ノ歌ハ仁安・嘉應以後ト推測ス。西行ト吉野トノ緣モ深シ。家集ヲ檢スルニ、吉野山ノ歌ハ、題詠ノ形式多キモ、凡テ五十首ホドニ上ル。一生ニ幾回カ吉野ニ赴キ、相當長キ間滯留シタル事モアルラシケレド、詳シキコトハ全ク不明ナリ。山家集下上、國々マハリテ春カヘリテ吉野ノ方ヘマカラントシケルニ人ノ此程ハイヅクニカ跡トムベキト申シケレバ花を見し昔の心あら

ためて吉野の里に住まむとぞ思ふトイフ一首モ殘念ナガラ年次知リ難シ。或ハ仁安三年春西國行脚ヨリ歸リテノ事カナド臆測スルノミ。吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむモ、山家集ニ題シラズトセル數多ノ歌ノ中ニマジリテ、前後ノ事情ヲ窺フニ由ナシ。みやたてト呼ベルハシタモノ（身分高カラヌ女官）尼トナリテ吉野ニ住メルニ、高野ノ西行ノ許ヘ供養ノ料ヲ贈リ來シコト同ジク家集ニ見ユルモ、年次推測シ難シ。西行初メテ吉野觀櫻セシハ出家前ノ若キ頃ナルベシト、稚拙ノ歌アルニヨリ推定シ得。高野在住時代ニ屢々赴キシナランコトハ地理的關係ニヨリテモ想像シ得ベシ。吉野ヨリ龍門ニ詣リタルコトハ山家集下下、龍門ニマヰルトテ、瀬を早み宮瀧川を渡りゆけば心の底の澄む心地するニテ知ラル。吉野山靑根ノ麓ナル苔清水西行庵址及ビ淺くともよしや又汲む人もあらじわれにこと足る山の井の水ハ古文獻ニ何等ノ根據ナク、德川時代ニ至リテ野晒紀行・鶉衣・蕉簔册子ナドニ初メテ見ハレタルモノナリ。

高倉天皇　承安元（五四歳）

六月一日後白河院熊野御幸のついでに住吉に駐まり給ふ、翌日西行その御跡を拜す（山家集下下、絶えたりし君が御幸を云々の歌）。十月八日上西門

院雙岡附近の法金剛院内に御堂御建立供養の事あり（玉海）、西行これに會す（山家集下上、紅葉みて君が袂や云々の歌）

山家集下下ニ、賀茂齋院退下ノ後、西行本院ノ前ヲ過ギ、サビシク哀レニ感ジ、君すまぬみ内は荒れて有栖川云々ノ一首ヲ宣旨局ノ許マデ贈リヌ。ココニ齋院トハ五辻齋院頌子内親王ノ御事ニシテ、承安元年六月卜定、三ケ月ニシテ退下。西行ノ歌ハ退下直後ノ事ト考ヘラル。

承安二（五五歳）

三月十五日平相國淸盛攝州和田濱にて千僧供養す（百錬抄）、そのついでに萬燈會ありて西行これに會す（山家集下上、きえぬべき法の光の云々の歌）

安元元（五八歳）

鳥羽法皇御追善のため同皇女五辻齋院大義房賢宗に命じて高野東別所に蓮華乘院を建立せしめらる、賢宗寂後西行その事を繼ぐ（女院御寄附文具書

及び建久五年齋院驄宣）

安元二（五九歳）

叡山無動寺に千日修行の慈鎭の許へ西行歌を贈る（異本山家集追加歌、いとどいかに山を出でじと云々）、門葉記によれば、慈鎭廿一歳安元二年の時千日の間比叡山無動寺に籠りて專念修行す云々。

異本山家集雜高倉院ノ時たのもしな君々にます云々ノ歌、新勅撰集高倉院ノ御時傳へ奏セサスル事侍リケルニ書キソヘテ侍リケル跡とめて古きを慕ふ云々ノ歌アリ、院ノ御治世ハ仁安三年乃至治承四年。

治承元（六〇歳）

三月十五日西行京都より高野檢校に消息す、事は紀州日前宮造營の課役免除申請に關す（高野山寶簡集）、西行五辻齋院の命にて高野東別所蓮華乘院

を壇上に移す、五月十日事を始め十二日柱立六月十日上棟十一月御供養あり。

治承二(六一歳)

此の年或は翌年、雪深き頃西行高野にまゐると聞きて中宮大夫平時忠より贈歌あり(山家集下上)、中宮とは建禮門院の御事、時忠中宮大夫たりしは治承二年七月より同五年十一月まで。同じく家集下上に、大原三寂の長兄寂念(想空とも號す)入滅し寂然と西行との間に應酬あり。寂念は治承二年三月十五日別雷社歌合に出席し、その後所見なきゆゑ、治承二年後いくばくもなくして入滅せるものと考へらる。

山家集下上、江口ノ遊君トノ應酬ハ極メテ名高キ說話トナリ、謠曲ニ戲曲ニ小說ニ俗謠ニ主題ヲ與ヘタルガ、事ノ年次不明ナリ。撰集抄第四ニハ治承二年九月ノ事トセルモ、素ヨリ採

ルニ足ラズ。私カニ按フニ、六十一歳ノ瘠法師ト遊君トヲ組ミ合セタルニテハ、物語トシテモ價値乏シ。歌ノ趣ヨリ察スルモ、西行ナホ壯年ノ時ノ事ナラザルベカラズ。ソハ兎モ角トシテ、撰集抄ナルモノ、西行自身ノ事ニ關スル記事ノ部分ハ、悉ク虚妄ヲ極メテ、學問上採ルニ足ルモノナシ。又卒讀シテ直感スル所ニヨルモ、スベテ西行ラシカラヌ美文名文ナリ。西行ノ樂遊的態度ニ徴スルモ、洗煉セル文章ノ書キ得ル筈ナシ。詩歌ノ上手ナル者必ズシモ名文家ニアラザルハ、古今例示スルマデモナカラン。撰集抄ヲ西行著トスル事ノ非ニ就イテハ、最早新シク言フベキコト無シ。古クハ耳底記コレヲ疑ヒテ後人加筆說ヲナシ、山岡俊明ノ類聚名物考ニハ僞書ト斷ジ、藤岡作太郎氏ハ「撰集抄を拈出し來りて僧西行の名を强ひ」タルハ陋劣ナル惡戯ナリト述べ、野村八良氏（鎌倉時代文學新論）ノ研究ハ委曲ヲ盡クシテ或部分ニ西行ノ遺文アルヤモ不知ト結ベリ。筆者ハ、一小部分トイヘドモ西行遺文ノ存在ヲ信ゼザラント欲ス。

治承四（六三歳）

熊野詣の途すがら夢の告に驚きて寂蓮勸進の百首歌を詠ず（異本山家集追加歌、寂蓮人々勸めて百首の歌よませ侍りけるにいなび侍りて熊野に詣で

ける道に夢に何事も衰へゆけど此の道こそ末の世に變らぬ物なれなほ此の歌よむべき由別當湛快三位俊成に申すと見侍りて驚きながら此の歌を急ぎよみ出してつかはしける奥に書き付侍りける、末の世にこの情のみかはらずと見し夢なくばよそに聞かまし）此の一首作年容易に判じ難し。按ふに、寂蓮が人々に勸進して歌よますする迄に至れるは、若輩の頃とは考へ難し。次に、三位俊成とあれば仁安二年以後の事ならざるべからず。次に又、寂蓮この頃高野入山中ならば都合よしと考へ、寂蓮法師集を披見したるに、「高野にしばし籠りたりける頃敎長宰相入道病に煩らひて今はと成にければ賴輔卿とぶらはむとてまかりける程に身まかりて後彼山に上りたる由を聞きて遣はしける」と詞書せる一首あり。敎長賴輔兄弟は關白師實の孫にて、敎長は應保二年の頃より高野に隱栖し、歿年しかとせざるも、その家集を檢するに治承二年頃迄存命の事は明らかなり。弟賴輔は文治二年薨。

然る時は、西行伊勢移住以前にて寂蓮高野にありし「しばらく」の間といふは治承四年頃以外に無し。此の寂蓮勸進百首は、全く失はれて殘らず。さて西行此の年治承四年新宮より伊勢へと赴く（山家集下下、年へたる浦のあまびと云々の歌）六月福原遷都の由聞きて、雲の上やふるき都になりにけりすむらむ月の影はかはらで（異本山家集雜）、以後六年間伊勢山田二見の邊に假住す。

壽永二（六六歲）

二月千載集撰進すべき旨の院宣俊成に下る、西行そのため歌を集めて俊成に送る（山家集下下、花ならぬ言の葉なれど云々の歌）、四月公卿勅使久我通親京都進發の由を聞きて西行に歌あり（玉海及び聞書集）

後鳥羽天皇 元曆元（六七歲）

正月木曾義仲戰死の由を聞きて歌あり（聞書集）、その他聞書集に「死手の山こゆる絕間は」「沈むなる死手の山川」の二首も賴朝擧兵以降この頃までの間の作に相違なし。同集に兵衞局の「いくさを照らす弓張の月」に西行「心きる手なる氷の影のみか」と附けたる事、及び兵衞局の死を悼みて二首詠じたる事も、元曆元年又は少々以前の事に相違なし。

文治元（六八歲）

六月平宗盛父子鎌倉より京都へ送らるる由聞きて同情せる歌あり（異本山家集雜、よるの鶴の都のうちを云々の歌）異本山家集雜に菩提山上人良仁と對月述懷せし一首「めぐりあはで雲のよそには」云々も此の頃の事と推定す（良仁文治元年五十鈴川下流に菩提山神宮寺を再興す、菩提山寺傳）、

また、山家集下上に伊勢に齋王おはしまさで云々と詞書せる「いつか又いつきの宮の」の歌、聞書集に五條三位入道のもとへ伊勢より濱木綿云々と詞書せる「はまゆふに君が千とせの」の歌、及び異本山家集雜に俊成の許へ小貝を拾ひて送りたる歌は、治承四年以降この頃までの間の事と考へらる。聞書集に神主荒木田氏良と歌の贈答せるも、此の間の事に相違なし。因みに、西行二見閑居の間の事を記せる西公談抄なるものあれども、眞僞のほど覺束なし。

文治二（六九歳）

初秋の頃伊勢發足、東大寺大佛殿再興の沙金勸進のため東海奥羽行脚に出づ。年たけて又越ゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山、風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな（共に異本山家集、

但、後の歌を戀の部に入れたるは誤謬）の詠あり、八月十五日鎌倉にて頼朝に謁し、翌十六日頼朝贈る所の銀猫を營外の小童に與へて去る（東鑑）、途に陸前名取郡笠島なる藤原實方の古墳を弔ひ、十月十二日平泉着（山家集下上）流罪にて同地に在りし南都の僧と中尊寺にて面談し遠國述懷の歌を詠む（異本山家集雜）、此の年定家西行の勸めにより二見浦百首を詠ず（拾遺愚草）、隆信・寂蓮・家隆・公衡等も西行の勸進にて伊勢百首を詠ず。

西行が勸めたるは大行脚發足以前の事ならん。

文治三（七〇歳）

平泉對岸の櫻花を賞し、三月出羽の國最上郷瀧の山といふ山寺に赴く（山家集下下）、此の年西行自歌を卅六番に番ひたる御裳濯河歌合一卷を俊成に送りて判を乞ひしに、俊成やがて判して返す（長秋詠藻）、ついで宮河歌

合一巻卅六番を定家に送りて判を求む（歌合巻末定家文）

奥羽大行脚ヨリ歸リシ西行ハ、河内葛城山麓ノ弘川寺ニ入ルマデノ間、暫ラク京都附近ニ留マリシモノト想像セラル。聞書集ニ、嵯峨ニ住ミケルニ戯レ歌トテ人々ヨミケルヲト題セル十三首ハ頗ル異色アル作ニテ、晩年ノ歌ニ相違ナシ。西行出家直後ノ如ク、晩年暫時ナリトモ再ビ西山ニ庵セシカ。家集ニ嵯峨邊ノ歌多シ。晩年東山雙林寺ニ住ミテ此處ニ終ルトスルハ俗説ニシテ、確カナル根據ナシ。乍併、頓阿コレヲ慕ヒテ同所ニ草庵ヲ結ビ跡しめて見ぬ世の春をしのぶかなその二月の花の下蔭ト詠メルヲ見レバ、室町以前雙林寺終焉説ノ行ハレシコト明ラカナリ。又、聞書集ニ地獄畫ヲ見テト題セル二十七首ハ和歌史上特筆スベキ連作ニシテ、手法練達、晩年ノ作ニ相違ナシ。地獄繪ハ亂世ノ當時佛者ニヨリテ坊間ニ流布セシメラレタルモノナレバ、西行モ屢々コレヲ見シナラン。或ハ按フニ、東山長樂寺ニ巨勢廣高ノ筆ナル地獄繪ノ壁畫アリテ當時甚ダ有名ナリキ、西行コレヲ歌ヒシナラン。井蛙抄第六ニ、或人云、千載集ノ比、西行在東國ケルガ、勅撰アルト聞テ上洛シケル道ニテ、登蓮ニ逢ニケリ、勅撰ノ事尋ケルニ、ハヤ披露シテ御ウタモ多入タルト云ケリ、鴫立つ澤の秋の夕ぐれトイフ歌入タリヤトトヒケレバ、見エザリシトコタヘケレバ、サテハ見テ要ナシトテ、ソレヨリ又東國ヘ下リケルト云々。

文治四（七一歳）

願はくは花の下にて春死なむその二月の望月の頃（山家集上春）は長秋詠藻西行示寂の事を記せる所に「彼の上人先年に櫻の歌多くよみけるに、願くは花の下にて云々」とあるによりて、此の頃の詠と推定す。四月千載集撰進、西行の歌十八首入る。秋、慈鎭西行の勸めにより御裳濯河百首を詠ず（拾玉集）

文治五（七二歳）

八月、定家宮河歌合に判して西行へ返す（同歌合卷末文）

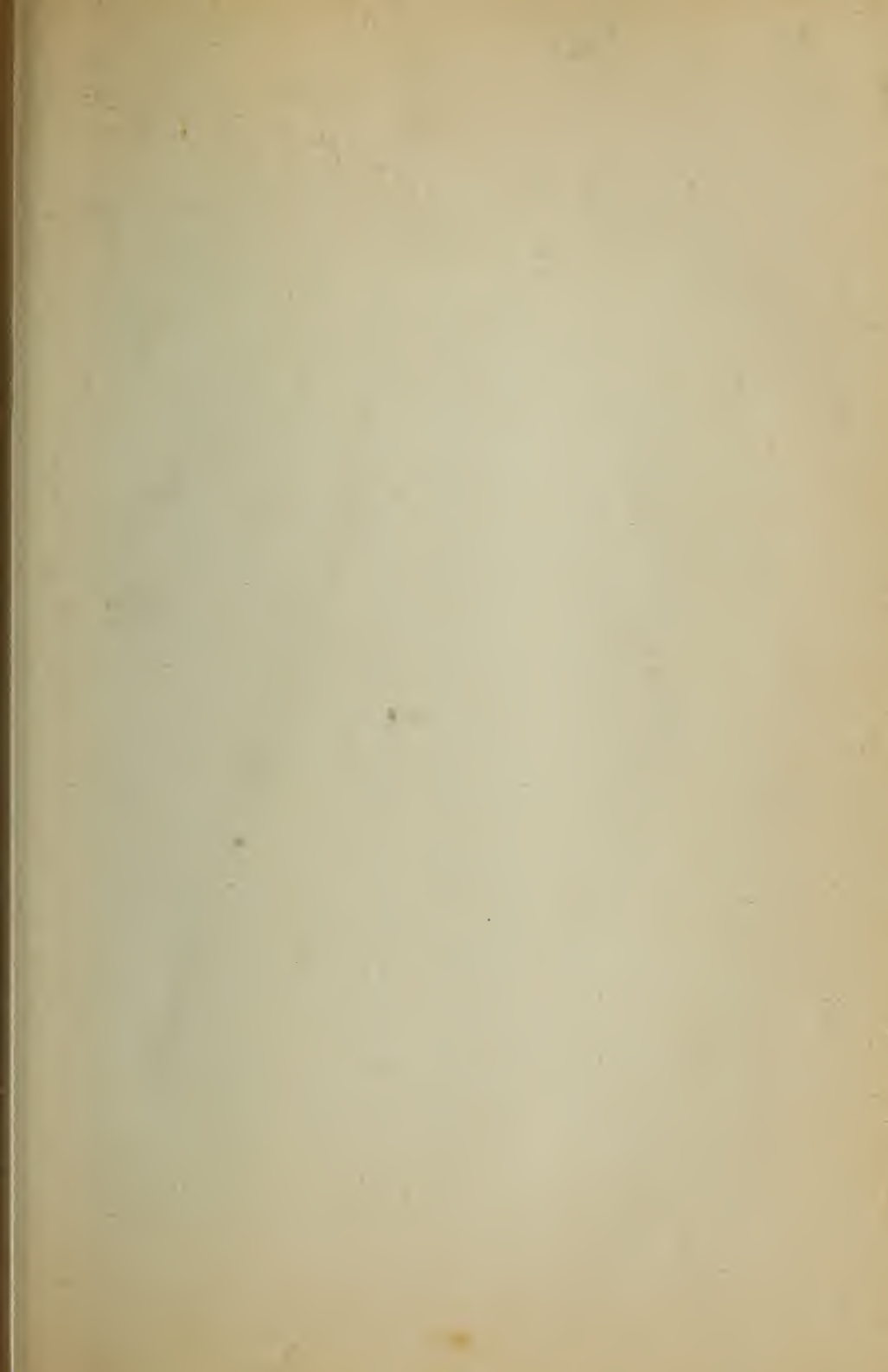
此ノ年或ハ前年、西行栂尾ノ高辨ヲ尋ネテ山深くさこそ心はかよふともすまであはれは知らむものかはト詠ジタル由、明惠上人傳記ニ出ヅ。事實ナラバマコトニ面白シ。

建久元（七三歳）

二月十六日河内弘川の山寺に示寂（長秋詠藻、拾玉集、拾遺愚草）、現に西行墳墓と傳ふるもの同寺の山中に存す。

○

此の「西行事實」は現在昭和十四年八月に於ける筆者の知識を傾けて作成せるものなり。後日、新事實を知るに隨ひて補正せん事を期す。又、これが作成に當りては、尾山篤二郎氏著「西行法師全集」大正十一年春陽堂版「西行法師評傳」昭和九年改造社版「西行法師全歌集」昭和十三年冨山房版、高根政次郎氏著「歌人西行」昭和八年横江稻蔭社版、伊藤嘉夫氏著「纂訂西行法師全歌集」昭和十年大岡山書店版、富倉二郎氏稿「大原の三寂」歌誌多磨昭和十三年四月號以降四回に特に負ふ所多かりしを感謝す。舊き事は言はず、學問盛んになりし近來に於いても、年々現はるる西行傳・西行論の類が多くは相變らず撰集抄・一生涯草

紙の滓を嘗めて、虛妄・時代錯誤の記事を繰返せるは、いかがのものにや。又たとひ西行小說を書く場合といへども、有識の讀者層を眼中に置く場合、一應歷史を研究して、在來の說話類を批判し取捨すべきものと考ふ。噴飯に値する西行小說は、娯樂讀物としても無益なるべし。

西行傳關係歌抄

西行の實傳を究めんとせば、遺詠及びその詞書が、最も重要にして且つ最も信賴し得べき資料なること、論を俟たず。然るに山家集・異本山家集の類の編纂方法たるや、亂雜を極め、同一事、同一箇所に於ける歌群を恣に分裂して收錄せる如き、比々として此の例なり。從來のままの體裁にては、到底傳記資料たるに適せず。依而、家集を解體し、目的に適ふ如く年次的に排列し直す事とせり。これ、もとより容易の業にあらず。將來、新知識を得るに從つて改訂補足すべき必要あること勿論なり。

家集には題詠形式を取れる歌最も多し。題詠形式のものといへども、西行の面目よりして、事實に卽き、實感に出でたる歌多かるべきは、想像するに難か

らず。然れども、それらの歌を題詠と否とに分別する事は殆ど不可能事に屬す。ここには、題詠のものは大方採らざる事としぬ。作年を記すに當りて、確定的のものは論なきも、略想像し得るものには「推定」とことわり置けり。伊勢滝留は康治及び治承の兩回なるが如く、その歌群には前後いづれの場合の作なるか決定し難きもの多し。不得已、假りに區分し置きたるもの不尠次第なり。東海奥羽行脚の歌に就いても亦同じ。

略　符

(イ)※異本山家集　　(イ追)　藤岡氏異本山家集の追而加書西行上人和歌

(キ)　聞書集　　(殘)　聞書殘集

(御)　御裳濯河歌合　　(宮)　宮河歌合

無印ハ山家集所載の歌なり。　　※　周嗣本の事なり。

保延二

京極太政大臣中納言と申しけるをり、菊を夥しきほどにしたてゝ鳥羽院にまゐらせ給ひたりける。鳥羽の南殿のひがし面の坪に、所なき程にうゑさせ給ひけり。公重少將人々をすゝめて菊もてなさせけるに、くははるべきよしあれば

君がすむ宿の坪には菊ぞ飾るひじりの宮といふべかるらん

保延年間

讃岐の、位におはしましけるをり、御幸のすゞのそうを聞きてよみける

ふりにける君が御幸の鈴のそうはいかなる世にもたえず聞えん

保延年間

賀茂の臨時の祭、かへり立の御神樂、土御門內裏にて侍りけるに竹のつぼに雪のふりたりけるを見て

裏返すをみの衣とみゆるかな竹のうら葉にふれる白ゆき

保延五安樂壽院本御塔竣成此ノ年五美福門院體仁親王ヲ生ム

出家前

いまだ世遁れざりけるそのかみ、西住具して法輪に參りたりけるに、空仁法師經おぼゆとて庵室に籠りたりけるに、物語り申して歸りけるに、船の渡りのところへ空仁まで來て名殘りを惜みけるに、筏の下りけるを

見て　　　　　　　　　　　　　　　　　　空　仁

早くいかだは此處に來にけり（殘）

薄らかなる柿の衣きて斯く申して立ちたりける、いと優に覺えけり

大堰川かみにゐせきやなかりつる

かくてさし離れて渡りけるに、故ある聲の語れるやうなるにて、大智德勇健化度無量衆よみ出したりける、いと尊く哀れなり

おほゐ川舟にのりえて渡るかな（殘）

西住つけけり

流に棹をさすこゝちして

心に思ふことありてかくつゞけたるなるべし。名殘り離れ難くて、さしかへして松の下におり居て思ひ述べけるに

おほゐ川君が名殘りの慕はれて井堰の浪の袖にかゝれる（殘）

かく申しつゝさし離れて歸りけるに、いつまで籠りたるべきぞと申しければ、思ひ定めたる事も侍らず他へまかる事もやと申しける、哀れにおぼえて

いつか又廻り逢ふべき法の輪の嵐の山を君し出でなば（殘）

返り言申さむと思ひけめども、井堰の關にかゝりて下りければ、本意なく覺え侍りけん

京より手箱にとき料を入れて、中に文をこめて、庵室にさし置かせたりける返り言を、連歌にしてつかはしたりける

むすび籠めたる文とこそみれ（殘）　　空　仁

この返り言、法輪へまゐりける人につけてさし置かせける

さとくよむことをば人にきかれじと

申しつゞくべくもなきことなれども、空仁が優なりしこと思ひ出でてとぞ。この頃は昔の心わすれたるらめども、歌は變らずとぞ承はる。あやまりて昔には思ひ

あがりてもや

いにしへ此、東山に、阿彌陀房と申ける上人の菴室にまかりて見けるに、あはれとおぼえてよみける

出家前ト推定

柴の菴と聞くは賤しき名なれども世にこのもしき住居なりけり

月

出家前ト推定

しらざりき雲井のよそにみし月の影を袂にやどすべしとは

百。首。

（參考トナルベキ歌ノミ拔萃ス、山家集卷尾參照ノコト）

出家前ト一應推定

人はみな吉野の山へ入りぬめり都の花にわれはとまらん

山櫻さきぬと聞きて見にゆかん人を爭ふ心とどめて

ほとゝぎすなべてきくには似ざりけり深き山べの曉の聲

月の夜や友とをなりていづくにも人しらざらんすみか敎へよ

大原はせれうを雪の道にあけて四方には人も通はざりけり

うとくなる人は心の變るとも我とは人にこゝろおかれじ

月をうしと眺めながらも思ふかな其夜ばかりの影とやは見し

いざさらば盛り思ふも程もあらじ藐姑射が嶺の春にむつれて

山ふかく心は豫て送りてき身こそ浮世を出でやらねども

月にいかで昔のことを語らせて影にそひつゝ立ちもはなれん

浮世とし思はでも身の過ぎにける月の影にもなづさはりつゝ

雲につきてうかれのみゆく心をば山にかけてを止めんとぞ思ふ

捨てゝ後はまぎれし方は覺えぬを心のみをばよにあらせける

ふりにける心こそなほ哀なれ及ばぬ身にも世をおもはする

さゝがにの絲に貫ぬく露の玉をかけてかざれる世に社有りけれ

汀ちかく引きよせらるゝ大網にいくせのものゝ命こもれる

うらうらと死なんずるなと思ひとけば心のやがてさぞと答ふる

我が園の岡べにたてる一つ松を友とみつゝも老いにけるかな

さま〳〵の哀れありつる山里を人につたへて秋のくれける

山里の心の夢にまどひをれば吹きしらまかす風の音かな

波高き芦屋の沖をかへる舟のことなくて世をすぎんとぞ思ふ

保延六　世にあらじとおもひける比、東山にて人々霞によせて思ひをのべけるに

空にたる心は春の霞にて世にあらじとも思ひたつかな

おなじ心をよみける

保延六　鳥羽院に、出家のいとま申すとてよめる

世を厭ふ名をだにもさはとどめ置きて數ならぬ身の思出にせん

保延六　世をのがれけるをりゆかりなりける人の許へ云ひおくりける

惜むとてをしまれぬべき此世かは身をすてゝこそ身をもたすけめ（イ追）

出家前後ト推定　題しらず

世の中を反き果てぬといひおかん思ひしるべき人はなくとも

呉竹の節しげからぬ世なりせば此君はとてさし出でなまし

あしよしを思ひ分くこそ苦しけれ只あらるればあられける身を

出家直後

遁世ののち、山家にてよみ侍ける

保延六ト推定

山里は庭の梢のおとまでも世をすさみたるけしきなるかな（イ）

世をのがれて鞍馬のおくに侍りけるに、筧の氷りて、
水まで來ざりけるに、春になるまではかく侍るなりと
申けるを聞てよめる

永治元ト推定

わりなしや氷るかけひの水故に思ひ捨てゝし春の待たるゝ

北山寺に住み侍りけるころ、例ならぬことの侍りける
に、ほとゝぎすのなきけるをきゝて

永治元ト推定

● ほとゝぎす死手の山路へかへりゆきて吾が越えゆかむともにならなん（キ）

長樂寺にて、夜紅葉をおもふと云事を、人々よみける
に

夜もすがら惜しげなく吹く嵐かなわざと時雨のそむる紅葉を

永治元ト推定

神無月木の葉の落つるたびごとに心うかるゝみ山べの里

野の渡りの枯たる草といふことを、雙林寺にてよみけるに

さま〴〵に花咲きたりと見しのべのおなじ色にも霜枯れにけり

永治元十二近衛天皇即位

康治元

東山にて、人々年のくれにおもひをのべけるに　世をのがれて東山に侍しころ、年の暮に人々まうで來て述懷し侍しに（イ）

年くれしそのいとなみは忘られてあらぬ様なる急ぎをぞする

康治元二待賢門院落飾

法華經廿八品

（最初ノ一首ノミ掲ゲ、他ハ略ス、聞書集參照ノコト）

序品

つぼむよりなべてにも似ぬ花なれば梢にかねてかをる春風（キ）

康治元ト推定

歸雁　歸雁を長樂寺にて（イ）

玉づさの端がきかとも見ゆるかなとび後れつつかへる雁がね

雙林寺にて、松河に近しといふことを、人々のよみけるに

白河・東山ノ歌ドモ

衣河みぎはによりて立つ浪は岸の松が根あらふなりけり（キ）

白河の花をみてよめる（月詣）

花にそむ心のいかで殘りけん捨て果ててきとおもふ我身に

世をのがれて東山に侍る比、白川の花盛に人さそひければまかり歸りけるに、昔おもひ出て

散るを見て歸る心やさくら花昔にかはるしるしなるらん

落花のうたあまたよみけるに

勅とかやくだす御門のいませかしさらば恐れて花や散らぬ

波もなく風を治めし白川の君のをりもや花はちりけん

人に具して修學院に籠りたりけるに、小野殿みに人々まかりけるに具してまかりて見けり。そのをりまでは釣殿かたばかり破れのこりて、池の橋わたされたりける事柄、繪に畫きたるやうに見ゆ。祈誓が石たて瀧おとしたる所ぞかしと思ひて、瀧おとしたりけるところ目立てゝ見れば、皆うづもれたるやうになりて見わか

れず。木高くなりたる松の香のみぞ身にしみける

瀧おちし水の流れもあと絶えて昔かたるは松の風のみ（發）

この里は人すだきけん昔もやさびたる事は變らざりけん（發）

康治元ト推定

嵯峨に住ける比となりの坊に申べきことありてまかりけるに、道もなく葎のしげりければ

立よりて隣とふべき垣にそひてひまなくはへる八重葎かな

小倉の麓に住侍りけるに、鹿の鳴けるをききて

をじかなく小倉の山の裾近みただひとりすむ我が心かな

嵯峨ノ歌ドモ

池上月といふことを遍昭寺にて人々よみけるに

宿し持つ月の光の大澤はいかにいづくも廣澤の池

廣澤にて人々月を翫こと侍しに（イ）

池にすむ月にかゝれる浮雲は拂ひのこせる水さびなりけり

大覺寺の瀧殿の石ども、閑院にうつされて跡もなくなりたりと聞きて、見にまかりたりけるに、赤染がいま

にかゝりとよみけん折おもひ出られて、哀とおぼえければよみける

今だにもかゝりといひし瀧津瀬の其折までは昔なりけり

嵯峨野の見し世にも變りて、あらぬやうになりて、人いなんとしたりけるを見て

此里や嵯峨の御狩の跡ならん野山も果はあせかはりけり

大覺寺の、金岡がたてたる石を見て

庭の岩に目たつる人もなからましかどあるさまに立てしおかねば

瀧のわたりの木立、あらぬことになりて、松ばかりなみたちたりけるを見て

流見し岸の木立もあせはてゝ松のみこそは昔なるらめ

あきの末に、法輪にこもりてよめる

大井川井堰に淀む水の色に秋深くなるほどぞしらるゝ

小倉山ふもとに秋の色はあれや梢の錦風に斷たれて

我物と秋の梢をおもふかな小倉の里に家ゐせしより

山里は秋の末にぞおもひしるかなしかりけり木枯の風

暮れ果つる秋の形見にしばしみむ紅葉ちらすな凩の風

秋暮るゝ月次わかぬ山賤の心うらやむ今日の夕ぐれ

嵯峨にまかりたりけるに、雪ふかゝりけるをみおきて出しことなど、申遣すとて

覺束な春の日數の經るまゝに嵯峨野の雪は消えやしぬらん

かへし　　　静忍法師

立ちかへり君や訪ひくと待つ程にまだ消えやらず野べの淡雪

（康治二ト推定）

嵯峨に住けるに、道をへだてゝ坊の侍りけるより、梅の風にちりけるを

（康治二藤原爲隆出家（寂超））

ぬしいかに風渡るとていとふらんよそに嬉しき梅の匂ひを

庵の前なりける梅を見てよめる

梅が香を山ふところに吹きためて入り來ん人にしめよ春風

康治二ト推定

遠く修行することありけるに菩提院の前齋院にまゐり
たりけるに人々別のうたつかふまつりけるに

さりともと尙逢ふことを賴むかな死出の山路をこえぬ別れは

同じ折つぼの櫻のちりけるを見てかくなんおぼえ侍り
と申しける

此春は君に別れのをしきかな花の行方はおもひわすれて

かへしせよと承りて、扇にかきてさしいでける

女房　六角局

君がいなん形見にすべき櫻さへ名殘あらせず風誘ふなり

前齋院關係ノ歌ドモ

題しらず　（山水春をつぐと云ふことを菩提院の前齋院にて人々よみ侍りしに（山家心中集））

春知れと谷のしたみづもりぞ來る岩間の氷ひま絕えにけり

春は花を友といふことを、せか院のさい院にて人々詠
みけるに

自から花なき年の春もあらば何につけてか日をくらさまし

夢中落花といふことを前齋院にて人々よみけるに

●春風の花を散らすと見る夢はさめても胸の騒ぐなりけり

月前にとほく望むといふことを　（菩提院の前の齋院にて月の歌よみ侍しに（イ））

くまもなき月の光にさそはれていく雲ゐまで行く心ぞも

としたか、よりまさ、せか院にて、老下女をおもひかくる戀と申ことをよみけるに、まゐりあひて

いちこもるうばめ媼の重ねもつこのてがしはにおもてならべん（キ）

せか院の花さかりなりける頃、としたゞがいひ送りける　　としたゞ

おのづから來る人あらば諸共にながめまほしき山櫻かな

返し

眺むてふ數に入るべき身なりせば君が宿にて春はへなまし

世をのがれて伊勢のかたへまかりけるに鈴鹿山にて

鈴鹿山うき世（の中を（イ））をよそにふり捨てゝいかになりゆく我身なるらん

康治二ト推定

康治二　ト
推　　定

海邊霞と申す心を伊勢に二見といふ所にて

波こすと二見の松の見えつるは梢にかゝる霞なりけり

伊勢のたうしと申す島には小石の白のかぎり侍る濱にて、くろは一つもまじらず。むかひてすがしまと申すは、くろかぎり侍るなり

すがしまやたうしの小石分けかへて黒白まぜよ浦の濱風

さき島の小石の白を高波の答志の島に打よせてける

辛洲崎の濱の小石とおもふかな白もまじらぬ菅島の黒

あはせばや鷺を烏と碁をうたばたうしすが島黒白の濱

伊勢の二見の海に、さるやうなる女の童共の集りて、わざとのこととおぼしく、蛤をとりあつめけるを、いふかひなきあま人こそあらめ、うたてき事なりと申しければ、貝合せに京より人の申させ給ひたれば、選りつつとるなりと申しけるに

今ぞしる二見の浦の蛤を貝あはせとておほふなりけり

いしこへ渡りたりけるに、いがひと申す蛤に、あこやのむねと侍るなり。それをとりたる殻を、たかくつみおきたりけるを見て

阿古屋とるいがひの殻を積みおきて寳の跡をみするなりけり

沖の方より風のあしきとて、松魚と申すいを釣りける舟のかへりけるを見て

伊良湖崎に松魚つり舟並びうきてはかちの浪にうかびてぞよる

二つありける鷹の、伊良湖渡りすると申しけるが、一つの鷹は止りて木の末にかゝりて侍りと申しけるを聞きて

すだか渡る伊良兒が崎を疑ひてなほきにかへる山歸りかな

敏鷹（はしだか）の鈴（すゞ）かさてもふるさせてすゑたる人の有難の世や

康治二

みちのくにへ修行してまかりけるに、白川の關に泊りて所がらにや常よりも月おもしろく哀れにて、能因が秋風ぞ吹くと申しけんをりいつなりけんとおもひ出られて、名殘おほく覺えければ、關屋の柱に書付ける

修業して陸奥にまかりけるに白河の關にて月のあかく侍りければ、關屋の柱に書きつけ侍りける（後葉）

白川の關屋を月のもる影は人の心を止むるなりけり

天養元以前　述懷の心を

世をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつるなりけれ(イ)

出家後ノ述懷　題しらず

捨てたれど隠れて住まぬ人になれば猶世にあるに似たるなりけり

世中を捨てゝ捨てえぬ心地して都離れぬ我身なりけり

捨てし折の心を更に改めて見る世の人にわかれはてなん

思へ心人のあらばや世にも恥ぢんさりとてやはといさむ計りぞ

數ならぬ身をも心のありがほにうかれては又歸りきにけり

花

春をへて花のさかりにあひきつゝ思ひでおほき我身なりけり

天養元　新院、歌あつめさせおはしますときゝて、常磐に爲忠

天養元六詞花集撰ノ院宣顯輔ニ下ル

が歌の侍りけるを、かきあつめてまゐらせける、大原
より見せにつかはすとて　寂超 長門入道

木のもとにちる言の葉をかく程に軈ても袖のそぼちぬるかな

かへし

年ふれど朽ちぬ常磐の言の葉をさぞ忍ぶらん大原の里

寂超、爲忠が歌に我歌かきぐし又弟の寂然がうたなど
とり具して新院へまゐらせけるを、人とりつたへまゐ
らせけると聞きて、兄に侍りける想空が許より　想空

家の風傳ふばかりはなけれどもなどか散らさぬ無げの言の葉

かへし

家の風むねと吹くべき木のもとは今散りなむと思ふ言の葉

さだのぶ入道、觀音寺に堂つくりに、結縁すべきよし
申しつかはすとて　觀音寺入道生光

寺造るこの我が谷に土埋めよ君ばかりこそ山もくづさめ

康治二以後

かへし

山くづすそのちからねは難くとも心だくみをそへこそはせめ

久安二以前

覺雅僧都の六條房にて、心ざしふかきことによせて、
花の歌よみ侍りけるに

久安二以前

花を惜む心の色の匂ひをば子を思ふおやの袖にかさねん（イ）

山家枯草といふことを、覺雅僧都の坊にて、人々よみ
けるに

搔き籠めしすそののすゝき霜がれてさびしさまさる柴の庵かな（イ（かきこもり））

覺雅僧都の六條の房にて、忠季宮内大輔登蓮法師なむ
ど歌よみけるにまかりあひて、里をへだてゝ雪を見る
と云ふことをよみける

しのはらやみかみのたけを見渡せば一夜の程に雪は降りけり（イ

久安二以前

奈良の法雲院こうよ法眼の許にて、立春をよみける

三笠山春はこゑにて知られけり氷をたゝく鶯のたき（イ追）

おなじ坊にて、雨中落花といふことを

春雨に花のみぞれの散りけるを消えで積れる雪と見たれば（殘）

久安初年ノ頃（待賢門院崩後）

ある人さまかへて、仁和寺のおくなる所に住むときゝて、まかりて尋ねければ、あからさまに京にと聞きてかへりにけり。其後人つかはして、かくなんまゐりたりしと申たるかへりごとに　ある人

久安元八　待賢門院崩御

立ちよりて柴の烟のあはれさをいかがおもひし冬の山里

返し

山里に心はふかく住みながら柴のけぶりのたちかへりにし

此うたもそへられたりける　ある人

をしからぬ身を捨てやらでふるほどに長き闇にや又迷ひなん

返し

世をすてぬ心のうちに闇こめて迷はんことは君ひとりかは

したしき人々あまたありければ、おなじ心に誰もこら

んぜよとつかはしたりける、返事に又

ある人

なべて皆晴れせぬ闇のかなしさを君しるべせよ光みゆやと

又　返　し

思ふともいかにしてかはしるべせん教ふる道に入らば社あらめ

久安初年ノ頃

待賢門院の中納言の局よをそむきて小倉山のふもとに住侍りける比、まかりたりけるに、事柄まことに幽にあはれなりけり。風のけしきさへ、殊にかなしかりければ、かきつけゝる

山おろす嵐の風のはげしきをいつならひたる君がすみかぞ

同院兵衞局

あはれなる栖を、とひにまかりたりけるに、此歌を見てかきつけゝる

うきよをば嵐のかぜにさそはれて家をいでぬる住家とぞみる

久安二

待賢門院、かくれさせおはしましける御跡に、人々又のとしの御はてまでさぶらはれけるに、南おもての花

ちりける比、堀川の女房のもとへ申送りける

尋ぬとも風のつてにもきかじかし花と散りにし君が行方を

返　し　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　堀川の局

吹く風の行方知らする物ならば花とちるにもおくれざらまし

久安初年ノ頃ト推定

堀川局仁和寺に住侍りけるに、まゐるべきよし申たりけれどもまぎるゝことありて程へにけり。月の比まへを過ぎけるをきゝていひおくられける　　堀川の局

西へ行くしるべとたのむ月影の空頼めこそかひなかりけれ

返　し　（待賢門院堀河局のもとよりよび侍りけるに、まかるべき由申しながらまからで、月のあかかりける夜その門をとほり侍るに、西へゆくしるべとおもふ月影の空だのめこそかひなかりけれ、と申し侍りける返事（イ））

さし入らで雲路をよぎし月影はまたぬ心や空に見えけん

後の世の事無下におもはずもなしと見えける人のもとへいひつかはしける

世の中に心有明の人は皆かくて闇にはまよはぬものを

返し

ある人

世をそむく心ばかりは有明のつきせぬ闇は君にはるけん

あるところの女房、世をのがれて西山に住むと聞きて、尋ねければ、住あらしたるさまして人のかげもせざりけり。あたりの人にかくと申おきたりけるを、きゝていひ送りける

待賢門院の堀川

潮馴し苫屋もあれてうき波に寄る方もなきあまとしらずや

返し

苫のやに波立ちよらぬけしきにてあまり住みうき程は見えけり

待賢門院の女房堀川の局のもとより、いひおくられける

待賢門院堀川

此世にてかたらひおかん時鳥死手の山路のしるべともなれ

返し

時鳥なくなくこそは語らはめ死手の山路に君しかゝらば

世をのがれて嵯峨に住ける人の許にまかりて、後の世のこと怠らずつとむべきよし申して歸りけるに、竹の柱をたてたりけるを見て

久安初年ノ頃ト推定

世々經とも竹の柱の一筋にたてたる節はかはらざらなん

小倉を捨て、高野のふもとに、あま野と申す山にすまれけり。おなじ院の帥の局、都の外へすみか訪ひ申さではいかゞとて分けおはしたりける、ありがたくなん。返るさに粉川へまゐられけるに、御山より出合たりけるを、しるべせよとありければ、具し申して粉川へまゐりたりけり。かゝる序は、今はあるまじきことなり、吹上みんといふこと、具せられたりける人々申出て、吹上へおはしけり。道より大風雨ふきて、輿なくなりにけり。さりとてはとて吹上へ行き着きたりけれども、見所なき様にて、社に輿かき据て、おもふにも似ざりけり、能因が苗代水にせきくだせとよみていひつたへられたる物を、と思ひて社にかきつけける

天くだる名を吹上の神ならば雲晴れのきて光あらはせ

苗代にせきくだされし天の川とむるも神のこころなるべし

かく書きたりければ、やがて西の風吹かはりて、忽ちに雲はれて、うらくと日なりにけり。末の代なれど、志いたりぬることにはしるしあらたなることを、人々申しつゝ、信起して吹上若浦おもふやうに見てかへられにけり

高野ニテノ歌ドモ（作年不明）

高野にこもりたりける比草の庵に花のちりつみければ

散る花の庵の上をふくならば風入るまじくめぐりかこはん

高野に中院と申所にあやめふきたる坊の侍りけるに櫻、の散りけるが珍らしくおぼえてよみける

櫻散るやどにかさなるあやめをば花あやめとやいふべかるらん

坊なる稚子これをきゝて（宮内省本）

ちる花も今日のあやめの根にかけて藥玉ともやいふべかるらん

高野にこもりたる人を、京より何ごとか又いつかいづべきと申したるよしきゝて、その人にかはりて

山水のいつ出づべしと思はねば心細くてすむとしらずや

あきの比、高野へまゐるべきよしたのめて、まゐらざりける人のもとへ、雪ふりてのち申つかはしける

雪ふかくうづみてけりな君くやと紅葉の錦敷きし山路を

高野より都なる人の許へ、いひつかはしける

住むことは所がらぞといひながらたか野は物の哀れなるべき

深夜水聲といふことを、高野にて人々よみけるに

まぎれつる窓の嵐のこゑとめて更くると告ぐる水の音かな

みやたてと申しけるはしたものゝ、としたかくなりて様かへなどして、ゆかりにつきて吉野に住侍りけり。おもひかけぬやうなれども供養をのべん料にとて、くだ物を高野のみ山へつかはしけるに、花と申すくだ物侍りけるを見て、申しつかはしける

折櫃に花のくだもの積みてけり吉野の人の宮立にして

かへし　　みやたて

心ざし深くはこべるみやたてを悟りひらけん花にたぐへて

としのくれにあがたより都なる人のもとへ申つかはしける　年の暮に高野より京へ申つかはしける（イ）

おしなべて同じ月日の過ぎ行けば都もかくや年はくれぬる

山里に家居をせずばみましやはくれなゐ深き秋の梢を

歳暮に、人のもとへつかはしける

自から云はぬをしたふ人やあると休らふほどに年の暮れぬる

高野の奥の院の橋の上にて月あかゝりければもろ共にながめあかして、その比、西住上人都へ出でにけり。其夜の月忘れがたくて、又おなじ橋の月の比、西住上人の許へいひつかはしける

こと〻なく君戀ひ渡る橋のうへにあらそふものは月の影のみ

かへし　　西住上人

思ひやる心は見えて橋のうへに爭ひけりな月の影のみ

高野より出たりけるを、覺堅阿闍梨しらぬさまなりければ、菊をつかはすとて

くみてなど心通はばとはざらん出でたるものを菊の下水

かへし　　　　　　　　　　覺　堅

谷ふかく住むかと思ひてとはぬまにうらみを結ぶ菊の下水

御嶽よりさうの岩屋へまゐりたりけるに、もらぬ岩やもとありけんをり、おもひ出られて

露もらぬ岩屋も袖はぬれけりと聞かずばいかに怪しからまし

大峯修行ノ歌ドモ（作年不明）

小笹の泊と申す所にて、露のしげかりければ

分け來つるを笹の露にそぼちつつほしぞわづらふ墨染の袖

大峯のしんせんと申す所にて月を見てよみける

深き山にすみける月を見ざりせば思出もなき我身ならまし

嶺の上もおなじ月こそ照らすらめ所柄なる哀れなるべし

月すめば谷こそ雲はしづむめる嶺吹き拂ふ風にしかれて

をばすての嶺と申す所の見渡されて、おもひなしにや
月ことに見えければ

姨捨は信濃ならねどいづくにも月すむ嶺の名にこそ有りけれ

小池と申すすくにて

いかにして梢のひまを求めえてこいけに今宵月のすむらん

篠のすくにて

菴さす草の枕にともなひて笹の露にも宿る月かな

へいちと申すすくにて月を見けるに、梢の露のたもと
にかゝりければ

梢なる月も哀をおもふべし光に具してつゆのこぼるゝ

吾妻屋と申すところにて、時雨ののち月を見て

神無月時雨晴るればあづまやの嶺にぞ月は宗とすみける

神無月谷にぞ雲はしぐるめる月すむ峰は秋にかはらで

古屋とまをすすくにて

神無月時雨ふるやにすむ月は曇らぬ影もたのまれぬかな

平等院の名かゝれたる卒塔婆に、紅葉のちりかゝりけるを見て、花より外のとありけん人ぞかしとあはれに覺えてよみける

哀れとも花みし嶺に名をとめて紅葉ぞ今日は共にちりける

千種の岳にて

分けてゆくいろのみならず梢さへ千種の嶽は心すみけり

蟻のとわたりと申すところにて

笹深み霧こすくきを朝立ちて靡きわづらふ蟻の戸渡

行者がへり、稚兒のとまりにつゞきたる宿なり。春の山伏は屛風立と申すところを、平に過んことをかたく思ひて、行者ちごのとまりにて、おもわづらふなるべし

屛風にや心を立てゝ思ひけん行者はかへり稚兒は泊りぬ

轉法輪の岳と申す所にて釋迦の說法の座の石と申す所

ををがみて

こゝこそは法說かれたる所よと聞く悟りをも得つる今かな

久安五以後

秋とほく修行し侍りけるほどに、程へける所より、侍從大納言成通のもとへつかはしける

秋の暮れかた、修行にいで侍りける道より權大納言成通のもとにつかはしける（續拾遺）

嵐ふく峰の木葉に伴ひていづちうかるゝ心なるらん

かへし　　大納言成通

何となく落る木の葉も吹く風に散行く方はしられやはせぬ

久安六

久安六崇德上皇百首歌ヲ召シ給フ

新院、百首のうためしけるに、奉るとて、右大將公よしのもとよりみせにつかはしたりける。かへし申すとて

家の風吹き傳へけるかひありて散る言の葉のめづらしきかな

かへし　　右大將公能

家の風吹き傳ふとも和歌の浦にかひある言の葉にてこそしれ

崇德院讃岐遷幸以前

心ざすことありて扇を佛にまゐらせけるに、新院より賜ひけるに、女房承りてつゝみ紙に書付けられける

女房

ありがたき法にあふぎの風ならば心の塵を拂へとぞおもふ

御かへし奉りける

塵ばかり疑ふ心なからなん法をあふぎてたのむとならば

ゆかりありける人の新院のかんだうなりけるを、ゆるし給べきよし、申しいれたりける、御返事に

新院

最川綱手ひくとも稲舟のしばしが程はいかりおろさん

御返り事たてまつりけり

久安年間ト推定

強くひく綱手とみせよ最上川その稲舟のいかりをさめて

かく申したりければゆるし給ひてけり

中納言家成、なぎさの院したてゝ程なくこぼたれぬと聞きて、天王寺より下向しけるついでに、西住、淨蓮

など申す上人どもして見けるに、いとあはれにて、各々述懐しけるに

仁平三以前

折につけて人の心もかはりつゝ世にあるかひもなぎさなりけり（イ）

仁平元詞花集奏覽

忠盛の八條の泉にて、高野の人々佛かき奉ることの侍りけるにまかりて、月明かりけるに池に蛙の鳴きけるをきゝて

小夜更けて月にかはづの聲きけばみぎはも涼し池の浮草（殘）

仁平三正平忠盛卒

心ざすことありて、安藝の一の宮へ詣けるに、高富の浦と申すところに風に吹とめられてほどへけり。とまふきたる庵より月のもるを見て

仁平二又三ト推定

波のおとを心にかけてあかすかな苫もる月のかげを友にて

詣つきて、月いとあかくてあはれにおぼえければよみける

もろ共に旅なる空に月も出でてすめばや影のあはれなるらん

世をそむきて後修行し侍りけるに海路にて月をみてよ

める（イ）

和田の原遙に波をへだて來て都に出でし月を見るかな

わだの原波にも月はかくれけり都の山をなに厭ひけん

久壽元

中院ノ右大臣、出家おもひ立つよしかたり給ひけるに、月のいとあかく、終夜あはれにて明にければ、かへりけり。其後その夜の名殘多かりしよし、いひ送り給ふとて

中院の右大臣

夜もすがら月を眺めて契りおきしその睦言に闇は晴れにし

返　し

すむと見し心の月し顯れば此よも闇ははれざらめやは

久壽二

近衞院の御墓に人にぐして參りたりけるに、露のふかかりければ

磨かれし玉のすみかを露ふかき野べにうつして見るぞかなしき

保元元

一院、かくれさせおはしまして、やがて御所へ渡しまゐらせける夜、高野より出合ひて參りたりける、いと

久壽二七近衞天皇崩御、久壽二十後白河天皇即位、此ノ頃藤原賴業出家（寂然）

保元元七鳥羽法皇崩御シ保元亂起ル崇德上皇讚岐遷幸

悲しかりけり。此後おはしますべき所御らんじ初めけるそのかみの御ともに、右大臣さねよし、大納言と申しけるさぶらはれけり。忍ばせおはしますことにて、又人さぶらはざりけり。其折の御供にさぶらひける事の思ひ出でられて、をりしも此夜に參りあひたる、昔今のことおもひつゞけられてよみける

今宵こそ思ひしらるれ淺からぬ君に契のある身なりけり

をさめまゐらせける所へ渡しまゐらせけるに

道かはるみゆき悲しきこよひかな限りの旅とみるにつけても

納めまゐらせて後、御供にさぶらはれし人々、たとへんかたなく悲しながら、限あることなりければ、歸られにけり。はじめたることありて、明日までさぶらひてよめる

とはばやと思ひよりてぞ歎かまし昔ながらのわが身なりせば

世の中に大事いで來て、新院あらぬ樣にならせおはしまして、御ぐしおろして、仁和寺の北院におはしまし

けるに、まゐりて、けんげん阿闍梨出あひたり。月あかくて、よみける

保元元
以後

かゝる世に影も變らずすむ月を見る我身さへ怨めしきかな

德大寺の左大臣の堂に立入て見侍りけるに、あらぬことになりて哀れなり。三條太政大臣歌よみてもてなし給ひしことたゞいまとおぼえて、しのばるゝ心地し侍り。堂のあらためられたりける、さることのありとみえて、哀れなりければ

なき人の形見にたてし寺に入りて跡ありけりと見て歸りぬる（イ）

三昧堂の方へわけ參りけるに、秋の草ふかゝりけり。鈴蟲の音かすかにきこえければ、あはれにて

おもひおきし淺茅が露をわけ入ればただわづかなる鈴蟲の聲（イ）

古鄉の心を

野べに成りてしげきあさぢをわけ入れば君が住みける礎の跡（イ）

保元二

右大將きんよし、父のふくの中に母なくなりぬときゝ

て、高野よりとぶらひ申しける

（大炊御門右大臣大將と申侍しをり、德大寺の左大臣うせ給ひたりし服のうちに母はかなくなり給ひぬと聞て高野よりとぶらひ奉とて（イ））

かさね着るふぢの衣をたよりにて心のいろを染めよとぞおもふ

保元二九　德大寺實能薨

返し　　　右大將公能

保元三十　二二條天皇即位

平治元以前

藤衣かさぬる色は深けれど淺き心のしまぬばかりぞ

八條院の宮と申しけるをり、白河殿にて蟲合せられけるに、かはりて、蟲入てとり出しける物に水に月うつりたる由をつくりて、其心をよみける

行末の名にやながれん常よりも月すみ渡る白川の水

平治元ト推定

思はずなることおもひたつよし、聞えける人の許へ、高野よりいひつかはしける

栞せでなほ山深く分け入らん憂きこと聞かぬ所ありやと

平治元統子内親王ニ院號（上西門院）

平治元

侍從大納言成通のもとへ後の世のことおどろかし申したりける返ごとに

侍從大納言成通

驚かす君によりてぞながきよの久しき夢はさむべかりける

平治元十　鞠聖成通出家　平治元十二平治亂起ル

返　し

驚かぬ心なりせば世の中を夢ぞと語るかひなからまし

平治元以後

上西門院女房、法勝寺の花見られけるに、雨の降りて暮れにければ、歸られにけり。又の日、兵衛の局の許へ、花の御幸おもひ出させ給らんと覺えて、かくなん申さまほしかりしとてつかはしける

見る人に花も昔をおもひ出でてこひしかるべし雨にしをるゝ

返　し　　上西門院の兵衛

いにしへを忍ぶる雨と誰か見ん花も其世の友しなければ

わかき人々ばかりなん、老にける身は風の煩しさにいとはるゝことにてとありけるなん、やさしく聞えける

雨のふりけるに、花の下に車を立てながめける人に

ぬるともと蔭をたのみて思ひけん人の跡ふむけふにもあるかな

久壽二以後

入道寂然、大原に住侍りけるに、高野よりつかはしける

（贈答十首ヅヽアレド、各最初ノ一首ヲ拔キ、他ハ畧ス、
山家集下下參照ノコト）

山ふかみさこそあらめと聞えつつおと哀れなる谷川の水

かへし　寂然

あはれさはかくやと君も思ひしれ秋暮がたの大原の里

寂然入道大原にすみけるに、つかはしける　高野に侍りける時、寂然法師大原に住み侍けるに遣はしける　（新勅撰）

大原は比良の高ねのちかければ雪ふるほどをおもひこそやれ

かへし　寂然

おもへただ都にてだに袖さえしひらの高ねの雪のけしきは

寂然高野に詣でふかき山の紅葉といふことをよみける　寂然髙野に參て、ふかき山の紅葉といふことを、宮の法印の御庵室にて、歌詠むべきよし申し侍りしに、まゐりあひて（イ）

さまざまに錦ありけるみ山かな花見し嶺をしぐれそめつつ

寂然、もみぢのさかりに、高野に詣でて出でにける、

又のとしの花のをりに、申しつかはしける

紅葉みし高野の峰の花ざかり頼めし人の待たるゝやなぞ

かへし　寂然

共に見し嶺の紅葉のかひなれや花の折にも思ひいでける

寂然、高野に詣て、立歸りて大原よりつかはしける

寂然

へだてこしその年月もあるものを名殘多かる嶺の朝霧

かへし

慕はれし名殘をこそはながめつれ立返りにし嶺の朝霧

寂超入道(大原にて止觀の一)談議すと聞きてつかはしける

弘むらん法には會はぬ身なりとも名を聞く數に入らざらめやは

かへし　寂超入道

つたへきく流なりとも法の水くむ人からやふかくなるらん

久壽二以後永萬元以前

爲なりときはに堂供養しけるに、世をのがれて山寺に住侍りける親しき人々まうで來たりときゝて、いひつかはしける

古にかはらぬ君が姿こそけふは常盤のかたみなるらめ

返し　爲業

色かへで獨殘れる常盤木はいつをまつとか人のみるらん

爲忠が常磐に、爲業侍りけるに、西住、寂然まかりて、太秦にこもりたりけるに、かく申たりければまかりたりけり。有明と申す題をよみけるに

今宵こそ心のくまはしられぬれ入らで明けぬる月を眺めて（殘）

かくて靜空、寂昭なんど侍りければ、ものがたり申しつゝ連歌しけり。秋のことにて肌寒かりければ寂然まで來て、背中を合せゐて連歌にしけり

おもふにも後合せになりけり（殘）　寂　念

この連歌こと人つくべからずと申ければ

うらがへりたる人の心は

後世の物語りを各々申しけるに、人なみなみに其道に
は入りながら、思ふやうならぬ由申して　靜　空

人まねの熊野詣での吾身かな（殘）

と申しけるに

そりといはるゝ名ばかりにして

雨のふりければ、檜笠、簑を着てまで來たりけるを、
勾欄にかけたりけるを見て　西　住

檜笠きる身のありさまぞ哀れなる（殘）

むごに人つけざりければ、興なくおぼえて

雨雫とも泣きぬばかりに

さて明けにければ、おのおの山寺へ歸りけるに、後會
いつとしらずと申す題、寂然いだして詠みけるに

歸り行くも止まる人も思ふらん又あふことの定めなの世や（殘）

常磐の里にて初秋月といふことを人々よみけるに

秋たつとおもふに空もただならでわれて光を分けん三日月

故郷述懐といふことを、常磐のいへにて、爲業よみけるにまかりあひて

繁き野をいく一むらに分けなして更に昔をしのびかへさん

大原ニテノ歌ドモ(作年不明)

山里の春雨といふことを大原にて人々よみけるに

春雨の軒たれこむるつれづれに人に知られぬ人のすみかか

大原に尾張の尼上と申す智者の許にまかりて、兩三日物語り申して歸りけるに、寂然にはかに立ち出でて、名殘りを惜しかる由申しければ、やすらはれて

かへる身にぞ果の心のとまるかな(殘)

まことに今度の名殘りは、さ覺ゆと申して　寂然

おくるおもひにかふるなるべし

かく申して、良暹が、まだ炭がまもならはねばと申けむあと、かゝるついでに見にまからんと申て人々具してまかりて、おのおの思ひ述べて妻戸に書きけるに

大原やまだすみがまもならはずと云ひけむ人を今あらせばや

永曆元

美福門院の御骨、高野の菩提心院へわたされけるを見たてまつりて

けふや君おほふ五つの雲はれて心の月をみがきいづらん（イ）

應保二

侍從大納言入道はかなくなりて、宵曉につとめする僧各々かへりける日、申しおくりける

行き散らん今日の別を思ふにもさらに歎はそふ心地する

かへし　ある人

臥し沈む身には心のあらばこそさらに歎もそふ心地せめ

永曆元十一美福門院崩御

應保元八德大寺公能薨

應保二成通薨

此うたも、返しの外に具せられたりける

ある人

類なき昔の人のかたみには君をのみこそ頼みましけれ

かへし

古への形見になると聞くからにいとど露けき墨染の袖

同日、のりつなが許へつかはしける

なき跡も今日までは猶名殘あるを明日や別れをそへて忍ばん

返し　　のりつな

思へただ今日の別のかなしさに姿を變へてしのぶ心を

やがて其日、さまかへて後、此返事かく申したりけり。いと哀なり。おなじさまに世をのがれて、大原にすみ侍りけるいもうとの、はかなくなりにける哀れとぶらひけるに

いかばかり君思はまし道に入らで頼もしからぬ別なりせば

返　し　　のりつな

頼もしき道には入りてゆきしかど我身をつめば如何とぞ思ふ

長寛二以前

新院、讃岐におはしましけるに、便に付て、女房のもとより　　女　房

水茎のかきながすべき方ぞなき心のうちに汲みてしらなん

か　へ　し

程遠み通ふ心のゆくばかりなほ書き流せ水茎の跡

又女房つかはしける　　女　房

いとどしく憂きにつけても頼むかな契りし道のしるべたがふな

かゝりける涙にしづむ身のうさを君ならで又誰かうかべん

か　へ　し

頼むらんしるべもいさやひとつ世の別にだにも迷ふ心は

流れいづる涙に今日は沈むとも浮ばむ末をなほ思ふらん

讃岐へおはしまして後、歌といふことの世にいと聞えざりければ、寂然が許へいひつかはしける

言の葉のなさけ絶えにし折節に在り逢ふ身こそ悲しかりけれ

かへし　　寂然

敷島や絶えぬる道に泣く泣くも君とのみこそ跡を忍ばめ

讃岐にて御心ひきかへて、後の世のこと御つとめひまなくせさせおはしますと聞きて女房の許へ申しける。此文をかきて

若人不㆓嗔打㆒、以レ何修㆓忍辱㆒

世の中をそむくたよりやなからまし憂き折節に君があはずは

是も、ついでにぐしてまゐらせける

淺ましやいかなる故の報にてかゝる事しもある世なるらん

長らへて遂にすむべき都かは此世はよしやとてもかくても

幻の夢を現に見る人は目も合はせでや夜を明すらん

かくて後、人のまゐりけるに

其日よりおつる涙を形見にて思ひわするゝ時のまぞなき

かへし　女房

目の前にかはり果にし世のうきに涙を君も流しけるかな

松山の涙は海にふかくなりて蓮の池に入れよとぞおもふ

波の立つ心の水を靜めつゝ咲かん蓮をいまはまつかな

長寛二八　崇徳上皇崩御

長寛二

阿闍梨兼堅よをのがれて、高野に住侍りけり。あからさまに仁和寺に出でて、かへりもまゐらぬことにて、僧綱になりぬと聞きて、いひつかはしける

袈裟の色や若紫にそめてける苺の袂をおもひかへして

永萬元以前

内（二條院）に貝あはせせむとせさせ給ひけるに、人にかはりて

（九首アルモ、最初ノ一首ノミ拔ク、山家集下下參照ノコト）

風たゝで波を治むる浦々に小貝を群れて拾ふなりけり

永萬元

五十日のはてつかたに二條院の御墓に御佛供養しける

人に、ぐしてまゐりたりけるに、月明くてあはれなりけれぱ

今宵君死手の山路の月を見て雲の上をや思ひいづらん

永萬元七六條天皇即位、二條上皇崩御、此ノ頃藤原爲業出家（寂念又ハ想空）

御跡に、三河内侍さぶらひけるに、九月十三夜ひとにかはりて

隱れにし君がみかげの戀しさに月にむかひて音をや泣くらん

返し　　　　　　　　　　　内侍

我君の光かくれし夕より闇にぞまよふ月はすめども

仁安元

院の二位の局、みまかりける跡に、十の歌人々よみけるに

流れゆく水に玉なすうたかたの哀れ仇なる此世なりけり

きえぬめる本の雫を思ふにも誰かは末の露の身ならぬ

おくりおきて歸りし道の朝露を袖にうつすは涙なりけり

舟岡の裾野の塚の數そへてむかしの人に君をなしつる

あらぬ世の別れはげにぞうかりける淺茅が原を見るにつけても
後の世をとへと契りし言の葉や忘らるまじき形見なるらん
おくれゐて涙にしづむ故鄉を玉のかげにも哀れとやみる
跡をとふ道にや君は入りぬらん苦しき死手の山へかゝらで
名殘さへほどなく過ぎば悲しきに七日の數を重ねずもがな
跡しのぶ人にさへ又別るべき其日をかねてしる涙かな

跡のことゞも果てちり〴〵に成りけるに、しげのり、ながのりなど泪ながして、けふにさへ又と申しける程に、南面の櫻に鶯の鳴けるを聞きてよみける 異本無題

櫻花ちりぢりになる木のもとに名殘を惜しむ鶯のこゑ

かへし　　　　　　少將ながのり

散る花は又こん春も咲きぬべし別れはいつか廻りあふべき

同日、くれけるまゝに雨のかきくらしふりければ

哀れしる空も心のありければ泪に雨をそふるなりけり

かへし　　　　院少納言局

あはれ知る空にはあらじ侘人の泪ぞ今日は雨とふるらん

行ちりて、又の朝つかはしける

今朝はいかに思のいろの増るらん昨日にさへも又別れつゝ

かへし　　　　少将ながのり

君にさへ立別れつゝ今日よりぞ慰む方はげになかりける

五條の三位入道、そのかみ大宮の家に住まれけるをり、寂然、西住なんどまかりけるついでに、向花念浮世と申すことをよみけるに

仁安二以前

心をぞやがてはちすに咲かせつる今見る花の散るにたぐへて（き）

かくて物語申しつゝ連歌しけるに、あふぎに櫻をおきてさしやりたりけるをみて　　　　家主顯廣

梓弓はるのまどゐに花ぞ見る（き）

とりわき附くべき由ありければ

仁安二

箭さしゝことに名をひかれつゝ

そのかみ、心ざしつかふまつりけるならひに、世をのがれて後も、賀茂にまゐりけり。年たかくなりて、四國の方修行しけるに又かへりまゐらぬこともやとて、仁安二年十月十日の夜まゐりて幣まゐらせけり。内へもまゐらぬことなれば、たなをの社にとりつきてまゐらせ給へとて、心ざしけるに、木の間の月ほのぐと常よりも神さびあはれにおぼえて、よみける

畏まる四手に涙のかゝるかな又いつかはと思ふこゝろに

西のくにの方へ修行してまかり侍るとて、美豆野と申す所に具しならひたる同行の侍りけるに、親しきものの例ならぬこと侍るとて、具せざりければ

山城の美豆の美草につながれて駒ものうげに見ゆる旅かな

あかしに人を待ちて、日數へにけるに

何となく都のかたと聞く空は睦まじくてぞ眺められける

はりま書寫へまゐるとて、野中の清水をみけること、

仁安二二平清盛太政大臣

一むかしになりにける。年へて後修行すとて通りけるに、おなじさまにてかはらざりければ

昔みし野中の清水かはらねば我影をもやおもひいづらん

西國へ修行してまかりける折、小島と申す所に八幡のいははれ給たりけるにこもりたりけり。年へて又その社を見けるに、松どものふる木になりたりけるをみて

昔みし松は老木になりにけり我が年經たるほどもしられて

備前國に小島と申す島に渡りけるに、あみと申す物をとる所は各々我々占めて、長き竿に袋をつけてたて渡すなり。其竿の立て初めをば一の竿とぞ名付たる。中に年高き海人のたてそむるなり。たつるとて申すなる言葉聞き侍りしこそ、涙こぼれて申すばかりなく覺えて詠みける

たてそむる糠蝦(あみ)とる浦の初竿はつみの中にもすぐれたるかな

日比澁川と申す方へまかりて四國のかたへ渡らんとしけるに、風あしくて程經けり。澁川の浦田と申す所に、

幼き者共數多、物を拾ひけるを問ひければ、つみと申すもの拾ふなり、と申しけるを聞きて

おりたちて浦田に拾ふ海士の子はつみより罪を習ふなりけり

眞鍋と申す島に、京よりあき人共の下りて、やう〳〵のつみの物共あきなひて、又鹽飽の島に渡りて、あきなはんずる由、申しけるを聞きて

眞鍋より鹽飽へ通ふ商人はつみをかひにて渡るなりけり

串にさしたる物をあきなひけるを、何ぞと問ひければ、蛤を干して侍るなりと申しけるを聞きて

同じくは牡蠣をぞさして乾しもすべき蛤よりは名もたよりあり

牛窓の瀬戸に海人のいで入りて、さだえと申すものをとりて、舟にいれ〳〵しけるを見て

さだえすむせとの岩壺求め出でていそぎし海士の氣色なるかな

沖なる岩につきて、海士共のあはびとりける所にて

岩の根にかたおもむきも浪うきて鮑をかつぐ海士の村君

題しらず

小鯛ひくあみのうけ繩縒りめぐりうきしわざある鹽崎の浦

霞しく波の初花をりかけて櫻鯛つる沖の海人舟

あま人のいそしくかへるひじきものはこにし蛤がうなしたゝみ

磯菜摘ん今おひ初むる若布海苔みるめきふはさひじきこゝろぶと

讃岐の國へまかりて、みのつと申す津に着きて、月のあかくてひゞのても通はぬ程に、とほく見え渡りたりけるに、水鳥のひゞのてにつきて、飛渡りけるを

しき渡す月の氷を疑ひてひびのてまはるあぢのむらどり

四國のかたへぐしてまかりたりける同行の、都へかへりけるに

かへりゆく人の心をおもふにもはなれがたきは都なりけり

ひとりみおきて、歸りまゐりなんずるこそ哀れに、いつか都へはかへるべきなど申しければ

柴の庵のしばし都へかへらじとおもはんだにも哀れなるべし

年久しく相たのみたりける同行に離れて、遠く修行してかへらずもやとおもひけるに、何となく哀れにてよみける

定めなし幾とせ君に慣れ慣れて別れを今日は思ふなるらん

讃岐にまうでて、松山と申す所に院おはしましけん御跡たづねけれども、かたもなかりければ

松山の波に流れてこし舟のやがて空しくなりにけるかな

松山の波の氣色は變らじを形無く君はなりましにけり

しろ峯とまうす所に、御墓の侍りけるに、まゐりて

よしや君昔の玉の床とてもかからんのちは何にかはせん

同じ國に大師のおはしましける御あたりの山に、菴結びて住けるに月いとあかくて、海の方くもりなくみえ侍りければ

くもりなき山にて海の月みれば嶋ぞ氷のたえまなりける

住みけるまゝに庵いとあはれに覺えて

今よりはいとはじ命あればこそかゝる住居の哀をもしれ

菴の前に、松のたてりけるを見て　（善通寺の山に住侍りしに、庵の前なりし松を見て（イ））

ひさにへて我がのちの世をとへよ松跡したふべき人もなき身ぞ

土佐のかたへやまからましと、思ひ立こと侍しに（イ）

こゝを又我がすみうくてうかれいなば松は獨にならんとすらん

雪のふりけるに

松のもとは雪ふる折りのいろなれや皆白妙にみゆる山路に

雪つみて木も分かず咲く花なれば常磐の松も見えぬなりけり

花とみるこずゑの雪に月冴えて譬へん方もなき心地する

まがふ色は梅とのみ見てすぎゆくに雪の花には香ぞなかりける

折りしもあれ嬉しく雪のうづむかなかきこもりなんと思ふ山路を

中々に谷の細道うづめ雪ありとて人のかよふべきかは

谷の菴に玉の簾(すだれ)をかけましや縋る垂氷の軒をとぢずば

花まゐらせけるをりしも、をしきに霰のふりかゝりければ

樒おく閼伽のをしきにふちなくば何に霰の玉とまらまし

大師のうまれさせ給ひたる所とて、めぐりしまはしてそのしるしの松のたてりけるを見て

あはれなりおなじ野山に立てる木の斯るしるしの契ありけり

岩に堰く閼伽井の水のわりなきは心すめともやどる月かな

又ある本に
まんたらじの行道どころへ登るは、世の大事にて、手をたてたるやうなり。大師の御經かきてうづませおはしましたる山の嶺なり。坊の卒塔婆一丈ばかりなる壇つきて建てられたり。それへ日毎に登らせおはしまして、行道しおはしましけると申し傳へたり。めぐり行道すべきやうに壇も二重に築き廻されたり。登る程のあやふさ殊に大事なり。かまへてはひまはりつきて

めぐりあはんことの契りぞ賴もしき嚴しき山の誓ひ見るにも

やがてそれが上は、大師の御師にあひまゐらせさせおはしましたる嶺なり。わがはいしさとその山をば申すなり。その邊の人は、わかいしとぞ申しならひたる。山もじをばすてゝ申さず。又筆の山ともなづけたり。とほくて見れば、ふでに似てまろ〳〵と山の嶺のさきのとがりたるやうなるを、申しならはしたるなめり。行道所よりかまへてかきつきのぼりて嶺にまゐりたれば、師にあはせおはしましたる所のしるしに、塔をたておはしましたりけり。塔の礎はかりなく大きなり。高野の大塔ばかりなりける塔の跡と見ゆ。苺はふかくうづみたれども、石大きにしてあらはに見ゆ。筆の山と申す名につきて

筆の山にかきのぼりても見つるかな苺の下なる岩の氣色を

善通寺の大師の御影には、そばにさしあげて大師の御師かきぐせられたりき。大師のお手などもおはしましき。四の門の額(がく)少くわれて、大方はたがはずして侍りき。末にこそいかがなりけんずらんと、覺束なくおぼえ侍りしか

仁安三
高倉天皇
即位

つくしに、はらかと申すいをの釣をば、十月一日におろすなり。師走に引上げて、京へは上せ侍る。その釣りの繩はるかに遠く引渡して、通る舟のその繩にあたりぬるをばかこちかゝりて、かうけがましく申して、むつかしく侍るなり。その心をよめる

はらか釣る大和田崎のうけ繩に心かけつゝすぎんとぞ思ふ

仁和寺の御むろにて、山家閑居見雪といふことをよませ給ひけるに　（嘉應元十二覺性法親王薨）（嘉應元以前）

ふりつもる雪を友にて春までは日を送るべきみ山べの里

仁和寺の宮にて、道心逐年深といふことを、よませ給ひけるに　（仁和寺の宮、山崎の栗金臺寺に籠ゐさせ給ひたりし頃、道心年をおひてふかしと云ふことをよませ給ひしに（イ））

淺く出でし心の水や湛ふらんすみゆくまゝに深くなるかな

閑中曉心といふことを、同夜

嵐のみ時々まどにおとづれて明けぬる空の名殘をぞ思ふ

泉のぬしかくれて、跡つたへたる人のもとにまかりて、

泉にむかひてふるきをおもふといふことをひとぐよみけるに

すむ人の心くまるゝ泉かな昔をいかにおもひいづらん

嘉應二五 秀衡鎭守府將軍

戀百十首

（參考トナルベキ歌三十三首ヲ拔キ、他ハ略ス、山家集下下參照ノコト）

嘉應元以後安元二以前

思ひあまりいひ出でてこそ池水の深き心のいろはしられめ

中々に忍ぶけしきやしるからん斯る思ひにならひなき身は

氣色をばあやめて人の咎むとも打委せてはいはじとぞ思ふ

逢ふ事のなくてやみぬる物ならば今みよ世にも有りや果つると

歎き餘り筆のすさびに盡くせども思ふばかりは書かれざりけり

我が歎く心のうちの苦しきを何にたとへて君にしられん

さりとよとほのかに人を見つれども覺めぬは夢の心地こそすれ

さるほどの契は何にありながら行かぬ心のくるしきやなぞ

今はさは覺めぬを夢になしはてゝ人に語らでやみねとぞおもふ
あふまでの命もがなと思ひしは悔しかりける我心かな
哀とて人の心のなさけあれな數ならぬには依らぬなさけを
とへかしな情は人の身のためをうき物とても心やはある
河の瀨によに消えぬべきうたかたの命をなぞや君がたのむる
おのづから在り經ばとこそ思ひつれ賴みなくなる我が命かな
こととへばもてはなれたる氣色かなうらゝかなれや人の心の
我ればかり物おもふ人や又もあると唐土までも尋ねてしがな
君に我れいかばかりなる契りありてまなくも物を思ひそめけん
ながめこそうき身のくせとなり果てて夕暮ならぬ折も分れね
今は我戀せん人をとぶらはん世にうきことと思ひしられぬ
おもへども思ふ甲斐こそなかりけれ思ひもしらぬ人をおもへば
君慕ふ心のうちは稚兒めきて淚脆にもなる我身かな

なつかしき君が心のいろをいかで露も散らさで袖につゝまん

ひとり來て我身に纏ふ唐衣しほしほとこそ泣き濡らさるれ

人しれぬ涙に噎ぶ夕暮は引きかづきてぞ打臥されける

思ひきやかゝる戀路に入りそめてよく方もなき歎せんとは

危ふさに人目ぞ常によかれける岩のかど踏むほきのかけみち

かつすゝぐ澤の小ぜりの根を白み清げに物をおもはするかな

いかさまに思ひつづけて恨みましひとへにつらき君ならなくに

恨みても慰みてましなかなかにつらくて人の逢はぬと思へば

打ちたえて君にあふ人いかなれや我身もおなじ世にこそは經れ

とにかくに厭はまほしき世なれども君が住むにもひかれぬる哉

何事につけてか世をばいとはましうかりし人ぞ今は嬉しき

逢とみし其夜の夢の醒であれな長きねぶりはうかるべけれど

此歌、題も、又人にかはりたることゞもありけれどか

かず。此うたども、やまざとなる人のかたるにしたがひてかきたるなり。さればひがことどもや。むかし今のこと取りあつめたれば、時折りふしたがひたることどもも

此集を見てかへしけるに　院少納言の局

巻ごとに玉のこゑせし玉章のたぐひは又もありける物を

かへし

よしさらば光りなくとも玉といひて詞の塵は君みがかなん

同行にて侍りける上人、例ならぬこと大事に侍りけるに、月のあかくて哀れなるを見ける

諸共に眺め眺めて秋の月ひとりにならんことぞ悲しき

作年不明

同行に侍ける上人、をはりよく思ふさまなりと聞きて、申送りけり　西住法師身まかりにけるをはりよかりけりと聞て同行の西住法師につかはしける（月詣）　寂然

亂れずとをはり聞くこそうれしけれさても別れは慰まねども

返し

此世にて又あふまじき悲しさにすゝめし人ぞ心亂れし

とかくのわざ果て跡のことゞもひろひて高野へ參りて、かへりたりけるに　　寂然

入るさには拾ふかたみも殘りけり歸る山路の友は涙か

返し

いかでとも思ひわかでぞ過ぎにける夢に山路をゆく心地して

仁安・嘉應以後ト推定

秋の末に、寂然高野にまゐりて、くれの秋によせておもひをのべけるに（高野へまゐりて元性法印の庵室にて暮秋述懐を（雲葉））

なれきにし都もうとくなり果てゝ悲しさそふる秋の暮かな

殊の外に荒れ寒かりける比、宮ノ法印高野にこもらせたまひて、此程の寒さはいかゞするとて小袖賜はせたりける、又の朝申しける（宮ノ法印高野にこもらせ給ひて、ことの外にあれてさむかりし夜、こそでたまはせたりし、又の朝にたてまつり侍りし（イ））

今宵こそあはれみ厚き心ちして嵐の音をよそにきゝつれ

宮の法印高野にこもらせたまひて、おぼろげにては出でじとおもふに、修行せまほしき由かたらせ給ひけり千日果てゝみたけに參らせ給ひて、いひつかはしける

宮の法印

あくがれし心を道のしるべにて雲に友なふ身とぞなりぬる

か へ し

山の端に月すむまじと知られにき心の空になるとみしより

熊野・那智ノ歌ドモ（作年不明）

熊野へまゐりけるにやがみの王子の花おもしろかりければ社にかきつけゝる

待ちきつる屋上(やかみ)の櫻さきにけり荒くおろすな三栖(みす)の山風

那智にこもりて、瀧に入堂し侍りけるに　此上に一二の瀧おはします、それへまゐるなりと申す住僧の侍りけるにぐしてまゐりけり。花や咲きぬらんと尋ねまほしかりける折ふしにて、たよりある心地して分まゐりたり。二の瀧のもとへまゐりつきたり。如意輪の瀧となん申すときゝて拜みけれぱ、まことにすこしうちか

たぶきたるやうにながれ下りて、尊くおぼえけり。花山院の御菴室の跡の侍りける前に、年ふりたる櫻の木の侍りけるを見て、栖とすればとよませたまひけんこと、思ひ出でられて

木のもとに住みけん跡を見つるかな那智の高嶺の花を尋ねて

那智に籠りし時、花の盛りに出けける人につけて遣しける

ちらでまてと都の花をおもはまし春かへるべき我身なりせば（イ）

五月會に、熊野へまゐりて下向しけるに、日高に、宿にかつみを菖蒲にふきたりけるをみて

かつみふく熊野まうでの泊をばこもくろめといやいふべかるらん（イ）

夏熊野へまゐりけるに、岩田と申す所に涼みて、下向しける人につけて京へ、同行に侍りける上人のもとへつかはしける

松が根の岩田の岸の夕涼君があれなとおもほゆるかな

熊野へまゐりけるに、なゝこしのみねの月を見てよみける

立ちのぼる月のあたりに雲消えて光かさぬる七越の嶺

三重の瀧をがみけるに殊にたふとくおぼえて、三業の罪もすゝがるゝ心地しければ

身につもる言葉の罪も洗はれて心すみぬる三かさねの瀧

熊野御山にて、兩人をこふと申すことをよみけるに、人にかはりて

流れてはいづれの瀬にかとまるべき涙をわくる二川の水（キ）

吉野ノ歌ドモ（作年不明）

國々めぐりまはりて、春かへりて吉野の方へまからんとしけるに、人のこのほどはいづくにか跡とむべきと、申しければ

花をみし昔の心あらためて吉野の里に住まんとぞ思ふ

吉　野　に　て

一すぢにおもひ入りなん吉野山又あらばこそ人もさそはめ（イ追）

山寺の花さかりなりけるに昔をおもひ出て

よしの山ほきぢづたひに尋ね入りて花見し春は一昔かも

龍門にまゐるとて

瀬を早み宮瀧川を渡りゆけば心の底の澄む心地する

（ソノ他、吉野ヲ詠メルウタ数十首アリ、一部分ヲ拔ク）

おもひやる心や花に行かざらん霞こめたるみよしのの山

よしの山こずゑの花を見し日より心は身にもそはずなりにき

山人よ吉野のおくにしるべせよ花も尋ねん又おもひあり

吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん

吉野山櫻がえだに雪ちりて花おそげなる年にも有るかな（イ）

吉野山こぞのしをりの道かへてまだみぬかたの花を尋ねん（イ）

よしの山花をのどかに見ましやは憂きがうれしき我身なりけり（イ）

吉野山奥をもわれぞ知りぬべき花ゆゑ深く入りならひつゝ（キ）

花咲きし鶴の林のそのかみを吉野の山の雲にみるかな（御）

承安元

承安元年六月一日、院熊野へまゐらせ給けるついでに、住吉に御幸ありけり。修行しめぐりて三日の社にまゐりたりけるに、住のえのあたらしくたてたりけるを見て、後三條院の御幸、神も思ヒ出デ給ふらんと覺えてよめる

絕えたりし君が御幸を待ちつけて神いかばかり嬉しかるらん

松の下枝をあらひけん浪いにしへにかはらずやと覺えて。

いにしへの松の下枝を洗ひけん波を心にかけてこそみれ

承安元ト推定

人々住吉にまゐりて月を翫びけるに（院熊野の御幸の次に、住吉に参らせ給たりしに（イ））

かたそぎの行きあはぬまよりもる月やさえて御袖の霜に置くらん

波にやどる月を汀にゆりよせて鏡にかくる住吉のきし

齋院おりさせ給ひて、本院のまへを過ギけるに、人のうちへ入りければ、ゆかしうおぼえてぐして見廻りけ

るに、かくやありけんと、哀におぼえて、下りておはします所へ、宣旨の局のもとへ、申しつかはしける

君すまぬみ内は荒れて有栖川齋む姿をも映しけるかな　　　　宣旨の局

かへし

思ひきや齋みこし人のつてにして慣れしみ内をきかん物とは

齋院おはしまさぬ比にて、まつりのかへさもなかりければ、紫野をとほるとて

紫のいろなき比の野べなれやかたまほりにてかけぬ葵は

承安元

十月中の十日比、法金剛院の紅葉みけるに、上西門院おはしますよし聞きて、待賢門院の御時思出られて、兵衞殿の局にさしおかせける

紅葉見て君が袂やしぐるらん昔の秋の色をしたひて

返し　　　　兵衞の局

色深き梢を見てもしぐれつゝ古りにし事をかけぬ日ぞなき

寄二紅葉一懐舊といふことを、法金剛院にてよみけるに

いにしへを戀ふる涙の色に似て袂に散るはもみぢなりけり

承安二

六波羅太政入道、持經者千人あつめて、津國和田と申す所にて、供養侍りける。やがて、その序に、萬燈會しけり。夜更るまゝに燈の消えけるを、おの〳〵ともしつぎけるを見て

承安二三清盛和田濱ニテ千僧供養ス

消えぬべき法の光のともし火をかゝぐる和田の岬なりけり

安元二ト推定

前大僧正慈鎭、無動寺に住ミ侍りけるに、申遣しける

いとどいかに山を出でじとおもふらん心の月を獨すまして（イ追）

安元二七六條上皇崩御

返し　　慈鎭

うきみこそなほ山陰にしづめども心にうかぶ月をみせばや

仁安三以後治承四以前

高倉院の御時、傳へ奏せさする事侍りけるに、かきそゝへて侍りける

跡とめて古きを慕ふ世ならなむ今もありへば昔なるべし（新勅）

高倉院の時（新勅）

治承二又三

たのもしな君々にますをりにあひて心の色を筆にそめつる（イ）

常よりも道たどらるゝほどに、雪ふかゝりける比、高野へまゐると聞きて、中宮大夫のもとより、いつかみやこへはいづべき、かゝる雪にはいかにと申したりければ、返りごとに

雪分けて深き山路に籠りなば年かへりてや君にあふべき

かへし　時忠卿

分けてゆく山路の雪は深くともとく立還れ年にたぐへて

山ごもりして侍りけるに、年をこめて春になりぬと聞きけるからに、霞わたりて山河の音日ごろにも似ず聞えければ

治承二以後

かすめども年の内とは分かぬまに春を告ぐなる山川の水

兄の入道想空はかなくなりけるを、とはざりければ、いひつかはしける　寂然

治承三七平重盛薨

とへかしな別の袖に露しげきよもぎがもとの心細さを
待ちわびぬ後れ先だつ哀れをも君ならでさは誰かとふべき
別れにし人のふたゝび跡を見ば怨みやせまし訪はぬ心を
いかがせん跡の哀れはとはずとも別れし人の行方尋ねよ
中々に訪はぬは深き方もあらん心淺くもうらみつるかな

かへし

分け入りて蓬が露をこぼさじと思ふも人をとふにあらずや
よそに思ふ別ならねば誰をかは身より外にはとふべかりける
へだてなき法の言葉にたよりえて蓮の露にあはれかくらん
亡き人を忍ぶ思の慰まば跡をもちたびとひこそはせめ
御法をば詞なけれど說くときけば深き哀れはいはでこそ思へ

是は具してつかはしける

露ふかき野べになりゆく古里は思ひやるにも袖しをれけり

ゆかりにつけて、物を思ひける人のもとより、などか
問はざらんとうらみつかはしたりける、返事に

治承四ト推定

哀れとも心に思ふ程ばかりいはれぬべくばとひもこそせめ

寂蓮、人々すゝめて百首の歌よませ侍りけるに、いな
び侍りて熊野にまうでける道に、[夢に]なに事もおと
ろへ行けど、此みちこそ世のすゑにかはらぬ物はあれ、
なほこの歌よむべきよし、別當湛快、三位俊成に申す
と見侍りて、おどろきながら此歌をいそぎよみ出して
つかはしけるおくに、かき付け侍りける

治承四ト推定

すゑの世にこの情のみかはらずと見し夢なくばよそに聞かまし(イ追)

新宮より伊せの方へまかりけるにみきしまにふれの沙
汰しける浦人の、黑き髮は一筋もなかりけるをよびよ
せて

としへたる浦の海士人こととはん浪を潛きて幾世すぎにき

黑髮は過ぐるとみえし白波を潛ぎはてたる身にぞ知る海士

高野の山を住みうかれて後、伊勢の國二見の浦の山寺

に侍りけるに、大神宮の御山をば神路山と申す。大日如來の御垂跡を思ひてよみ侍りける

深くいりて神路の奥をたづぬればまた上もなき峯の松風(以下十一首イ追)

伊勢大神宮にて

宮柱下つ岩ねにしきたてゝ露もくもらぬ日の御影哉

神路山にて

神路山月さやかなるちかひありて天の下をばてらすなりけり

二見の浦にて、月のさやかなりけるに

おもひきやふた見のうらの月をみて明暮袖に浪かけんとは

御裳濯川のほとりにて

岩戸あけしあまつみことのそのかみに櫻を誰か植ゑ始めけん

內宮のかたはらなる山陰に、庵むすびて侍ける頃

此所もまた都のたつみしかぞすむ山こそかはれ名は宇治の里

風の宮にて

この春は花ををしまでよそならん心を風の宮にまかせて

月よみのみやにて

梢みれば秋にかはらぬ名なりけり花おもしろき月よみの宮

櫻の、御まへにちりつもり、風にたはるゝを

神風に心やすくぞまかせつる櫻の宮の花のさかりを

かみ路山みしめにこむる花ざかりこはいかばかりうれしからまし

伊勢の、月よみの社に參りて、月をみてよめる

さやかなる鷲のたかねの雲居より影やはらぐる月よみの森

治承四

福原へ都うつりありときこえし頃、伊勢にて月の歌よみ侍りしに

雲のうへやふるき都に成りにけりすむらん月の影はかはらで（イ）

ふるさとのこゝろを

露しげくあさぢしげれる野と成りてありし都は見し心地せぬ（イ）

治承四 四安德天皇即位、五源賴政擧兵、六福原遷都、八源賴朝擧兵、九木曾義仲擧兵

養和元正高倉上皇崩御、閏二清盛薨

伊勢のにしふく山と申ところに侍りけるに、庵の梅かうばしく匂ひけるを

柴の庵によるよる梅の匂ひ來てやさしき方もある住居かな

伊勢にまかりたりけるにみつと申すところにて海邊の春の暮といふことを神主どもよみけるに

すぐる春潮のみつより船出して波の花をや先にたつらん

郭公

聞かずともこゝを瀬にせん時鳥山田の原の杉の村立（イ）

治承年間ナラン

花歌十首人々よみけるに（一首缺ク）

鶯のなくねに春をつげられて櫻の枝やめぐみ初むらん（以下九首キ）

霞しく吉野の里にすむ人は嶺の花にや心かくらん

花よりは命をぞなほ惜むべき待ちつくべしと思ひやはせし

春ごとの花に心を慰めて六十路あまりの年をへにける

一時に遲れさきだつこともなくよごとに花の盛りなるかな

盛りなるこの山櫻おもひおきていづち心の又うかるらん

吉野山雲と見えつる花なれば散るも雪にはまがふなりけり

水上に花の夕立ふりにけり吉野の川の波のまされる

山人に花さきぬやと尋ぬればいさ白雲と答へてぞ行く

壽永二

左京大夫俊成、うたあつめらるゝと聞きて、歌つかはすとて

花ならぬ言の葉なれどおのづから色もやあると君拾はなん

壽永二 千載集撰進ノ院宣俊成ニ下ル

かへし　俊成

世を捨てゝ入りにし道の言の葉ぞ哀も深き色はみえける

伊勢より、こがひをひろひて箱に入れて、包みこめて

皇太后宮大夫のつぼねへつかはすとて、かき付侍ける

浦島かこは何ものと人とはばあけてかひある箱とこたへよ(イ)

壽永二

公卿勅使に通親の宰相のたゝれけるを、五十鈴のほとりにてよみける

壽永二八 後鳥羽天皇即位

いかばかり涼しかるらんつかへきて御裳濯川を渡る心は（以下六首キ）
とくゆきて神風めぐむみ扉ひらけ天の御影に世を照らしつゝ

おなじ折節の歌に

神風にしきまく四手の靡くかな千木高知りてとりをさむべし
千木高く神漏伎の宮ふきにけり杉のもと木を生き剝ぎにして
世の中を天の御影のうちになせあら潮あみて八百合の神
今もされな昔のことを問ひてまし豐蘆原の岩根このたち

治承四以後元暦元マデノ間

世の中に武者おこりて、にしひんがし北南、いくさならぬところなし。打ち續き人の死ぬる數きく夥し。まこととも覺えぬほどなり。こは何事の爭ひぞや、あはれなることの樣かなとおぼえて

死手の山こゆる絶間はあらじかし亡くなる人の數つゞきつゝ（キ）

武者の限り群れて、死手の山こゆらん、山だちと申す恐れはあらじかしと、此世ならば頼もしくや。宇治の

いくさかとよ、馬筏とかやにて、渡りたりけりと聞えしこと、おもひ出られて

沈むなる死手の山川みなぎりてうまいかだもやかなはざるらん（キ）

上西門院にて若き殿上の人々、兵衞の局にあひ申して、武者のことにまぎれて歌おもひ出づる人なしとて、月の頃、歌よみ連歌つゞけなむどせられけるに、武者のこといできたりけるつゞきの連歌に、

いくさを照らす弓張の月（キ）

伊勢に人のまうできて、かゝる連歌こそ兵衞殿の局せられたりしか、云ひすさみて附くる人なかりき、と語りけるをきゝて

心きる手なる氷の影のみか

元暦元ノ頃ト推定

申すべくもなきことなれども、いくさの折のつゞきなればとてかく申すほどに、兵衞の局武者のをりふし失せられにけり。契りたまひしことありしものをと、あはれにおぼえて

さきだたばしるべせよとぞ契りしに遅れて思ふあとの哀れさ（キ）

佛舍利おはします、我さきだたば迎へ奉れと、契られけり

元暦元

なきあとの重き形見にわかち置きし名殘の末をまた傳へけり（キ）

元暦元正義仲敗死二一谷戰

木曾と申す武者死に侍りにけりな

木曾人は海のいかりを靜めかねて死手の山にも入りにけるかな

文治元

八島內府がまつらにむかへられて、京へ又おくられ給ひけり。武士の、母のことはさることにて、右衞門督のことをおもふにぞとて、なき給ひけると聞きて

文治元二屋島戰、三平氏壇浦ニ亡ブ

夜の鶴の都のうちを出でであれなこのおもひにはまどはざらまし（イ）

伊勢にて菩提山上人、對月述懷し侍りしに

文治元ト推定

めぐりあはで雲のよそにはなりぬとも月に成り行くむつび忘るな（イ）

伊勢に齋王おはしまさで年へにけり齋宮木立ばかりさりとみえて、築垣もなきやうになりたりけるを見て

治承四以後文治三ノ間

いつか又齋の宮のいつかれて注連のみ內に塵をはらはん

五條三位入道のもとへ、いせよりはまゆふつかはしけるに

濱木綿に君が千歳のかさなれば世に絕ゆまじきわかの浦波（キ）

かへし　釋阿

濱木綿にかさなる歲ぞあはれなる和歌の浦波世に絕えずとも（キ）

いせにて、神主氏良がもとより、二月十五日の夜曇りたりければ、まうし送りける　氏良

今宵しも月のかくるゝ浮雲や昔の空のけぶりなるらむ（キ）

かへし

かすみにし鶴の林はなごりまて桂のかげもくもるとを知れ（キ）

伊勢ノ歌ドモ

修行して伊勢にまかりたりけるに、月の比、都おもひ出でられてよみける

都にも旅なる月の影をこそおなじ雲井の空にみるらめ

伊勢のいそのへちの錦の島に磯曲の紅葉のちりけるを見て

浪にしく紅葉のいろをあらふ故に錦のしまといふにやあるらん

大神宮御祭日によめる

何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさのなみだこぼるゝ（イ）

伊勢にて

流たえぬ浪にや世をば治むらん神風涼し御裳濯の川（イ）

伊勢にまかりたりけるに、大神宮にまゐりて、よみける

榊葉に心をかけん木綿四手のおもへば神も佛なりけり

海上明月をいせにてよみけるに

月やどる波のかひにはよるぞなき明けて二見を見る心地して（キ）

よろづのことよみける歌に

逆櫓おす立石崎の白波は惡しき潮にもかゝりたるかな（キ）

ふりず名をすゞかになるゝ山賊はきこえ高きもとりどころかな（キ）

文治二

あづまのかたへ、あひしりたる人のもとへまかりける

に、さやの中山見しことの、昔になりたりける、思出られて

年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山（イ）

するがの國くのゝ山寺にて月を見てよみける

涙のみ掻き暮らさるゝ旅なれやさやかに見よと月はすめども

東國修行のとき、ある山寺にしばらく侍て

山たかみ岩ねをしむる柴の戸にしばしもさらば世をのがればや（イ追）

名所の月といふ事を

淸見がた沖の岩こすしら波にひかりを交す秋の夜の月

あづまの方へ修行しはべりけるにふじの山をよめる

（新古今）

風になびく富士の煙の空にきえて行へも知らぬ我思ひかな（イ）

相模の國砥上が原にて

しかまづの葛のしげみに妻こめて砥上が原に雄鹿鳴くなり（イ追）

下野、武藏のさかひ川に、舟わたりをしけるに、霧ふかゝりければ

霧ふかきけふのわたりのわたし守岸の舟つき思ひさだめよ（イ

下野國にて、柴のけぶりを見てよみける

都ちかき小野大原をおもひいづる柴の煙のあはれなるかな

さきに入りて信夫と申す渡り、あらぬ世のことに覺えてあはれなり。都出し日數おもひつゞけければ、霞と共にと侍ることの跡たどるまで來にける。心ひとつに思知られてよみける

都出でて逢坂こえし折りまではこゝろかすめし白河の關

題しらず

東路や信夫の里にやすらひて勿來の關をこえぞわづらふ（新勅）

あづまへまかりけるに、忍の奥に侍ける社のもみぢを

ときはなる松のみどりも神さびて紅葉ぞ秋は朱の玉垣

ふりたる棚橋を紅葉のうづみたりける。渡りにくゝてやすらはれて、人に尋ねければおもはくの橋と申すはこれなりと申しけるを聞きて

踏まゝうき紅葉の錦ちりしきて人も通はぬおもはくの橋

しのぶの里よりおくに二日ばかりいりてあり武隈の松は昔になりたりけれども、跡をだにとて、見にまかりてよみける

枯れにける松なき宿の武隈は見きと云ひてもかひなからまし

名取河を渡りけるに、きしの紅葉のかげを見て

名取川きしの紅葉のうつるかげは同じ錦を底にさへ敷く

みちの國にまかりたりけるに、野中に常よりもとおぼしき塚の見えけるを、人にとひければ、中將の御墓と申すはこれがことなり、と申しければ、中將とは誰がことぞと又とひければ、實方の御事なりと申しける、いとかなしかりける。さらぬだに物哀におぼえけるに、霜枯のすゝきほの〴〵見え渡りて、後にかたらん詞な

きやうにおぼえて

朽ちもせぬ其名ばかりをとどめおきて枯野の薄形見にぞ見る

十月十二日、平泉にまかりつきたりけるに、雪ふり嵐はげしく事の外あれたりけり。いつしか衣河みまほしくて、まかりむかひて見けり。河の岸につきて衣河の城しまはしたる事柄、やうかはりて物を見る心ちしけり。汀こほりて取分けさびければ

とりわきて心もしみてさえぞ渡る衣河みにきたる今日しも

奈良の僧、とがのことによりて、あまた陸奥國へつかはされしに、中尊と申所にまかりありて、都の物語すれば涙をながす、いと哀なり。かゝることはかたきことなり、命があらば物がたりにもせんと申して、遠國述懐と申ことをよみ侍りしに

涙をば衣川にぞながしつるふるきみやこをおもひ出でつゝ（イ）

陸奥國にてとしのくれによめる

常よりも心細くぞおもほゆる旅の空にて年の暮れぬる

文治三

みちのくにに、平泉に向ひて束稲と申す山の侍るに、異木は少きやうにさくらのかぎり見えて、花のさきたるを見てよめる

文治二三ノ交義經秀衡ニ投ズ

きゝもせずたわしね山の櫻花吉野のほかに斯るべしとは
奥になほ人見ぬ花のちらぬあれや尋ねを入らん山郭公

又の年の三月に、出羽國にこえて、瀧の山と申す山寺に侍ける。櫻の常よりも薄紅の色こき花にてなみたてりけるを、寺の人々も見興じければ

たぐひなき思ひいではの櫻かな薄紅の花のにほひは

おなじ旅にて

風あらき柴の菴は常よりも寢覺めぞ物はかなしかりける

遠く修行し侍けるにきさがたと申所にて

文治三九千載集奏覽

松島や雄島の磯も何ならずたゞ象潟の秋の夜の月（イ追）

文治三

かきつけて遣はしける歌合のはしに聖人かきつけたる歌（長秋詠藻）

文治三十秀衡卒

藤浪を御裳濯川にせき入れて百枝の松にかけよとぞおもふ（同）

返事に歌合のおくに書きつけける（長秋詠藻）

俊成

藤浪もみもすそ川の末なれば下枝もかけよ松の百枝に（同）

又おくの歌（長秋詠藻）

契りおきし契の上にそへおかむ和歌の浦わのあまのもしほ木（同）

この道の悟りがたきを思ふにも蓮開けばまづ尋ねみよ（同）

かへし二首後日におくる（長秋詠藻）　西行

和歌の浦にしほ木かさなる契りをばかける焚物あとにてぞしる（同）

さとりえて心の花の開けなば尋ねぬさきに色ぞそむべき（同）

晩年作

嵯峨に住みけるに、たはぶれ歌とて人々よみけるを

うなゐ兒がすさみに鳴らす麥笛のこゑに驚く夏の晝臥（以下十三首キ）

昔かないりこかけとかせしことゝあこめの袖に玉襷して

竹馬を杖にも今日はたのむかなわらは遊びを思ひいでつゝ

むかしせし隱れ遊びになりなばや片隅ごとに寄り伏せりつつ
篠ためて雀弓張る男のわらは額烏帽子のほしげなるかな
我もさぞ庭の眞砂の土あそびさておひたてる身にこそ有りけれ
高尾寺あはれなりけるつとめかなやすらひ花と鼓うつなり
いたきかな菖蒲かぶりの茅巻馬はうなゐわらはのしわざとおぼえて
入相のおとのみならず山寺は書よむこゑもあはれなりけり
戀ひしきを戲れられしそのかみのいわけなかりし折の心は
いしなこの玉の落ちくるほどなきに過ぐる月日は變りやはする
いまゆらもさてこかゝれるいさゝめのいさ又知らすこひさめのよや
ぬなははふ池に沈める立石のたてたることもなきみぎはなる

晩年作ト推定

地獄畫を見て

（廿七首アルモ、最初ノ一首ノミ拔ク、聞書集參照ノコト）

見るも憂しいかにかすべき我心かかる報いの罪やありける

文治四ノ頃ト推定

花の歌あまた詠みけるに

願はくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月の頃

文治四又五ト推定

題しらず

山ふかくさこそ心はかよふともすまで哀れは知らむ物かは

文治五

西行上人みもすその歌合と申して判すべきよし申ししをいふかひなく若かりし時にてたび〳〵かへさひ申ししをあながちに申しをしふる故侍りしかば書きつけて遣はすとて　定家

山水の深かれとてもかきやらず君が契をむすぶばかりぞ（以下四首拾遺愚草）

かへし　西行

結び流す末に心をたたふれば深くみゆるを山川の水

又

神路やま松の梢にかかる藤の花の栄えを思ひこそやれ

又かへし　定家

文治五閏四義経死

文治五七上西門院崩御

神路やま君が心の色をみむ下葉の藤の花し開けば

と申し送りし頃少將になりてあくる年（建久元年）思ふ故ありて望み申さざりし四位にして侍りき

宮川歌合のおくに　　定家

君はまつ憂世の夢はさめぬとも月と花とを眺めおかなむ（宮）

かへし　　西行

春秋を君おもひ出でばわれはまた月と花とを眺めおかなむ（宮）

作年未勘ノ歌ドモノ中ニ

人々まうで來て、山里戀といふことを（隆信などまうで來て山家戀といふことをよみけるに）（竹柏園本）

筧にも君がつらゝやむすぶらん心細くもたえぬなるかな

阿闍梨勝命、千人あつめて法華經結縁させけるにまゐりて、又の日つかはしける（鎮守府將軍利仁ノ曾孫坂戶判官後藤則明ノ孫ニテ、西行トハ義理ノ再從兄弟）

つらなりし昔に露もかはらじと思ひしられし法の庭かな

人にかはりて、これもつかはしける

古へにもれけんことの悲しさは昨日の庭に心ゆきにき

素覺俗名藤家基、刑部少輔、俊成ノ従兄弟

述　　懐　素覺がもとにて、俊惠と罷合て、述懐し侍しに（イ）

何事にとまる心のありければ更にしもまた世のいとはしき

俊惠永久元生レ歿年不明ナルモ長壽

俊惠天王寺にこもりて、ひとぐぐして住吉にまゐりて歌よみけるにぐして

住吉の松が根あらふ波のおとを梢にかくる沖津白浪

忍西西忍同一人カ。西忍ハ法然ノ弟子。續詞花集コレヲ寂蓮トセルガ恐ラク別號

忍西（西忍（イ））入道西山のふもとに住みけるに、秋の花いかにおもしろからんとゆかしうと申しつかはしける返り事に、いろいろの花を折りあつめて　西山にすみける頃、嵯峨の花ども折りて人の許へ遣すとて、寂蓮法師（續詞花）

忍　西

鹿のねや心ならねば止るらんさらでは野べをみなみするかな

か　　へ　　し

鹿の立つ野べの錦のきりはしは殘り多かる心地こそすれ

公衡ノ事ナラント尾山氏イフ

世に仕へぬべきやうなるゆかりあまたありける人の、さもなかりける事をおもひて、清水に年越に籠りたりけるに、つかはしける

この春は枝々ごとに榮ゆべし枯れたる木だに花はさくめり

是もぐして

あはれびの深きちかひに頼もしき清き流の底くまれつゝ

世につかふべかりける人の、こもりゐたりけるもとへつかはしける

世の中にすまぬもよしや秋の月濁れる水の湛ふ盛りに

鹽湯にまゐりたりけるに、倶したりける人九月晦日にさきへ上りければ、つかはしける人にかはりて

秋はくれ君は都へ上りなばあはれなるべき旅の空かな

かへし　　大宮の女房加賀

君をおきて立ちいづる空の露けさは秋さへくるゝ旅の悲しさ

福原遷都ノ年ノ事カ

しほ湯いでて都へ歸りまうで來て、故郷の花霜枯にけるあはれなりけり。いそぎ歸りし人の許へ又かはりて

露おきし庭の小萩もかれにけりいづち都に秋とまるらん

かへし　　おなじ人

したふ秋は露もとまらぬ都へとなどて急ぎし舟出なるらん

陰陽頭に侍りけるものに、ある所のはしたもの物申しけり。いとおもふ樣にもなかりければ、六月晦日に、つかはしけるに、かはりて

我が爲につらき心を水無月の手づからやがて祓ひ捨てなん

天王寺にまゐりけるに、雨のふりければ、江口と申す所に宿をかりけるに、かさゞりければ

世の中をいとふまでこそかたからめかりの宿りを惜む君かな

返し　　遊女たへ（イ）

家を出づる人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ

かく申してやどしたりけり（イ）

侍宵小侍従ノコト

院の小侍從例ならぬこと大事にふし沈みて、とし月へにけりと聞きてとぶらひにまかりたりけるに、此ほど少しよろしき由申して、人にも聞かせぬ和琴の手ひきならしけるを聞きて

琴のねに淚をそへてながすかな絕えなましかばと思ふあはれに

かへし　　小侍從

賴むべきこともなきみを今日までも何に懸れる玉の緖ならん

西行西住理性院ノ法脈ヲ傳フ

醍醐に東安寺と申して理性房の法眼の房にまかりたりけるに、遽に例ならぬことありて大事なりければ、同行に侍りける上人達まで來あひたりけるに、雪の深く降りたりけるをみて、心におもふことありてよみける

賴もしな雪をみるこそ知られぬる積るおもひのふりにけりとは（キ）

かへし　　西住上人

さぞな君こゝろの月をみがくには數々四方に雪ぞしきける（キ）

持明院西基家八中納門通基ノ二男、母待賢門院女房上西門院乳母大夫局

北白河のもといへの三位の許に、行蓮法師にあひてまかりたりけるに、心にかなはざる戀といふことを人々よみけるに、まかりあひて

物思ひて結ぶたすきのおひめよりほどけやすなる君ならなくに　（玉）

秋物へまかりける道にて　鴫（イ）　題しらず（新古）

心なき身にもあはれは知られけり鴫たつ澤の秋の夕ぐれ

はるかなる所にこもりて都なりける人のもとへ月のころつかはしける　旅にまかりて（イ）

月のみやうはの空なる形見にて思ひも出でば心通はん

修行してとほくまかりけるをり、人の思ひへだてたるやうなることの侍りければ

よしさらば幾重ともなく山越えて驄も人に隔てられなん

はかなくなりて年へにける人のふみを、物の中より見

傳記上ノ暗示ヲ含ミ、又ハ參考トナルベキ歌ドモ

出て、むすめに侍りける人の許へみせにつかはすとて

涙をやしのばん人はながすべきあはれに見ゆる水莖のあと

ゆかりありける人はかなくなりにける、とかくのわざに鳥部山へまかりてかへりに

かぎりなく悲しかりけり鳥べ山なきを送りてかへる心は

八月つきの比夜ふけて北白川へまかりけり。よしある樣なる家の侍りけるに、琴のおとのしければ、立どまりてきゝけり。折哀に秋風樂と申すがくなりけり。庭をみいれければ、淺ぢの露に月のやどれるけしきあはれなり。垣にそひたる荻のかぜ身にしむらんとおぼえて、申入れてとほりたり

秋風の殊に身にしむ今宵かな月さへすめる宿の景色に

とし比、申しなれたりける人に、とほく修行するよし申してまかりたりけるに、名殘おほくて立ちけるに、紅葉のしたりけるを見せまほしくて侍りつるかひなく、いかにと申しければ、木の下に立ちよりてよみける

心をば深き紅葉の色に染めて別れて行くや散るになるらん

年比申されたる人の伏見に住むと聞て尋ねまかりたりけるに、庭の道も見えずしげりて蟲鳴きければ

青申なれたりし人の世のがれて後、伏見にすみ侍しを、尋てまかりて、庭の草ふかゝりしを分入て侍しに、蟲のこゑあはれにて(イ)

分けて入る袖に哀をかけよとて露けき庭に蟲さへぞなく

ある人世をのがれて、北山寺にこもりゐたりと聞きて尋ねまかりけるに、月あかゝりければ

世を捨てゝ谷ぞこに住む人見よと嶺の木のまをいづる月かげ

人を尋ねて、小野にまかりけるに、鹿の鳴ければ

鹿のねを聞くにつけても住む人の心しらるゝ小野の山里

東山に清水谷とまうす山寺に、世遁れて籠りゐたりける人の、例ならぬこと大事なりときゝて、とぶらひにまかりたりけるに、跡の事など思ひ捨てぬやうに申し置きけるをきゝてよみ侍りける

厭へたゞ露のことをも思ひ置かで草の庵の假初めの世ぞ(ミ)

かく申したりけるをきゝて、何事も思ひ棄てゝ終りよく侍りけり

故宅四首

題しらず

いそのかみ古きすみかに分け入れば庭の淺茅に露ぞこぼるゝ

百首の歌よみ侍りけるに（新古今）

これや見し昔すみけん跡ならんよもぎが露に月のやどれる（イ）

月すみし宿も昔の宿ならで我みもあらぬ我身なりけり（イ）

庭（新古今）

昔見し宿の小松に年ふりて嵐の音を梢にぞ聞く（イ）

風わづらひて山寺へかへり入りけるに、人々訪ひて、よろしくなりなば又と申侍りけるに、おの〳〵志を思ひ知りて

さだめなし風わづらはぬ折だにも又こんことを賴むべき世に

遠く修行しけるに、人々まうできて餞しけるに、よみ

侍りける

たのめおかむ君も心やなぐさむとかへらんことはいつとなけれど

相知りたりける人の、みちのくにへまかりけるに、別　（イ）
のうたよむとて

君いなば月待つとても眺めやらん吾妻の方の夕暮の空

年頃きゝ渡りける人に、初て對面申してかへる朝に

別るともなるゝ思ひを重ねまし過ぎにし方の今宵なりせば

無言行

無言なりける比時鳥の初聲をきゝて

時鳥人に語らぬ折にしもはつ音きくこそ甲斐なかりけれ

連作

淺からず契りありける人のみまかりにける。あとの男、
心のいろかはりて、昔にも遠退るやうに聞えけり。古
里にまかりたりけるに、庭の霜をみて

折りにあへば人も心ぞ變りける枯るゝは庭の葎のみかは（以下六首キ）

あはれみし袖の露をば結ひかへて霜にしみゆく冬がれの野邊

亡き跡を誰訪ふべしとおもひてか人の心の變りゆくらん

墓にまかりて

おもひでし尾上の塚の路絶えて松風かなし秋の夕闇

あさぢ深くなりゆくあとを分けいれば袂こそまづ露は散りける

かへりまうできて、男の許へ、なきかげにもかくやと

おぼえ侍りつると、まうしつかはしける

思ひ出でてみ山おろしの悲しさを時々だにも訪ふ人もがな

補遺

熊野に籠りける頃正月に下向する人に

つけて寂蓮に遣しける文の奥にただ今

覺ゆる事を筆にまかす也と書きて

治承四
と推定

霞しく熊野がはらを見渡せば波の音さへゆるくなりぬる（寂蓮法師集）

かへし　　　　　　寂　蓮

聲さへあはれ重ぬるみ熊野の濱ゆふぐれを思ひこそやれ

後記

本文中にも屢述の如く、私は撰集抄・西行物語・西行一生涯草紙其他一切の假託書・僞書・傳說・小說の類（約言すれば西行說話なるもの）を撥無して「西行」を書いた。此の方法に就いては勿論異議を豫期する。說話の中には往々にして多分の眞實を藏し、それらを加味する事によつて、人間西行が完全に近く再現するではないか、といふ異議である。それも甚だ尤もな考へ方であらうけれども、愚按によれば、惜しむらくは、鎌倉以降現代に至るまで、西行說話は大抵善く利用されずして、惡く、又は誤つて使用された場合の方が多い。大日本史の如きに於いてさへさうであつた。それで、淺學の私は、東圃博士の教に從ひ、危きに近寄らざる方法を採るべく決意した次第である。才分に自信ある

人は、虎穴に入つて虎兒を捕るがよい。

小著執筆に當つては、古今さま〴〵の人々から援助を蒙つたこと、言ふ迄もない。就中、いちじるしきものを擧げて、謝意を表する。藤岡東圃博士の遺文に就いては、既に小著の「序」に書いておいた。博士歿後、學問の進歩や新資料の發見等によつて、博士の西行論に幾何かの誤謬を認めねばならなくなつたとしても、それは已むを得ぬことだ。私は博士から直接敎へて戴く幸福を有しなかつた。唯一度、ある夏、年少の時、佐佐木信綱大人のお伴して大磯の海濱を歩いてゐると、行きあつた。大人と博士と、暫時何事か立ち話された。博士は瘠せて、小柄で、色くろく、浴衣がけ、村夫子といつたやうな外見であつたとおぼろげに記憶する。さうして、こんな事さへ、今日なつかしい思ひ出となつた。昭和四年三月信綱大人によつて學界に紹介された聞書集、並に同九年四月、伊藤嘉夫氏によつて發見された聞書殘集は、共に私共研究者に貴重なる資

料を提供し、人間及び歌人としての西行を擴大する結果となつた。二つの發見は劃期的事實である。尾山篤二郎氏の「西行法師全集」大正十一年刊其他の編著は、西行と交渉ありし人々、西行關係の地跡等を箇別に取調べ、確實なる資料を整備して實傳に着手しようとする態度を示した。西行研究上かやうの態度を執つたのは、尾山氏が最初かと思ふ。高根政次郎氏の「歌人西行」昭和八年刊は尾山氏と同樣の方法を採り、研究内容が更に一層綿密精確になつた觀がある。高根氏は近頃死去せられた由、傳聞する。惜しむべき人を亡くした。私の「西行」が尾山・高根兩氏に負ふ所頗る多きは、申す迄もない。又、まとまつた著述でなくとも、「心の花」昭和十年十一月に揭げられた伊藤嘉夫氏の西行と明惠との關係に就いての文章、「多磨」昭和十三年四月以降に連載された富倉二郎氏の大原三寂の研究、「水甕」昭和十四年一月に出た上田英夫氏の西行の淨土的志向云々の論說等は、いづれも私に有益なる知識を與へてくれた。西行は大物である。衆智をあつめて、はじ

めて描出し得るに庶幾い。

此の小著、もとより、取立てて獨創と云ふべき程のものを含まない。むしろ屢々、未熟の斷定を敢へてしたかも知れぬ。西行傳記の期別に就いては、數年前、私は初期・中期・末期に三大別する案を考へたのであつたが、その後、熟慮の結果、五期案に改めた。出家直後は洛外に居住したものと推定し、これを第二期とした事に就いては、異論も多かる可しと豫期する。第三・第四の兩期三十餘年を高野中心に生活したとする私案に對しては、一層反對論が多からうと思ふ。高野を中心にして京都や地方に出掛けたものか、京都（精しく云へば洛外の隱棲地）を中心にして屢々高野に往復したものか、實は、いづれとも考へられ、又いづれにも確證は無いのである。かういふ問題は研究した擧句の勘で勇斷するより他は無い。

將に校正を了らんとするに際し、たま〳〵伊藤嘉夫氏から速達郵便が屆けら

れた。披いて見ると、西行の歌數首發見云々の報告で、その中に、

ありし娘のこと常に思ひ出でられて

山かげの庵は人目ばかりにてけふは心のすまばこそあらめ

といふ一首あり、さうして新發見の歌の出典はいづれも竹柏園架藏七家和歌集合綴本山家集云々、とのことであつた。これで、西行を獨身とする愚案はとゞめを刺されたのかも知れぬ。但、伊藤氏の擧げた竹柏園架藏山家集なるものの傳來や價値を私は未だ承知してゐない。かうして、西行研究は無限に續く。

西行畢

西行

昭和十四年十一月五日印刷
昭和十四年十一月十日發行
昭和十五年二月廿八日九版發行

定價壹圓參拾錢

著者 川田順

發行者 矢部良策
大阪市西區靱上通一丁目三一

印刷者 馬場祐次郎
大阪市東淀川區豊崎西通三丁目

版元

東京市四谷區愛住町十九
大阪市西區靱上通一丁目
創元社
振替東京一五六五番 電話四谷八三八一番
振替大阪五七〇九九番 電話土佐堀三一八六番

商業グラビヤ印刷所印行

創元選書の刊行について

良書は永遠の若さに輝き、萬人に必讀さるることを深く欲する。如何なる新しきものよりも常に新しく、あらゆる文化の源泉となって盡くることを知らない。良書の普及こそは身を出版にささげる者の片時も忘るることを得ない責務である。吾人は絶えずその點に留意し、あくまで公明なる手段と眞摯なる努力を以て、躍進日本の要望に副ひ、且出版事業の眞使命に悖らざらんことを念願として來た。

如上の微意に基づき吾人は茲に『創元選書』を刊行せんとする。收むる所は眞に萬人の血となり肉となるべきあらゆる種類の良書であるが、これが選擇には獨自の立場から愼重なる檢討を重ね、有名無名たるを問はず、專らその本質的價値にのみよる可きことを主眼としたものである。しかも體裁の典雅、印刷の鮮明、製本の堅牢、價格の低下等に細心の注意をはらひ、飽くまでも世の讀書子の共有たらんことを期した。吾人は本選書が微力ながらも國民の教養を高め、正しき批判的精神と良心的行動との良き指針の一助ともなり、將來日本の文化建設の礎石とならんことを切望して歇まぬ。

昭和十三年十二月

創元選書既刊目錄

柳田國男著　**昔話と文學**（1）　定價一圓二十錢　送料十錢

本邦民俗學の泰斗たる柳田先生が、昔話と文學との間の未決着な諸問題を、驚くべき豐富な資料から究明し、わが民族の過去に於ける精神生活を明瞭にすると共に言語藝術としての文學の將來をも暗示されたもの。

野上豐一郎著　**世阿彌元清**（2）　定價一圓　送料十錢

世阿彌の組織立てた藝術理論は日本の全ての藝術表現の原理として現代でも普遍的と認められる。世阿彌を多年研鑽せる野上氏の本書は、現在に於ける最も信憑すべき世阿彌傳であり、中世文化の一側面史である。

宇野浩二著　**ゴオゴリ**（3）　定價一圓二十錢　送料十錢

宇野氏は多年ゴオゴリに私淑し、日本のゴオゴリと言はれ、その抒情的才能と諷刺的才能とはゴオゴリを彷彿させる。氏は不幸な一生を送つたゴオゴリの人とその作品に就いて、前人未踏の傳記文學を打ち樹てた。

横光利一著　**家族會議**（4）　定價一圓五十錢　送料十錢

東京と大阪との商人氣質、習慣、家法などの對立を緯とし、男女人物の道義と愛情との衝突を經とした横光氏が苦心の小說であつて、恰も近松の世話物にも匹敵する構想の妙と文藻の美を心ゆくまで發揮せる名篇。

小林秀雄著　**文學**（5）　定價一圓　送料十錢

批評家とは言へ小林氏は現代のどの作家よりも作家らしい活動をしてゐる。世の俗論に對して痛烈な批評を加へた本書は、現代日本の誠實な良心に與へる貴重な警告であり、新文化創造のためのよき糧であらう。

創元選書既刊目錄

眞船豊著　見知らぬ人（16）　定價一圓二十錢　送料十錢

眞船氏ぐらい强靱な生活力を持ち、それをその作品の上で嘘僞りなく證明して見せてくれる劇作家は尠い。いづれも作品の底には、靜かな妖氣がただよひ、紋切型に陷らず、現代人の中のドラマ性を摑み出した最も底深い感動がある。

堀辰雄著　かげろふの日記（17）　定價一圓　送料十錢

「源氏物語」等に深い影響を與へてゐる「蜻蛉日記」の本質的なものを、著者堀氏は今日のわれわれの新しい言葉をもつて生かし、同時に日記作者たる一女性の潑剌たる感情及び心理を完全に描き出した。文壇近時の一大收穫。

ヴァレリイ著　吉田健一譯　精神の政治學（18）　定價一圓　送料十錢

ヴァレリイの不朽の名著『ヴァリエテ3』の中から、「精神の政治學」「知性について」「地中海の感興」「レオナルドと哲學者達」を譯出した。現代ヨーロッパ精神の解説書として、萬人の必讀を要請してやまない。

チェーホフ著　湯淺芳子譯　妻への手紙（19）　定價一圓二十錢　送料十錢

本書は、チェーホフの興深い私的生活や、演劇への示唆を含み、また彼が如何に人間の價値才能を高く評價し、それを生かす爲に如何に自身の不自由や苦痛を堪へた人であつたかを教へる。彼の文學を愛し研究する人にとつて最適の書だ。

佐藤信衞著　冬の一夜（20）　定價一圓二十錢　送料十錢

この對話體をもつて書きつづられた一巻には、若い科學者と小説家とが登場して、自然、道德、人生、社會、宇宙等々に關する諸問題を忌憚なく討究し、人性を正し、恒久普遍なるリアリテを求めようとする。現代人必讀の書。

創元選書既刊目錄

岸田國士著　歳月　(21)　定價一圓　送料十錢

フランス近代劇の精髓を優れた個性をもつて移植し、我國演劇界に純正演劇の地歩と傳統を樹立した輝かしい名作「紙風船」「牛山ホテル」「歳月」の三篇を收めた傑作集。他の戯曲は自ら抹殺してもよいとさへ云はれる代表作集である。

山上八郎著　日本の甲冑　(22)　定價一圓四十錢　送料十錢

學士院賞を獲たる「日本甲冑の新研究」の中から、著者自ら萬人の興味をそそるべき箇所を拔萃し、その後の研究の成果を加へて首尾一貫せる小册に纒め、以て原著の精髓を傳へた貴重な文獻。名實共に斯界第一の書である。

ドラクロア著　植村鷹千代譯　藝術論　(23)　定價一圓二十錢　送料十錢

ユーゼーヌ・ドラクロアは、フランス大革命の精神を體得した「新しい人間」の典型であり、フランス繪畫に於ける天才的表現者であつた。眞實の美の意識に透徹した巨匠のこの藝術論こそ、近代文化史上に燦然たる光を放つ無二の名著。

萩原朔太郎著　詩集　宿命　(24)　定價一圓四十錢　送料十錢

宿命は「散文詩」と「抒情詩」と書下しの「附錄」＝散文詩自註＝の三部を合編したもので、著者の至純な藝境の高次なもののみが點綴してある。この書は、著者を知る上にも又その詩情にふれるにも又とない好書である。

柳田國男著　國語の將來　(25)　定價一圓五十錢　送料十錢

日本語を愛する者なら誰でも、それに對して樣々な疑問や興味や危惧を抱かずにはゐまい。氏は高い教養と傑れた見地から、時代環境の變化に應じ、より立派に、より健全に發達し得るよう、これが眞の愛護を說きその將來を豫測された。